ようこそ堀北至上主義の教室へ

かわらまち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｄクラスに配属された鳴海幸は入学初日に堀北鈴音に一目惚れ。堀北の毒舌を浴びながらも鋼のメンタルでアタックしまくる鳴海幸に春は訪れるのか……。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 8
第3話 …… 16
第4話 …… 27
第5話 …… 36
第6話 …… 43
第7話 …… 49
第8話 …… 56
第9話 …… 63
第10話 …… 70
第11話 …… 80
第12話 …… 93
第13話（前編） …… 101
第13話（後編） …… 112
第14話 …… 124
第15話 …… 134

第1話

東京都高度育成高等学校。この学校には、一般的な高等学校とは異なる特殊な部分がある。学校に通う生徒全員に敷地内にある寮での学校生活を義務付けると共に、在学中は特例を除き、外部との連絡を一切禁じていることだ。たとえ両親や兄弟であっても、学校側の許可なく連絡を取ることは許されない。当然ながら許可なく学校の敷地から出ることも固く禁じられている。それだけ聞けば、かなりヤバい高校で、進学したいなどと思う奴はただのドＭか、自殺志願者だろう。

しかし、この学校を目指す生徒は腐るほどいる。なぜならこの学校は未来を支えていく若者を育成することを目的として日本政府が直々に建設した、進学率・就職率１００％と言われる進学校たからだ。

つまり、この学校に入れば将来を約束されたも同然ということだ。さらには、６０万平米を超える広大な敷地内にスーパーやコンビニ、カラオケやシアタールーム、カフェやブティックなど数多くの施設が存在し、生活に困ることはないという。

こんな嘘みたいな学校に通いたいと誰もが憧れる。俺もそのうちの一人であり、合格をつかみ取った勝ち組なのだ。まさに薔薇色の高校生活が幕を開ける！

「俺の薔薇色の高校生活はどこにいった！堀北ちゃん！」

俺の雄たけびが教室に響く。クラスメイトは何事かとこちらに視線を向けるが、大声の発生源が俺だと分かると、「ああいつものか」といった感じに各々の話へ戻る。唯一俺に視線を向けているのは目の前に座る黒髪の美少女。向けられる視線はとても冷ややかだ。

「……いきなり何を言っているのかしら」

嫌々ながらも返答をしてくれた堀北ちゃん。無視をする方が面倒臭いことになることをこの1カ月程で学んだのだろう。できる女は違うぜ。

「だからさ、俺の薔薇色の高校生活だよ」
「頭でもおかしくなったのかしら？いえ、元々おかしかったわね」
　堀北ちゃんに物凄い怪訝そうな顔をされる。まぁ、いつものことだから気にしない。
「だって聞いてた話と違うじゃん！学校の恩恵を受けれるのがＡクラスだけとかさ！入るだけでどこでも就職できるんじゃなかったの！」
「うるさいわね。あまり吠えないでくれるかしら。耳障りだし目障りだわ」
「だってさー」
「だっても何もないわよ。そもそも、そんな事を当てにしていたのが愚かなのよ」
「えー。みんな、それが理由でこの学校に入学してるんじゃないの？」
「少なくとも私は違うわ。あなたみたいな変人と一緒にしないで頂戴。不快よ」
「じゃあ何でここに入学したん？」
「……あなたには関係のないことよ」
　堀北ちゃんは視線を窓の方へ移すことにより拒絶の意を示す。これは聞いても教えてくれないだろうな。踏み込んだら間違いなく怒られる。
「でもさ、ほとんどの人は俺と同じ考えで入学したと思うよ。とくにうちのクラスメイトはさー」
　教室を見渡すとクラスメイト達が騒いでいるのが目に入る。話題は先ほど担任の茶柱先生から通告されたこの学校の本当のシステムについて。
「堀北ちゃんはポイント残ってるの？」
「当たり前よ。この先どうなるかもわからないのに無暗に使うわけないでしょ」
「堅実だね。将来はいいお嫁さんになるね。もちろん、俺の」
「なる気もないしなる予定もないわよ」
　この学校ではＳシステムと言われるものが存在し、敷地内での買い物などはこのＳシステムのポイントで取引される。先生曰く、このポ

イントで買えないものはないらしい。入学初日に１０万ポイントを支給されたのだが、今月になるとポイントは１円も支給されなかった。毎月１０万ポイントを支給されるのだと思い込んでいた生徒が結構いて、ポイントを１カ月でかなり消費してしまったようだ。
「って、クラスの有象無象どもの事なんかどうでもいい。それより、堀北ちゃんは将来、結婚する気がないの!?」
「別にどうでもいいでしょ」
「よくないわ！結婚する気がなかったら俺の妄想している堀北ちゃんとの新婚ラブラブ生活が実現しないじゃないか！」
「勝手な妄想をしないで。訴えるわよ。それに、もし結婚するとしてもあなたとではないことは確かね」
　バッサリと切り捨てられた。堀北ちゃんが俺以外と？フッ、ありえないな。西から昇ったお日様が東へ沈むくらいありえない。堀北ちゃんをお嫁さんにするのはこの俺だ。
「絶対にないわよ」
「照れんなよ」
「はぁ、頭が痛いわ」
　手を額に当て溜息をつく堀北ちゃん。大丈夫だろうか。重症なようなら保健室に連れて行こう。そして添い寝をしてあげよう。
「なぜか急に悪寒がしたわ」
「それは大変だ！すぐに保健室に行こう！」
「結構よ。なんでそんなに食い気味なの、気持ち悪い」
　残念ながら振られてしまった。せっかくの添い寝チャンスがなくなってしまったが、堀北ちゃんが元気なのが一番だから問題はない。
「それより大丈夫？」
「だから問題ないと言っているでしょ」
「いやいや、そうじゃなくてさ」
「何？」
「Ｄクラスの本当の意味を知らされたときにショックそうだったからさ」
　堀北ちゃんは目を見開いて驚いた表情で俺をみて、すぐに眉間に皺

を寄せ視線を外した。
「……よく見てるわね」
「当たり前じゃん」
　この学校ではA～Dまでのクラスがある。普通ならその並びに意味など無いのだろうが、この学校は違う。ここでは優秀な生徒たちの順にクラス分けされるようになっている。最も優秀な生徒は〝A〟クラスへ。ダメな生徒は〝D〟クラスへ、と。
「大なり小なりショックだったのはみんな同じでしょ。いきなり言われて納得できるわけない」
「確かにねー」
「……あなたは納得できるのかしら？」
「まぁ、納得はできないけど大した問題でもないかな」
「Dクラスってことは最底辺ってことなのよ？ちゃんと理解できているの？」
「分かってるって。でもさ、結局Aクラス以外は落ちこぼれってことでしょ？じゃあBとかCとかどうでも良くない？瑣末なことだよ」
「そういう問題じゃ……」
「それにさ、卒業までにAクラスになればいいだけだろ？簡単な話じゃん」
　なにもずっとDクラスなわけではない。今後の行動次第ではAクラスになる事だってできる。それにこの学校はポイントで何でも買えるのだ。Aクラスへの切符も買う事だってできるかもしれない。
「はぁ、あなたは相変わらずお気楽ね」
「それが俺の取り柄」
「さっきまで薔薇色がどうとか騒いでいたくせによく言うわ」
「あれは今の周りの空気的に騒いどいたほうがいいかなって思っただけ。ほら、俺って空気めちゃくちゃ読めるじゃん？」
「空気が読めるのなら私が出している空気も読んで欲しいものね」
「俺のこと好き好きってやつなら読めてるから安心していいよ」
「その真逆よ」
　おかしいな。堀北ちゃんの俺に対する好感度はかなり高いものだ

と思っていたのだが。
「その自信はどっからくるのよ。病院に行ったほうがいいんじゃないかしら」
「俺のこと心配してくれるなんて堀北ちゃんは優しいなー」
「本当にうざいわね。叩けば直るかしら」
「堀北ちゃんに叩かれるなんて俺にしたらご褒美だからね」
「はぁー」
今日何度目かの溜息。そんなに溜息をついていたら幸せが逃げるぞ。別に俺が堀北ちゃんを幸せにするから問題ないが。
「んでさ、Dクラスに配属されたのが我慢できないって感じかな？」
「なぜそう思うの？」
「顔に書いてる」
「屈辱ね。人の顔を見ないでくれるかしら。警察呼ぶわよ」
何と言って通報するのだろうか。顔を見られました助けてください、とか？俺はメドゥーサか何かだったのだろうか。
「不服に決まっているでしょう。入試も殆ど解けたし面接だってミスをした覚えはないわ」
「堀北ちゃんは頭が良いもんね。でもその理屈だと俺もDクラスだとおかしいんだよね」
「……屈辱だわ」
堀北ちゃんは優秀だ。さっき先生が発表した実力テストの結果を見てもそう断言できる。なぜなら９０点という高得点を出して同率２位に名を連ねていたからだ。ちなみに俺は１００点だった。
「あなたは人間性でDクラスなのよ」
「えー。それを言ったら堀北ちゃんも人間性アウトじゃんかよー」
「は？私のどこに問題があるの？」
「協調性がない。あと、クラスの人たちを見下しているところかな。そんな堀北ちゃんも俺は好きだけど」
「……うるさい。私はあなたが大嫌いよ」
「照れんなって」
堀北ちゃんの頬がほんのり赤く染まっていた。なんてことは全く

なく、表情は無だった。せめて嫌悪感を出してほしい。無は心にくる。
「別に協調性なんて必要ないでしょう」
「そうとも限らないんじゃないかなー」
「どういうこと？」
「さぁ？俺にもよく分からん」
「何よそれ」
「後で先生にでも聞いてみたら？いい返事が返って来るとは思えないけどさ」
　この学校は日本屈指の進学校だ。仮に学力だけで優劣をつけているのだとしたら、このクラスの生徒のほとんどが入学すらできていないだろう。学力以外で入学できている生徒が何人もいることが優劣のつけかたが単純なものではないことを物語っている。
「堀北ちゃんはＡクラスを目指すの？」
「まずは先生に話を聞いてみるわ。それでもＤクラスなのだとしたら……」
　その続きが堀北ちゃんの口から発せられることはなかった。
「まぁ、どっちでもいいけどねー」
「あなたはどうするの？」
「俺？俺は別にどうでもいいかな」
「薔薇色の高校生活は諦めるのかしら」
「いや、諦めないよ」
「あなたはバカなの？今のままでは無理よ。恩恵を受けられるのはＡクラスだけ」
　堀北ちゃんは俺の矛盾している発言に少し苛立つ。そうか、さっき俺が騒いでいたから勘違いをしているのか。
「俺の薔薇色の高校生活に恩恵だとかは関係ないよ。言ったでしょ、さっき騒いでたのは周りに合わせただけって」
「どういうこと？じゃあ、あなたの言う薔薇色の高校生活ってのは何？」
「それはね、堀北ちゃんだよ」

「……私？」
俺の言っていることが意味が分からないのか、首を傾げる堀北ちゃん。
「俺の薔薇色の高校生活は君と一緒にいること。堀北ちゃんと一緒に学校生活を送っていきたい。好きだから。ただそれだけ」
この学校に来て、一目見て恋に落ちた。ただ、この子と一緒にいたい。笑い合いたいって思ったんだ。だから俺の求めることはＡクラスにあるのではなく、堀北ちゃんがいるクラスにあるのだ。
「鳴海くんは本当に気持ちが悪いわね」
「照れんなって」
目を逸らした堀北ちゃんの頬は今度こそ少し赤く染まっていた気がする。
これは俺、鳴海（なるみ）　幸（こう）が堀北ちゃんとイチャイチャするために頑張るだけの話。

第2話

「鳴海くん、協力しなさい」
「うん、わかった。何をすればいい？」
「……」
「え？俺なんか変なこと言った？」
　あれから数日が経った今日、登校してきてすぐに堀北ちゃんに声をかけられた。堀北ちゃんの方から声をかけてくるのは珍しい方なのでシンプルに嬉しい。朝からテンションが上がる。
「私が言うのもあれなのだけれど、二つ返事で了承するのはどうなのかしら」
「だって、堀北ちゃんは俺の力が必要なんでしょ？」
「まぁ、簡単に言えばその通りね」
「じゃあ、俺に拒否する理由はなくね？」
　そもそも、堀北ちゃんが俺に頼って来るって時点で発狂もんだ。今なら魔王を倒してきてと言われても余裕で倒しに行ける気がする。
「とりあえず理事長室に殴り込めばいい感じか？」
「あなたは何を言っているのかしら。そんなことをしたら退学よ」
「それは困る。堀北ちゃんとイチャイチャできなくなるじゃん」
「それは一生できないから安心しなさい」
　何を安心しろと？安心する要素が皆無なのだが。
「んで、Ａクラスに上がるために協力すればいいのか？」
「……その察しの良さはいったい何なのかしら」
「一言でいえば愛だな」
「それで、協力の話だけれど」
「あれ？スルー？」
　すごいキメ顔で言ったんだけど完全にスルーされた。まぁ、いつものことだから気にしない。いちいち気にしていたら俺のメンタルが持たない。
「鳴海くんの他にも綾小路くんにも協力してもらうことになっている

わ」
「おい、オレは協力するなんて言ってないぞ」
「いいえ、私には聞こえたわ。しっかり協力するって言ってた」
「それはお前が心の声が聞こえたとか電波みたいな発言をしただけだろ」
「うぬぬぬぬ」
　堀北ちゃんの隣の席である、綾小路。おそらくだが、堀北ちゃんが先生に話を聞きに行った後に何らかの形で協力するように綾小路に言ったのだろう。
「何を唸っているの気持ち悪い」
「だってさー、うぬぬぬぬ」
「なぜオレを睨む？」
　綾小路清隆。こいつとは数回話したことがある程度なのだが、俺の中では一番警戒すべき人物である。
「質問たーいむ！」
「は？」
「はぁ、また変なのが始まったわね」
　綾小路は目を丸くさせ、堀北ちゃんは額に手を当て溜息をついた。
「問一、黒髪は好きか？」
「あ、ああ。どちらかといえば好きだな」
「問二、気が強い子は好きか？」
「別に嫌いではない」
「問三、小ぶりな美乳は好きか？」
「嫌いな男なんているのか？」
　やはりこいつは危険だ。俺が綾小路を警戒していた理由は堀北ちゃんと俺の仲を邪魔する存在になり得る可能性が一番高いからだ。席が隣ということもあり、堀北ちゃんと話していることは何度も見ている。というか、聞き耳を立てている。堀北ちゃんとまともに話せるのは、今の段階で俺と綾小路の２人だけなのだ。堀北ちゃんと話していて惚れないことがありえようか。否、ありえない。そして、今の質問ではっきりわかった。綾小路は黒だ。

「最後の質問だ。この返答次第では俺はお前と殺し合わなければならない」
「物騒だな」
「問四、ぶっちゃけ、俺と堀北ちゃんのことどう思う？」
「……お似合いだと思うぞ」
「マイベストフレンド清隆、お前は今日から俺の親友だ」
　清隆は白だった。まるで新品の白いシャツに漂白剤を丸ごとぶち込んで洗濯したかのように真っ白だった。彼を疑うなんてどうかしていた。清隆は良い奴だ。
「茶番は終わったかしら？」
「へへっ、聞いたか堀北ちゃん。俺とお似合いだってさ」
「ええ、非常に不愉快だわ。特に今のあなたの顔は見ているだけで吐き気がする」
「まったく、照れんなよなー。ホント、堀北ちゃんは照れ屋だグハッ」
　話している途中で脇腹に手刀が突き刺さった。堀北ちゃんはこちらを蔑んだ目で見ていた。ゾクゾクするな。
「少しスッキリしたわ。話を戻すわよ」
「はい、すいません」
「怖いな」
　さすがにここでふざけにいくほど馬鹿ではない。引き際というものが大事なのだ。
「絶対引き際間違えてるぞ」
「そんなことはない。俺にとってはご褒美だ」
「鳴海はドMだったのか」
「いや、俺は基本的にSだ。ただ堀北ちゃんに構ってもらえるのが嬉しいだけだ」
「なんだその可愛い理由」
　そろそろ黙ろう。堀北ちゃんの顔が怖い。何をやればいいかもまだ聞いてないし。と思ったら始業のチャイムが鳴った。
「誰かさんのせいで無駄な時間を過ごしたわ。話はまたあとね」
「ごめんなさい」

「別にいいわ。元々お昼の時に話す予定だったし」
　ということは今日は合法的に堀北ちゃんとお昼ご飯を一緒に食べることができるということか。今日は何ていい日なんだろう。

「鳴海くんが奢ってあげるから好きなものを頼んでいいわよ」
「よし、きた。何でも頼んでいいぞ清隆」
「ナチュラルに奢らされてるけどそれでいいのか？」
「問題ない。あわよくばこれで堀北ちゃんの好感度が上がればいいなって思ってるから」
「下心満載だな。しかもそれを言ってしまうあたりバカなんだろうな」
　お昼休みになり俺たち三人は食堂へと足を運んでいた。清隆は高めのスペシャル定食を選び、俺は普通にから揚げ定食を買う。
「堀北ちゃんは何にする？」
「私は自分で買うから結構よ」
「いいから、いいから。ここは俺に奢らせてよ。数少ない男をアピールするチャンスなんだからさ」
「だから、それを言ってしまったら意味が無いでしょう」
「別にいいんだよ。俺がやりたくてやってることなんだから」
「……そう。それなら遠慮なくいただくわ」
「おう。あ、今ので俺に惚れた？」
「調子に乗らないで」
「残念」
　堀北ちゃんの分も買って席へと座る。いただきますをして食べ始めるも、堀北ちゃんは手を付けず、じっと清隆を見ている。当の清隆も見られているのを何か裏があると考えて手を付けられないでいる。
「清隆も食べなよ。別に裏なんてないさ。それに奢ったのは俺なんだからさー」

「ああ、そうだな」
　そうして清隆は恐る恐るコロッケを掴み、一口かじった。
「早速だけど話を聞いてもらえるかしら」
「圧倒的に嫌な予感がする」
「食ったんだから話は聞かなきゃダメだな。うん」
「おい、さっき裏はないって言っただろ」
「堀北ちゃんこそが正義だ」
「マジかよ……」
　堀北さんの話は中間テストの件だった。Ａクラスに上がるために中間テストでいい点を取ってクラスポイントを少しでも上げたい。しかし、うちはＤクラス。勉強ができない生徒を多く抱えている。そのため、クラスのリーダー平田が勉強会を開いているのだが、アンチ平田勢がそれに参加するはずもなく、赤点まっしぐらだ。そこで清隆の出番である。アンチ平田勢は清隆と親しいらしく、説得してほしいとのことだった。
「無茶言うなよ。オレにそんなリア充も真っ青な行動ができると思ってんのか？」
「食べたわよね？私のおごりで。スペシャル定食、豪華で良かったわね」
「そんなこと聞いてない。そもそも奢ってくれたのは鳴海だ」
「鳴海くんのポイントは私のポイントよ」
「何そのジャイアン的発想。鳴海も何とか言えよ」
「俺のポイントが堀北ちゃんのポイントだと……。それは夫婦みたいでいいな！」
　清隆にこいつはもうだめだって顔で見られた。でも別にいいさ。俺はこの幸福の余韻を楽しんでおくから。
「よし、じゃあポイント分俺も奢る。それでチャラだ」
「私、人に奢られるほど落ちぶれているつもりはないからお断りします」
「今食べてるのは奢られたもんだろうが」
「これは奢ってもらったんじゃないわ。貢がせたのよ」

「何それ怖い」
俺は堀北ちゃんに貢がされていたのか。堀北ちゃんの手の上で踊らされている気がして中々そそられるな。
「はぁ、わかったよ。でも集められる保証はないぞ。それでもいいか？」
「あなたなら集めれると信じているわ。これ、私の携帯番号とアドレス。何かあったら、これで電話して」
「なぬっ！」
「ああ、わかった。それじゃあな」
清隆はメモを受け取って食堂を後にした。俺が余韻を楽しんでいる間にとんでもないことになってるぞ。
「清隆に番号渡したの!?」
「ええ、何かあったときに連絡とれなかったら困るでしょ」
「そうだけど、俺もまだ教えてもらってないんだけど！」
「当たり前でしょ。あなたに教える必要はないもの」
何故だ！清隆に教えて俺に教えないなどありえないだろ。
「それにあなたに教えると電話とかメッセージとかかなり送ってきそうだし」
「うん。１０分に一回は送るな」
「絶対に教えないわ」
「嘘！今のは嘘だから！1時間に一回だから！」
「嫌よ」
そんな……。いつかは聞こうと思っていた連絡先をゲットするチャンスを逃してしまった。これから先、俺は堀北ちゃんの連絡先をゲットすることは出来ないのか？
「消えてなくなりたい……」
「そ、そんなに落ち込まなくてもいいでしょ」
「そりゃ落ち込むよぉ。好きな子の連絡先をゲットできないなんてさ……」
そのまま机に突っ伏す。ああ、終わった。俺の薔薇色高校生活はこ

ここで幕引きだ。
「はぁー、もう！分かったわ……教えるわよ」
「え？ええ!?い、いいの？」
「その代わり、鬱陶しいメッセージとか送ってきたら拒否するわ」
「オッケー！気を付ける！よっしゃー！」
　好きな子の連絡先をゲットした。それだけでめちゃくちゃテンションが上がる。やっぱり今日はいい日だ。
「うるさい。黙らないと教えないわよ」
「ごめんなさい」
　そして番号を教えてもらって携帯に登録する。ああ、幸せだ。俺の携帯に堀北ちゃんの名前があるってだけでご飯3杯はいける。
「なぁ、一つ聞いていいか？」
「何かしら？」
「堀北ちゃんは清隆が好きなの？」
「は？急にどうしたのよ」
　急に真面目なトーンで話し出した俺に少し困惑している堀北ちゃん。でも、俺にとってはこれは大事なことだ。
「今回の件も俺より先に清隆に協力を頼んだみたいだし、好きなのかなって」
「もしそうだとして、あなたに関係があるの」
「ある。俺は堀北ちゃんが好きだ。だからこそ堀北ちゃんには幸せになってほしい。堀北ちゃんが清隆を好きなら俺は全力で応援する」
　正直、諦めるのなんて嫌だ。だけど、堀北ちゃんに好きな人がいるなら俺はそれを応援する。
「勝手ね。勝手に絡んできて、勝手に身を引くとか、何様なのかしら」
「ごめん」
「別に恋愛感情は全くないわ。綾小路くんに協力を仰いだのはたまたまその場にいたからよ」
「そっか」
「それに、あなたなら私の頼みごとを断らないと確信していたから、後回しにしたのよ」

堀北ちゃんがボソッと呟いた。俺はそれを聞き逃しなどせず、しっかりと聞こえた。何というか信頼されていた気がして、泣きそうになる。
「んじゃ、遠慮なく堀北ちゃんにアタックしまくるわ」
「綾小路くんに恋愛感情はないと言ったけど、あなたにもないわよ。むしろマイナスね」
「照れんなって」
「照れる要素がどこにあったのよ」
呆れながらも薄っすら微笑む堀北さん。今日はこの表情が見れたことが一番嬉しかった。やっぱり今日はいい日だったらしい。
「さ、教室戻ろうか」
「ええ、その前に鳴海くん」
「な、なに？」
堀北さんの顔を見ると笑っていた。しかし目が笑ってなく、どす黒いオーラが出ていた。
「小ぶりで慎ましい胸って誰のことかしら？」
「え？いや、小ぶりの美乳って言ったんだよ。決して貧乳だとかは……あっ……」
「ふーん」
「違くて、俺は美乳派だから、大丈夫だよ！グハッ」
本日二度目の手刀が脇腹に刺さる。しかも朝のとはくらべものにはならないやつ。堀北ちゃん胸のこの気にしてたんだな。めちゃくちゃかわいいな。
堀北ちゃんとの距離が少し近づいたと思ったら、また遠のいたかもしれない。まぁ、それでも少しずつ縮めていけばいいさ。

第３話

結論から言えば清隆は須藤たちの勧誘に失敗した。というかそれを堀北ちゃんと横で見ていた。清隆はわざとらしく肩を落として席の方へ帰ってきた。それを見透かしてか、、堀北ちゃんは「使えない」と清隆に痛烈な一言を放つ。本当に役立たずを見る目つきが最高だった。

「まさかこれで終わりなんて言わないわよね？」

「そんなわけないだろ。でも、あいつらを誘うのは容易じゃない」

「基本的にやる気がないというか、危機感がないもんな」

結局のところ本人たちにやる気がなければ意味が無い。ああいうタイプの人間には明確なメリットを示すほかないだろな。同じことを思ったのか、清隆は何かを閃いたかのように目を見開いた。

「そうだ堀北、協力をしてくれ」

「嫌な予感しかしないけど一応聞いてあげる」

「もしテストで満点を取ったら、堀北を彼女にできるとかどうだ？そうすれば間違いなくあいつらは食いつくぞ」

「それ、乗った！」

「綾小路くん、死にたいの？鳴海くん、あなたは死になさい」

「なんで!?」

堀北ちゃんを彼女にできるのなら満点なんて余裕で取れるわ。もはや１２０点取れる自信がある。

「付き合うのはダメならキスをするはどうだ？」

「それも乗った！もちろんマウストゥーマウスだろうな？」

「やっぱり死にたいのかしら？鳴海くんは今すぐそこから飛び降りなさい」

堀北ちゃんは親指で教室の窓を刺す。おいおい、ここは４階だぜ？飛び降りたりなんかしたら怪我するじゃないか。まぁ、堀北ちゃんが本気で命令するのなら飛び降りるのもやぶさかではないがな。

「いい案だと思ったんだけどな」

「冗談じゃないわ。とにかく、明日までにどうにかして頂戴」
「……善処する」
「そう。それじゃあ私は帰るわ」
「ばいばい、堀北ちゃん」
　堀北ちゃんはこれ以上話をしていても無駄だと判断したのか、鞄を持って教室を後にした。おそらく寮に帰って勉強会用の準備をするのだろうな。今日はこれで解散となった。

「さっきの清隆の提案は中々に素晴らしいものだったけど万が一にもそれであいつらが満点を取ってしまったら俺はあいつらを間違いなく殺すな」
「……」
「だって堀北ちゃんを彼女にするのは俺だし、堀北ちゃんのキスをいずれ手に入れるのも俺だからね」
「……ねぇ」
「ん？どしたん？」
「なんで当たり前のように一緒に帰っているのかしら？」
「逆に聞くけど、一緒に帰らない理由があると思うか？」
　堀北ちゃんがとても嫌そうな顔で聞いてきた。堀北ちゃんが教室を出た後、すぐさま俺も教室を後にして堀北ちゃんを追いかけたのだ。
「はぁ、さっきのばいばいは何だったのよ」
「堀北ちゃんのばいばいが聞きたかっただけ。完全にスルーされたけどさ」
「あなたは本当に馬鹿ね」
「褒めんなって」
「どう聞いたら褒めてるように聞こえるのよ」
　堀北ちゃんがばいばいと言いながら小さく手を振ってくれたら俺はキュン死する。少し頬を赤らめてくれるとなお良し。

「鬱陶しいから離れて歩きなさい」
「えー、いいじゃんかよー。今まで何回か一緒に帰ってるんだしさ」
「それはあなたが私に付きまとっているだけでしょう」
「まぁまぁ、大人しくしてるから一緒に帰らして。お願い！」
「……はぁ、勝手にしなさい」
　堀北ちゃんは諦めたように溜息をついた。なんだかんだ許してくれる堀北ちゃんマジでかわいい。1ヶ月前なんて取り付く島も無かった。そう考えると堀北ちゃんと俺の距離は確実に縮んでいる。
「……」
「……」
　二人並んで寮への道を歩く。大人しくすると言った手前、無言で歩く。
「……」
「……」
「うずうず」
「……」
「俺たちって周りから見ると恋人に見えているのかな？」
「土に埋めるわよ？」
「ごめんなさい」
　怒られるのが分かっていたので黙っていたのだが、耐えきれなくなってしまった。堀北ちゃんからは純度の高い殺気が放たれた。でも将来は堀北ちゃんと同じ土の穴に入れたらいいな。お墓的な意味で。
「堀北ちゃんはテスト勉強はしてるの？」
「特段なにかしていることはないわ。毎日予習と復習をしていれば問題はないもの」
「お、優等生だねー。俺なんて寮に帰ったらゴロゴロしかしないもん」
「それは嫌味かしら？鳴海くんは私と違って勉強しなくても点数が取れると言いたいの？」
「そういうことじゃないよー。俺が堀北ちゃんを馬鹿にするわけないじゃん」

堀北ちゃんは明らかに不機嫌になっていた。以前の実力テストで俺に負けてからこの手の話題になると不機嫌になってしまう。よほど俺に負けたのがショックだったのだろう。
「ムカつくわね。中間テストは絶対に負けないわ」
「テストは他人と競うものじゃないぞ。強いて言えば自分との戦いだな」
「鳴海くんのくせに真っ当なことを言わないでちょうだい」
「え、ひどくない？」
まるで俺がいつも変なことばかり言っているみたいじゃないか。他人と何かを競うのはもう懲り懲りなんだよ。
「いいから私と勝負しなさい」
「えー、それ俺が受けるメリットがないよね」
「じゃあこうしましょう。あなたが勝てばキスをしてあげるわ」
「なっ！なにー！」
「これなら鳴海くんにもメリットがあるはずよ」
教室では断っていた条件をここで出してくる。どれだけ負けず嫌いなんだよ、かわいいな。堀北ちゃんにキスしてもらうとか想像しただけで鼻血もんだぞ。
「さぁ、勝負を受けなさい」
「うーん、やっぱりやめとくわ」
「……なぜかしら？」
「もちろん堀北ちゃんにキスしてもらえるなんて最高のご褒美だよ？でもさ、俺は堀北ちゃんが嫌なことはしてほしくないしさせたくない」
堀北ちゃんは真面目な子だ。こんな約束をして負けてしまえば本当にキスをしてくれるだろう。負けたうえに約束を破るなんて彼女のプライドが許さない。
「なによそれ。あなたが勝つ前提の話じゃない」
「俺が勝つよ。別に堀北ちゃんを馬鹿にしてるわけじゃない。それでも俺が勝つんだ」
俺は真顔で断言をする。慢心でも傲慢でもない。それはただの事

実だ。俺がテストで堀北ちゃんに負けることはない。ただそれだけにすぎない。
「まぁ、こんな勝負をしなくてもいずれは堀北ちゃんにキスしてもらうから問題なし！もちろん愛情１００％のやつをね」
「不愉快ね」
「へ？」
「不愉快よ。絶対に叩きのめしてあげるわ。勝った方が負けた方に何でも命令することができる。いいわね？」
「いや、だから俺は……」
「い・い・わ・ね？」
「は、はい！」
反射的に承諾してしまった。そりゃ堀北ちゃんに詰め寄られたら何だってオッケーしてしまうだろ。すげーいい匂いがした。
「わざと負けたりしたら、あなたとは一生口を利かないから」
そのまま堀北ちゃんは俺を置いて一人で先に帰ってしまった。堀北ちゃんは俺が思っていた以上に相当な負けず嫌いだったようだ。こうして堀北ちゃんと俺の中間テストでの勝負が決まったのだった。

翌日、なんと清隆が須藤たちの勧誘に成功したとの報告を受け、勉強会が開かれる図書室へと向かった。堀北ちゃんからは俺も先生役として参加してほしいとの命令を受けている。図書室に着くと須藤たちの他にも沖谷と櫛田の姿があった。色々あって二人も勉強会に参加するそうだ。堀北ちゃんが櫛田さんの参加を容認するとは思えないけど何かあったんだろう。結局、堀北ちゃんが須藤たちを、俺が

櫛田と沖谷に勉強を教えることになった。
「解せぬ」
「鳴海くん、どうしたの？」
「なぜ俺が堀北ちゃんと勉強できない？堀北ちゃんに顔が触れる距離で勉強を教えてもらいたかったのに！」
「あはは……鳴海くん勉強できるから仕方ないんじゃないかな」
　堀北ちゃんと一緒に勉強できないならきた意味が無いんだけどな。でも堀北ちゃんの命令を無視して帰るわけにもいかない。
「本当に鳴海くんは堀北さんのこと好きだよね」
「当たり前だ。堀北ちゃん以上の存在などこの世にはいない」
「そこまで言われると同じ女の子として自信なくすなー」
「安心しろ櫛田。お前も十分可愛い方だ。ただ堀北ちゃんの可愛さが天元突破してしまっているだけだ」
　櫛田はクラスの中でもかなり人気がある。容姿が良く、性格も良いとあれば人気なのも当然と言える。ただ、堀北ちゃんは櫛田よりも容姿が良いし、性格も良いのだ。
「櫛田はなんで勉強会に参加してるんだ？参加するほど頭悪くないだろ」
「私もそこまで勉強ができるわけじゃないから。それにみんなと一緒に勉強したくて」
「ふーん。まぁ、どうでもいいや。そこ間違えてんぞ」
「あ、本当だ」
　実際には他に理由があるんだろうが俺には関係ない。というか興味がない。もし櫛田が堀北ちゃんに危害を加えるというのなら話が別だがな。
「そうだ鳴海くん、連絡先交換しない？私がクラスで登録してないの鳴海くんと堀北さんだけなの」
「え、嫌だけど」
「え？」
「え？」
　秒で断ったら意味が分からないといった顔をされた。こっちが意

味が分からんわ。断られると思ってなかったんだろうな。
「あの、連絡先を教えてほしなって言ったんだけど」
「ちゃんと聞こえてる。それで嫌だって言ったの」
「……理由を聞いてもいいかな？」
「だって堀北ちゃんも教えてないんだろ？なら俺が教えるわけがないだろ」
　基本的に俺は堀北ちゃんにしか興味がない。その堀北ちゃんが教えてないのだから俺が教える理由がない。俺が連絡先を知っているのは堀北ちゃんと清隆だけだ。
「で、でも……」
「こんなことやってられっか！」
　櫛田さんが何かを言いかけたが、須藤の怒号によってそれはかき消された。どうやら堀北ちゃんと須藤が口論になったようだ。もっとも、堀北ちゃんは冷静で須藤が一人でキレているだけだ。本来であれば須藤ごときに後れを取る堀北ちゃんではないので口を挟まないが、あろうことか須藤は堀北ちゃんの胸倉を掴んだ。
「須藤くんやめてっ」
　櫛田がいち早く須藤を止めに入る。清隆も須藤の動き次第では止めに入れる姿勢になっていた。櫛田が止めに入ったこともあり須藤は堀北ちゃんから離れる。堀北ちゃんは一切ひるむ様子はなく、淡々と須藤たちに毒舌をお見舞する。さすが堀北ちゃん容赦がない。
　結局、須藤たちは図書室を出ていってしまい、それを追いかけて清隆と櫛田も出ていってしまった。初回の勉強回はあっさりと幕を閉じた。
「完全に時間の無駄だったわね。彼らに勉強を教えようだなんて間違っていたわ。彼らみたいな無能な生徒は今のうちに脱落してくれた方が今後の為よ」
「そっか」
「……あなたも私が間違っていると思うの？」
「間違ってはいないんじゃない？」
「なによその曖昧な言い方」

「間違ってないけど正しいとも言えない」
　堀北ちゃんは俺に視線を向ける。俺の言葉の真意を探っているのだろう。
「まぁ、堀北ちゃんが間違っていようがなかろうが俺は堀北ちゃんの味方だから関係ないよー」
「はぐらかしたわね」
「うん。だからはぐらかされてくれたらありがたい」
「……はぁ、もういいわ」
　堀北ちゃんは諦めたようで、いつものごとく、手を額に当ててため息をついた。俺って堀北ちゃんにため息つかれてばっかりな気がする。
「それにしても驚いたわ」
「何が？」
「あなたのことだから私が須藤くんに胸倉を掴まれたときに飛び出してくるかと思ったから」
「あー。だって必要ないでしょ？俺の堀北ちゃんが須藤ごときにやられるわけないし」
「あなたのじゃないわよ」
　どさくさに紛れて俺のって言ってみたらしっかり否定された。堀北ちゃんは武道も達者だから口でも力でも須藤には負けないと分かっていた。
「俺は堀北ちゃんが望んでいないことはやらない。あそこで俺が正義のヒーロー気取りで止めに入るのは望んでないでしょ」
「その通りね。あなたに守られるほど弱くはないわ。もしあそこで鳴海くんが入ってきていたら須藤くん諸共叩きのめしていたわ」
　それはさすがに酷くないか？でも堀北ちゃんのことだからやりかねない。てか、間違いなくやる。
「んじゃ、俺も今日は帰るねー。須藤をシメに行かないと」
「ちょっと待ちなさい」
「ん？なになに、そんなに俺と一緒にいたいのー？照れちゃうなー。でも今日は帰るね。これからあいつを殴りに行こうか的な感じだか

らさー」
　堀北ちゃんと一緒にいたいのは山々なのだが、この後やらなければいけないことがある。超重大事項なのだ。
「さっきと言っていることが違うじゃない」
「うん？さっきのは堀北ちゃんと須藤の問題で、こっからは俺と須藤の問題。あのヤンキーかぶれのクソ猿をぶん殴らないと怒りが収まらん」
「なんであなたが怒っているのよ」
「好きな女の子に手を出されたんだ。はらわた煮えくり返るに決まってるだろ」
　本当なら胸倉を掴んだ時点でぶっ殺したかったんだけど、それは堀北ちゃんが望んでいないので何とか耐えた。でも、それを許すわけがない。俺の大事な堀北ちゃんに手を出すなんて言語道断だ。さっさと須藤を探しに行くとしよう。
「退学になる可能性もあるわ」
「一緒にいてくれなきゃ退学させちゃうぞって感じ？やだなにそれかわいい」
　図書室を出ようとする俺の腕を堀北ちゃんが掴んで止めた。そんなヤンデレ堀北ちゃんも悪くないな。
「ふざけないで。暴力行為は退学になるかもしれないと言っているの。足りない頭でもそれくらい理解できるでしょ」
「もちろんバレないようにするって。まぁ、そうなったらそうなったで堀北ちゃん的にはラッキーじゃん」
　仮に俺が退学になり、須藤がボコボコになれば堀北ちゃん的には一石二鳥だろう。邪魔者が二人も消えるのだから。
「俺はこれで失礼するよ」
「待ちなさいと言っているでしょ」
「ぐえ」
　堀北ちゃんに背を向けて歩き出したら襟首を引っ張られて変な声が出た。堀北ちゃん、のどはダメだ。振り向いて見えた堀北ちゃんは明らかに怒っていた。

「えっと……堀北さん？」
「あなたは全然分かってないわね。脳みそに蛆でも湧いてるんじゃない？」
　いきなりご褒美という名の罵倒を浴びせてくる。それはいいとして、俺が何を分かっていないというのか。
「私的にラッキー？ふざけないで」
「ふざけているつもりはないんだけど」
「ふざけてるわよ。私は鳴海くんが退学になることを望んでいないの。鳴海くんは私が望まないことはしないのでしょう？なら、やめなさい。私は望んでいない」
「ほ……」
「ほ？」
「堀北ちゃんがデレた！」
「ば、馬鹿なこと言わないで。私はただ手駒が減るのが惜しいだけよ。それ以下でもそれ以上でもないわ」
「照れんなって」
「刺すわよ」
　堀北ちゃんの手に握られていたシャーペンの芯をカチカチと音と立てながら出す。あれで刺されても大したことはなさそうだな。
「もちろん目をね」
「目かー。それはさすがにヤバいかなー」
「片目くらいいいんじゃない？誰も困りはしないわ」
「俺が困るわ！」
「そ。……いつもの調子に戻ったわね」
　いつもの？どうやら俺は冷静じゃなかったらしい。確かに怒りに我を忘れる程度ではないにしても、頭の中は須藤を殴ることしか考えてなかったな。
「鳴海くんは意外と感情的だったのね」
「面目ない。俺のこと幻滅した？」
「幻滅する程の好感度は元からないから安心しなさい」
　幻滅されるより辛い事実を突きつけられた。いや、好感度が下がっ

ていないことは喜ばしいことなのではないだろうか。
「それにいつもニコニコしてて気味が悪かったから丁度よかったわ。あなたもちゃんと人間だったのね」
「人間だと思ってなかったの？」
「その辺のごみと同等には見ていたわ」
「だから視線がゴミを見る目だったんだね」
　いつも向けられるのはゴミを見るような目ではなく、本当にゴミを見る目だったらしい。それはそれで興奮してやまないな。
「ていうことは、堀北ちゃんの中でゴミから人間にランクアップしたってことだよね？ついに俺の時代が来たか」
「はぁ、相変わらずのポジティブ馬鹿ね」
「それが俺の取り柄だからね」
　なんだか須藤のおかげで堀北ちゃんに近づいた気がする。あいつには感謝しなくてはいけないかもしれない。堀北ちゃんの胸倉を掴んだことは許さないけど。
「それじゃあ俺も帰るよ」
「……」
「いや、もう大丈夫だって。清隆に今後について聞きに行くだけ」
「そう。それなら好きにしなさい」
「うん。ばいばい堀北ちゃん」
「ええ」
　もし堀北ちゃんがＡクラスに上がりたいと本気で考えているのなら今回の中間テストは乗り越えなくてはならない最初の試練だ。そのためには清隆と櫛田の力が確実に必要となる。その為のフォローを入れておくために俺は図書室を後にした。
　今度こそは堀北ちゃんのばいばいを聞けると思ったんだけど無理だったな。まぁ、返事が返ってきただけでも良しとしよう。

第４話

みんなは見てはいけないものを見てしまったらどうするか。固まってうごけなくなる？その場からバレないように立ち去る？それとも雄たけびを上げる？

俺はそのどれでもない。俺が選択するのは証拠を押さえるだ。

ピピッっと携帯カメラの電子音が静かな階段に響き渡る。その音を聞いていたのは、音を出した張本人の俺と、こちらを驚いた顔でみる美少女と、いつも通りの無表情な俺の親友である。異常なところをあげるとすれば、美少女の胸に親友の手が触れているところだ。それはもう、がっつりと。

「問題ない。続けてくれたまえ」

「な、なな、なんで鳴海くんがここに……」

櫛田は顔を青ざめて俺に消え入りそうな声で聞いてきた。質問には答えてやらなければいけない。

「エロい空気を察してな。俺のことは気にするな。続けてくれ」

「何言ってんだよ！とにかくそのカメラを下げろ！」

怒られた。携帯で続きを撮ろうと構えていただけなのに。というか、櫛田ってこんな口調だったっけ？

「はっ!?怒鳴ってごめんね鳴海くん」

「別に気にしてないが続きはしないのか？」

「お前はどれだけ続きが見たいんだよ」

我に返った櫛田さんと、無表情でツッコミを入れてくる清隆。男は性欲で動いているから仕方がない。しかし、いまいち状況がつかめん。

「あ、あのね鳴海くん、今のは綾小路くんが無理やり触ってきたの」

「え、そうなん？清隆も男だね。でも無理やりはいかんぜよ」

「いいの鳴海くん、それで写真なんだけど……」
俺に近づいてくる櫛田。なおも無表情な清隆。ますます意味が分からん。清隆が櫛田を無理やり襲っていたってことか？
「くっそ！俺があそこで撮らなければ、もっとエロい瞬間を見れたってことかよ！」
「最低だな」
「ばーか、男はエロの前では無力なんだよ」
「堀北がされていてもか？」
「は？そんなやつ八つ裂きにして肉片が残らないまでぐちゃぐちゃにしてやるわ」
想像しただけでもムカついてきた。堀北ちゃんの貞操は俺が守る。そして、ゆくゆくは俺が奪うのだ。もちろん合意の上で。
「そんな事より写真を」
「ああ、そうだったな。こんな写真あっても何の得にもって……あれ？」
先程撮影したものを改めて見返すと違和感を覚える。これって清隆が襲っているというよりも、その逆じゃね？
「櫛田はビッチの痴女だったってことか」
「ち、違うわ！」
「えー、だってこれ、櫛田が清隆の手を胸に当ててんじゃん」
「それは、その……綾小路くんに命令されて」
「ふーん。まぁ、俺には関係ないしどうでもいいけどね」
俺にとって堀北ちゃんが関わっているかいないかが問題であって、関わっていないのであれば興味はない。別に櫛田が痴女だろうが、清隆が変態さんだろうがどちらでも構わない。
「それじゃあ、その写真は消してもらっていいかな」
「だが断る」
「え？」
「え？」
俺が断る事を想定していなかったのか、櫛田が固まる。さっきも同じようなやり取りをした気がするな。

「もぉ、冗談やめてよねー」
「あはは、冗談抜きで消さないけどなー」
「……」
「おっと」
　無言で俺の携帯を強奪しようとしてきた櫛田を寸の所でかわす。
それを三度繰り返して櫛田がちょっと涙目で俺を睨んできた。
「避けるなよ！」
「いや、普通避けるでしょ」
「いいから携帯をよこせ。それが嫌なら写真を消して」
「断る！」
「なんでだよ！」
　どうやら櫛田は写真を消してほしがっているようだ。それはそうか、自分の痴女行為がバレてしまうからな。優等生がこんなことをしていたとあっては株が大暴落だ。
「俺は期せずして櫛田の弱みを握ったということか。ちなみにこれは写真じゃなくて動画な」
「なんで動画なんだよ」
「いや、エロを静止画で楽しめるのは小学校までだぞ」
「そんなこと知らねーよ！」
　さすがのビッチさんも男の性事情は知らないらしい。
「落ち着け櫛田。さっきから本性が出てるぞ」
「はっ!?」
　清隆の指摘でようやく気付いたらしい。なるほど、こっちが櫛田の本性だったのか。
「清隆の口封じのための行為だったってことか。それにしてもお粗末だな」
「うるさい！さすがに慌てたっていうか、一瞬パニックになって……と、とにかく動画を消せ！」
「それを聞いて俺が消すと思うか？」
　この動画があれば櫛田を抑止することができる。仮に堀北ちゃんに牙を向けるようなことがあれば、有意義に使わしてもらおう。

「あーもう！本当にムカつく。優しくしてればつけあがりやがって。堀北さんに付きまとうことしか能のないドMの変態が調子に乗らないで。堀北さんに全く相手にされてないくせに、きゃ！」
　完全に本性を現した櫛田だったが、バンという音に言葉を遮られる。その音は俺が壁に手のひらを打ち付けた音であり、今の俺は櫛田を壁に追い込み股の間に足を入れている。いわゆる壁ドンの体勢。しかも逃がさないようにかなり密着している。
「調子に乗ってんのはお前だよ。俺はドMじゃない。堀北ちゃんに対してだけだ。それに堀北ちゃんに全く相手にされてないんじゃなくて、うざがられているだけだ！相手にはしてもらえてる……はずだ！」
「ちょ、ち、近いっ」
　先程までの威勢はどこへやら、櫛田は目を逸らして弱弱しく話す。心なしか頬が赤くなっているようにも見えた。
「俺は堀北ちゃんに相手にされてはいる。分かったか？」
「わ、わかったから、離れろ」
「うむ。分かればいいんだ」
　櫛田から離れて満足げにうなずく。櫛田は何故か息切れをしていた。
「動画は消さんがこの事は誰にも言わないから安心しろ」
「それを信じろっていうの？」
「ああ、てかお前には信じるしか選択肢はないだろうに」
「うぐ……」
　ここで櫛田が信じようが信じまいが関係ない。選択権は俺にあるのだから。
「……分かった。鳴海くんを信じる」
「よく俺なんかを信じられるな。もう少し人を疑った方がいいと思うぞ」
「どっちなんだよ！」
　櫛田は将来、詐欺に気を付けたほうがいい。俺が金に困ったらまず最初に櫛田をカモにしよう。

「はぁ、堀北さんが溜息をついている理由が分かった気がする」
「お前ごときが堀北ちゃんの領域に達したなどおこがましいわい！恥を知れい！」
「何キャラだよ」
　櫛田は呆れたように俺を見る。あれ？堀北ちゃんもよくその表情をしている気がする。もしかして、本当に櫛田は堀北ちゃんの領域に達したというのか!?
「あの誰とも関わろうとしない堀北さんが鳴海くんには傍にいることを許している。警戒心が強い堀北さんが信頼してるのなら私は鳴海くんが信じれる人だと思う」
「へ？」
「だから鳴海くんを信じる理由。それに鳴海くんは堀北さんにしか興味がないから言い触らしたりはしないでしょ」
「いやいや、そんな理由とかはどうでもいいんだよ！堀北ちゃんが信頼してる？俺を？」
「だ、だから近いってば！そういってるだろ！」
　櫛田に顔を寄せて嘘かどうかを見極める。こいつは嘘をついてない。ということは櫛田から見て堀北ちゃんは俺を信頼しているということか。
「何だ、お前ってば良い奴じゃん。今日から俺と櫛田は親友だ」
「はぁ？なんでそうなるんだよ」
「オレの時にも思ったが鳴海は単純だな」
　単純でも何でもいい。俺が良い奴だと思えば良い奴なのだ。
「そういえば、清隆も居たのな」
「お前が来る前からな」
「すまん、忘れてた。ちなみにおっぱいの感触はどうだった？」
「服の上からだからよく分からんが、存在感は凄かった」
「櫛田はでかいからな」
「本人の前でそんな話するなよ！」
　櫛田に怒られたが仕方がないだろ。男としてそれは聞いておかなくてはならない。今後の参考としてな。堀北ちゃんの胸を触る日が

いつ来てもおかしくないからな。想像するだけで……。
「胸がでかいからって調子に乗るなよ。でかけりゃいいってもんじゃないんだよ。大事なのは形。そして俺は美乳派だ」
「急にキレられた!?」
「一応堀北ちゃんのためにも言っておかないとな」
「もう、疲れた」
　そう言って櫛田さんは帰って行った。その後ろ姿は疲労感がにじみ出ていた。
「実はお前ら最後までしたのか？」
「残念ながらしてない。あれは８割くらいはお前のせいだ」
「俺？何かしたかなー」
「そういうところだろうな」
「よく分からんけどフォローは頼んだ。勉強会はあいつが必要だ」
「自分でしろよ」
「俺は連絡先知らねーんだよ」
　何やら達観した様子の清隆に対してよく分かっていない俺。なんにせよ、清隆に一任しよう。こいつならうまいことやってくれるだろう。
「それで鳴海は何しに来たんだ？」
「ん？ああ、忘れてたわ。勉強会をどうするかを清隆に聞きに来たんだった」
「よく俺の場所が分かったな」
「電話でなかったから屋上から叫んで探そうと思ってな」
「櫛田があそこに居てくれてよかったと心から思う」
　屋上を目指していたら偶然二人を見つけたんだよな。俺ってばナイス判断。
「どうするかと聞かれてもな。堀北がやる気がなければどうしようもない」
「その辺は俺がどうにかする。本気で堀北ちゃんがＡクラスを目指すのなら避けて通れない道だ」
「お前は堀北の欠陥に気付いてるんだな」

「まぁ、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群とくればあとは性格面だしね」
　堀北ちゃんがＤクラスである理由はそこだ。須藤たちを能無しだと決めつけて見下すこと。俺はそんな堀北ちゃんでも問題ないんだけどね。
「Ａクラスに上がるにはそれじゃあダメだろうな」
「まぁね。だからこそ本気で目指すならそこに気付かないといけない」
「お前が教えるのか？」
「いやいや、人の性格を直させるほど偉くはないよ。できることは欠点を気付かせることくらいかな。どうにかするよ。俺の堀北ちゃんだし」
　あとは堀北ちゃん次第だ。俺は堀北ちゃんがどんな選択をしてもいいように土台を整えておくだけ。
「鳴海は堀北至上主義だな」
「何そのワード。最高じゃん」
「最高なのか？」
「俺のすべてが堀北ちゃんのためにあるって感じがしない？」
「よく分からんが鳴海がそう思うならそうなんだろうな」
　清隆のこういうところが好感が持てる。頭ごなしに否定するわけでもなく、顔色を窺って同意するわけでもない。さすがは俺の親友。
「てなわけで櫛田の方はまかせるわ」
「わかった。スペシャル定食の分は働く」
「成功したあかつきにはまた奢ってやんよ」
「それは楽しみだ」
　そのときは堀北ちゃんも誘おう。お疲れ様会と言えば来てくれるだろう。清隆をだしに使うようで申し訳ないがスペシャル定食が食べれるんだ、そのくらいは大目に見てもらおう。
「ときに綾小路くん」
「何だ急に？」
「ホワイトルームから逃げてこられて幸せか？」

「っ!?」
俺の言葉に清隆の表情が驚きに変わる。作りものじゃない本物の顔だ。
「その反応はやっぱそうなのかー。いやーどうしたもんかね」
「なんのことだ？」
「あ、もうはぐらかさなくても大丈夫。清隆がホワイトルームで何をしていたかとか、どうやってこの学校に入学できたかとか大体知ってるから」
「……お前は何者だ？」
「いや、警戒とかしなさんなって。俺は何かしようとか考えてないからさー」

「……」
清隆は真剣な顔で俺を見てくる。俺にはそういう趣味はないぞ。
俺は堀北ちゃん一筋だ。
「何が目的だ？」
「なんにも。ただの確認だよ。清隆があいつが言う綾小路清隆なのかの確認」
「あいつ？」
「あ！口が滑った」
「それに俺は何かしようとは考えてないと言ったな。まるで鳴海以外に何かをするつもりの奴がいるみたいだ」
「うわー、目ざといなー」
これだから超人との会話は疲れる。警戒心むき出しの清隆。今にも襲ってきそう。俺じゃあ清隆に勝てっこないしなー。どうしたものか。
「銀髪の胡散臭いお嬢様には気を付けろ」
「は？」
「俺が言えるのはここまで。これでも親友だから出血大サービスしてんだぜ」
「意味が分からん」

「とにかく気を付けとけって。はい、この話はお終い！ここからは質問は受け付けません！」
　一方的に話を終わらせる。これ以上は本当に話せないんだよな。清隆もここで引き下がってくれればいいんだけど。
「分かった。頭の片隅にでも置いておく」
「え？いいの？」
「これ以上は話す気はないんだろ？」
「いえす」
「ならどうにもならないだろ。拷問しても鳴海は話しそうにないしな」
　いやいや、俺でも拷問されれば喋るよ。爪でも剥がされそうなものなら一瞬でゲロるね。だって痛いのは嫌だもん。
「これだけは言っておきたいんだけど、俺は本当に清隆の事親友だと思ってるからな」
「そうか」
「そうなんだよ。んじゃ、帰ろうぜ」
「ああ、そうだな」
　清隆が俺のことをどう思っているかは分からないが俺は清隆をどうこうするつもりはない。そもそも俺がどうこうできる相手じゃないし。
「まじで俺を退学にさせようとか考えないでね？堀北ちゃんに会えなくなる」
「……ああ、分かった」
「ちょ、今の間はなんだよ！考えてただろ！まじでやめてくれよ！」
　寮に帰るまでの間、清隆に念を押しまくるのであった。

第5話

「おっはよー堀北ちゃん！今日もきゃわわのきゃわたんだね！可愛さのギネス記録更新したんじゃない？」
「今すぐに黙らないと埋めるわよ」
　朝一番から凍てつく視線をいただきました。今日もいつも通りの朝です。
「照れ隠しかよー。かわいいかよー」
「……鳴海くんはグラウンドか、中庭のどちらに埋められたいかしら？せめてもの温情で選ばしてあげるわ」
「その選択肢って、どっち選んでも大して変わらないよねー」
　今の堀北ちゃんの眼は本気で殺る眼だ。毎日殺気を浴びている俺には分かる。
「でも堀北ちゃんに埋められるのはやぶさかではないんだなー」
「はぁ、今日はいつにも増してウザイわね」
「そんな、標準でウザイみたいな言い方しないでよねー」
「そう言ってるのよ。自覚がないなんて病気じゃないかしら。さっさと入院して私の前から消えなさい」
「堀北ちゃんと会えなくなるなら、どんな病を患っても入院しないぜ！病は気から、愛があれば大丈夫」
「また訳の分からないことを」
　不知の病になったとしても、俺の堀北ちゃんへの愛情があれば打ち勝つことができる。堀北ちゃん＝俺の生きる糧だからな。
「変に気を使わなくてもいいわよ。別に落ち込んでたりしてないわ」
「なんのこと？」
「私を元気づけようとか思って変におちゃらけてるんでしょうけど、無意味よ。むしろ逆効果ね。あなたと話していると気が滅入るわ」
「堀北ちゃん……俺のことそんなに理解してくれてたんだな！」
「は？」

「俺の考えてることが分かるなんて、これって相思相愛ってことだよな？ついに俺の思いが届いたのか!?」
「あなたの頭には綿あめでも詰まっているのかしら」
今日、堀北ちゃんに会ってからどんどん目が死んでいっている。もちろん、朝の挨拶をした時からハイライトは消えていたぞ。真顔の堀北ちゃんに綿あめじゃなくて愛が詰まってるって言ったらガン無視された。
「そんなことより、今日のお昼休みは空けときなさい」
「俺の予定は全て堀北ちゃんで埋まってるから問題ない」
「あなたの予定が真っ白だってことは分かったわ」
おかしいな。俺のスケジュールはパンパンなはずなんだが。
「おはよっ、堀北さん、鳴海くん！」
「……ええ」
「おっはー腹黒ちゃん」
「……は？」
朝から元気よく手を振りながら満面の笑みで飛び出してきた櫛田は俺の一言でそのまま固まった。堀北ちゃんも苦い顔で固まっている。かく言う俺もなぜこの状況に陥ってしまったのか分からず固まっている。俺たち三人の空間だけ時が止まったかのようだ。
「ちょっ、ちょっといいかな？」
「お、おう」
笑顔をヒクつかせた櫛田に腕を掴まれ教室の後ろへと連れていかれる。
「なんだよ。どういうつもりだ？堀北ちゃんに勘違いされたらどうすんだよ」
「どういうつもりはこっちのセリフだよ！私の素のことは言わない約束だろ！」
「あ……」
「あ。じゃない！完全に忘れただろ！」
「メンゴメンゴ。安心しろ俺は約束は守る男だ」
「本当に頼むよ」

「任せとけ。俺が華麗に誤魔化してやる」
とっさに腹黒と口から漏れてしまったのだから仕方がない。気を取り直して二人で堀北ちゃんのところへ戻る。
「改めておはよう」
「なんで戻ってきたのよ」
「それは俺がさっき言ったのは、腹黒ちゃんじゃなくて、お歯黒ちゃんと言ったのだと堀北ちゃんに説明をするためだ」
「は？」
「鳴海くん？何を言っているのかなー？」
堀北ちゃんは訝しげに、櫛田は再び笑顔をヒクつかせて俺を見る。
「つまりだな、櫛田の趣味はお歯黒なんだわ。日夜お歯黒について研究している、生粋のお歯黒マニアであり、お歯黒界のニューウェーブなんだわ。だから、決して櫛田は腹黒なんかではない。むしろお腹は赤ちゃんのように真っ白いすべすべタマゴ肌であって……」
「ちょっと、こっち来てくれるかな？」
「あ、おい！」
またもや櫛田に腕を掴まれ、教室の後ろへと連行される。堀北ちゃんが誤解して嫉妬してなきゃいいけど。
「それはないから安心しろ」
「少しは期待してもいいじゃねぇか」
「そんなことより、お前は何を言ってるんだよ！」
「何って完璧に誤魔化そうとしてただけだろ」
腹黒からのお歯黒。なんと素晴らしい機転だろうか。それなのになにが不満と言うのか。
「不満しかないに決まってるだろ！なにがお歯黒だよ！バカなの？ひょっとしてバカなの？」
「お前よりかは頭良いぞ」
「うがー」
櫛田のやつ急に唸り始めたぞ。こいつもストレスを抱えてるんだな。ストレス社会恐るべし。
「誰のせいだと思ってるんだ」

「案外そういうのって自分自身に問題があったりするんだぜ。例えば仮面をかぶり続けていることがストレスになってるとかさー」
「地味に正論ぶつけてくるんじゃないよ！」
　ストレスの原因を見つけてあげたのに何故怒られなければならんのだ。解せぬ。
「いつか絶対に殺す」
「はっはっはー。やれるもんならやってみろ。返り討ちにしてやるわ」
「あー！ムカつく！」
　櫛田はカルシウム不足なのだろう。お昼休みに牛乳を買ってあげようかな。いや、待てよ。こいつに牛乳なんか与えたりしたら、ただでさえデカいこいつの乳がさらにデカくなってしまうんではなかろうか。そうなれば俺は堀北ちゃんの敵に加担したことになるのではなかろうか！
「お前には絶対に牛乳はやらん！小魚でも食ってろ！」
「何の話だよ!?」
　ゼェゼェ言っている櫛田。なんでこいつはこんなに疲れてるわけ？なんかの病気？病は気から、愛があれば大丈夫だぞ。
「とにかく、ちゃんと誤解を解いて！腹黒もお歯黒も無し！」
「えー」
「文句を言わない！だいたい、お歯黒マニアってなによ。私に変なキャラ付けないでよ。鳴海くんと同類に思われるじゃない」
「俺が変なキャラみたいな言い草だな」
「え？自覚ないの？病院行った方がいいよ？」
　めちゃくちゃ引かれた。そんでもってガチで心配された。俺ってそんなに変人だったのか？いや、そんなわけが無い。俺は堀北ちゃんが大好きな一途などこにでもいる男子高校生だ。
「あんたみたいなのがどこにでもいたら日本は終わりだよ」
　それから再び二人で堀北ちゃんのところへ戻った。
「また来たの？あなた達は何がしたいのかしら」
「えっとな、お歯黒マニアは櫛田ではなかったらしい。俺の勘違い

だったわけで、櫛田は腹黒でもお歯黒でもないってことだな。うん」
「別にどうでもいいわよ」
「でも、安心してくれ。お歯黒マニアはきっと存在する。お歯黒界をきっと救ってくれるはずだ」
「わたしに何を安心しろというのかしら？」
　堀北ちゃんを安心させたところでホームルームの開始を告げるチャイムが鳴る。これにて解散となった。

　そして、昼休み。堀北ちゃんと一緒に学校でも随一の人気を誇るカフェパレットへ向かった。だが、残念なことに俺だけではなく、清隆と櫛田も一緒だった。二人きりでイチャイチャ出来ると思ったのに。
　堀北ちゃんが奢ってくれるということでドリンクを買ってもらった。もちろん、堀北ちゃんの分は俺が出した。４人席に俺の横に櫛田、清隆と堀北ちゃんが正面へ座った。解せぬ。なぜ俺の横が堀北ちゃんじゃない？まぁ、正面からみる堀北ちゃんも可愛いので良しとする。
　それから話が始まった。話を要約すると、堀北ちゃんがもう一度、勉強会を行うために櫛田に協力を頼みそれを櫛田が了承した。
　その後話は堀北ちゃんがＡクラスを目指している話に変わる。そこで櫛田がＡクラスを目指す活動の仲間に入ることを志願し、今回の勉強会の結果次第で協力を要請することとなった。
　これで勉強会の方はうまくいくだろう。赤点回避も夢ではなさそうだ。良かった良かった。めでたしめでたし。
「いや、良くねぇよ！」
「急にどうした？」
　さっきまで一言も話さず黙って聞いていた俺が急に叫びだしたか

ら、三人とも驚きを隠せないでいる。
「だっておかしいだろ？なんで堀北ちゃんが昨日の今日でそんな改心してるわけ？絶対なんかあったじゃん！俺が部屋で堀北ちゃん抱き枕を抱いてグースカ寝てる間に重要なイベントが発生してんじゃん！」
「その抱き枕は即時焼却処分しなさい」
「抱き枕は普通にキモイけど、確かに昨日とは考え方が急に変わったよね」
「そうだよな、櫛田！そして、なんか知ってんだろ、清隆！」
「……さぁな。オレは知らん」
「今の間はなんだよ！チラッと堀北ちゃんのこと見たよな？なんか目配せしたよな？言っていいのかってアイコンタクトしたよな？」
「……別に何も無いわよ。Ａクラスに上がるにはどうしたらいいのか私なりに考え直してだけ」
　おかしい。それにしては急に心変わりしすぎだ。堀北ちゃんは頑固者だし、自分の考えは簡単には曲げない人だ。絶対に何かあったに違いない。
「さぁ、吐け！堀北ちゃんとどんな嬉し恥ずかしイベントがあったんだ？」
「何も無いと言っているでしょ。いい加減にしないと怒るわよ」
「ゲロっちまえよ清隆。楽になるぞ」
「黙りなさい。これ以上続けるようなら今後一切あなたに構ってあげないわよ」
「ごめんなさい。これ以上はなにも聞きません」
「弱っ！」
　うるさいぞ腹黒女。男には引くべき時があるんだよ。堀北ちゃんに怒られるならまだしも、構ってもらえなくなるのは困る。酸素を奪われるようなもんだぞ。
「この話はお終いよ。いいわね？あと、鳴海くんにもＡクラスに上がるための手伝いをしてもらうからそのつもりでいなさい」
「了解であります！」

こうして、話し合いは終わった。しかし、教室に帰ろうとした俺たちに近づく小さな影が一つ。
「ここにいたんですね、幸くん。教室に行ったのに姿が見えなかったので探しましたよ」
「げ」
「女の子に向かって、げとは失礼ですね。幸くんはもう少し女の子の扱いを勉強したほうがいいですよ」
俺たちの目の前には杖をついた銀髪の美少女が立っていた。
「皆さん初めまして。１ーＡの坂柳有栖と申します。幸くんがいつもお世話になってます」
銀髪の美少女は天使のようなに可憐な悪魔の笑みを浮かべた。

第6話

前回のあらすじ。急激な心変わりをした堀北ちゃんが腹黒ちゃんに協力を仰ぎ勉強会をもう一度開催することになった。堀北ちゃんが本気でAクラスを目指すつもりであるとの決意表明もあり、その手伝いをすることになったのだった。

「さて、話も終わったことだし教室に帰ろうぜ」

「幸くん？」

「あ、それとも今からグラウンドでサッカーでもするか？」

「幸くーん。有栖ですよー」

「俺の黄金の右足が火を噴くぜ！」

「……えい」

「痛っ、いってぇー！」

席を立ちあがりその場を離れようとした俺の脛に激痛が走る。あまりの痛みに涙目になる。

「もう、人を無視してはいけないと小学校で習いませんでしたか？」

「人の脛を杖で叩いてはいけないとお前は小学校では習わなかったのかよ！」

「残念ながら、幸くんと違って小学校は私学でしたのでそのようなことは習っておりません」

「公立を馬鹿にすんな！」

脛は攻撃されると弁慶さんでさえ泣いちゃうから殺人鬼と変質者以外には叩いたらダメって教わっただろ。常識だ。

「そんな特殊な教えを乞うた覚えはありません。それに幸くんに無視された私の心の痛みに比べたら脛の一本や二本使い物にならなくなっても安いものです」

「お前を無視したことの代償が両足って重すぎるだろ」

「それほど傷ついたということです。反省してください」

何で俺は怒られているのだろう。有栖を無視したから？そりゃ無視もしたくなるだろ。こいつは見た目天使の中身悪魔だぞ。絶対面

倒くさいことになる。
「天使だなんて照れてしまいます」
「悪魔だって言ってんだろーが！というかさっきからナチュラルに人の心を読んでんじゃねぇよ」
「愛ゆえに。ですね」
　可愛らしくウインクをしてくる。いや、普通に怖いよ。エスパーなの？
「漫才なら他所でやってくれない？私は教室に帰らせてもらうわ」
「あー、ごめんごめん。気にせず先に戻ってて堀北ちゃん」
　痺れを切らした堀北ちゃんがこの場を離れようとする。堀北ちゃんとは一分一秒でも一緒にいたいが、今はこの場を早急に離脱してもらいたい。
「そういわずに少しお話しませんか？」
「誰か知らないけれどあなたと話すことはないわ」
「ふふ、幸くんが随分入れ込んでるようなのでどのような方かと思っていたのですが……」
　有栖は堀北ちゃんを値踏みするかのように見て、不敵に笑った。あの人を小ばかにしたような笑い方はロクなこと言わないぞ。ソースは俺の経験。
「何か？」
「いえいえ、案外普通の方だなと思っただけですよ」
「普通？それは誉め言葉として受け取っていいのかしら？」
「お好きに解釈してください。ただ、普通と言われて褒められていると思う奇特な方がいらっしゃるとは思えませんが」
　瞬間、空気が凍り付いた。明らかに挑発している有栖に対し、明らかに怒っている堀北ちゃん。何コレ修羅場？
「まぁ、あれだよ。普通っていいことだよな。何事も普通が一番だと俺は思うね。そもそも普通ってのは難しいことだからね？人って普通に生きようと思っても簡単にできるもんじゃないからね？それができてる堀北ちゃんは凄いっていうか、もう普通じゃないよね。普通だけど普通じゃないっていう矛盾をはらみながらも気高く生きてい

る堀北ちゃんを俺は尊敬するなー。てか、単純に好き」
「よく今の流れで告白できるな」
「うるさいぞ清隆。完璧なフォローの最中だ、黙っていたまえ」
「黙るのはあなたよ」
「はい、すいませんでした」
　堀北ちゃんに殺気を含んだ目で威圧され大人しく席に座る。俺が何をしたというのだ。ちょっと愛が溢れてしまっただけではないか。
「あまり私の幸くんを虐めないでくださいますか？」
「いや、お前のじゃないし」
「言葉の綾です。私のものになる予定の幸くんでした」
「全然綾じゃないから。俺はお前のものにならないから」
「ふふっ、照れなくてもいいんですよ」
「俺のどこが照れているように見えるんだよ。眼科行け」
　あれ？なんかこのやりとり既視感があるな。いや、気のせいだろ。こんな事実をねじ曲げるやつはこいつ以外知らない。
「鏡でも見てきたらいいんじゃないかな？」
「うるさいぞ腹黒ちゃん」
「私の扱い酷くない!?」
　悪いな腹黒ちゃん、今はお前に構っている暇はない。
「あなた、こんなのが好きなの？」
「こんなのとは失礼ですね。幸くんが可哀想です。謝ってください」
「堀北ちゃんにこんなの扱い……たまりませんな」
「これのどこが可哀想なのかしら？」
「悶えてる姿も格好良いですね」
「はぁー、この学校にはまとも人はいないの？」
　額に手を当ててため息をつく堀北ちゃん。もはやデフォルトになりつつあるな。有栖のせいだな。
「で、なにしにきたんだよ」
「幸くんに会いに来ました」
「さ、教室戻ろう」
「嘘ではないですよ。正確には偶然通りかかったので皆さんに挨拶を

しておこうと思いまして」
　有栖はそう言って視線を一度、清隆に向けた。清隆は気づいていないふりをしているが、間違いなく気づいているだろう。そもそも有栖が来た時点で前に俺が気をつけろと言っていた人物であることは分かっているはずだ。
「では皆さんに紹介してください」
「なんで俺が？」
「あら、パートナーを紹介するのは当然ですよね？」
「勝手にパートナーにしないで」
　1回1回突っ込んでいたらきりがない。堀北ちゃんの不機嫌オーラがどんどん膨れ上がっている。そこで俺の頭に雷が落ちたかのように唐突に閃きが。
「もしかして、堀北ちゃんが不機嫌なのって嫉妬？俺のパートナーを名乗る有栖の登場で危機感を抱いている!?」
「頭に蛆でも湧いてるのかしら」
「ポジティブと言うか、妄想がすごいな」
「もう少し現実を見た方がいいんじゃないかな」
「そんな幸くんも可愛いです」
　総バッシングだった。でも、堀北ちゃんは照れている可能性が高いので良しとしよう。有栖はいつも通りなのでスルー。
「えー、改めまして、こいつはAクラスの坂柳有栖。俺の幼なじみと言うか妹みたいなもん。天使の皮をかぶった悪魔だ」
「よろしくお願いしますね。幸くんとは同棲していた仲です」
「ど、同棲!?」
　何故か腹黒ちゃんが顔を真っ赤にして大きな反応を示した。堀北ちゃんは汚物を見る目でこちらを見てきたのでウインクをしておいたら舌打ちされた。
「俺が10歳の時に施設から引き取ってくれたのが有栖の親父さんで、それから一緒に暮らしてたってだけだからな」
「施設？」
「あー、どこにでもある児童施設だよ」

施設という単語に清隆が僅かに反応する。ちょっと口が滑ったかな。ま、今更か。
「そんなこんなで俺とこいつは家族みたいなもんだから安心してね」
「最初から心配もしてないわよ」
「え、そんなに俺の事信じてくれてたの？」
「私には関係ないことだからに決まっているでしょ。それにあなたに信用なんてものは欠片もないわ」
「私は幸くんのこと信じていますよ。幸せになれるから壺を買えと言われれば倍の値段で買います」
「それは疑ったほうがいいと思うぞ」
信用されないのは辛いが、信用されすぎるのも良くない。ただ、ポイントに困ったら有栖にたかろう。
「話は変わりますが、皆さんはＡクラスを目指すそうですね」
「盗み聞きかしら？いい趣味を持っているみたいね」
「偶然、聞こえてしまっただけですよ。聞かれたくない話ならこのような往来の場でしないことをオススメします」
折角解凍した空気が、またもや凍りつく。この空気やめてくれないかな？お腹が痛くなる。
「こればっかりは坂柳の言う通りだな。生徒が多い場所で話していたオレ達が悪い」
「綾小路くんは物分りが良いのですね」
「客観的に判断しただけだ。それより、オレ達がＡクラスを目指すことがどうしたんだ？」
「別にどうもしませんよ。ただ楽しみなだけです」
「楽しみ？」
「ふふっ」
有栖は天使のような微笑みを浮かべる。しかし、幾度となく見てきたそれは俺には悪魔の微笑みにしか見えない。
「特に幸くんと綾小路くんには期待しています。頑張って下さいね」
「生憎だが、オレにはどうこうできるチカラは無い」
「俺は堀北ちゃんの為に動くだけだし」

「そうですか。それでは私はこれで失礼しますね」
綺麗なお辞儀をして有栖は背を向けて歩き出す。数歩歩いたところでもう一度こちらに振り返った。
「ところで幸くん。恥ずかしかったり照れると道化を演じて誤魔化す癖は治した方がいいですよ。まぁ、そういう所も可愛いのですが」
「なっ」
「あなたの有栖からのアドバイスです。それでは失礼します」
可愛らしくウインクをして帰って行った。余計なことをいいやがって。良いネタを見つけたとニヤニヤしながら腹黒ちゃんがこっちを見てるじゃねーか。ほんと性格悪いな。
「私も戻るわ」
「あ、私も行くね。また後でね、照れ屋な幸くん」
女子2人も先に教室へと戻って行った。あの腹黒まじ許すまじ。
「アレがお前が言っていた奴か」
「……そうだよ。見た通り足が悪くて運動能力はないけど、その分頭はアホみたいにきれるからな」
「そうか」
そう呟いた清隆はいつにも増して無表情で何を考えているか分からない。実際に何も考えていないのかもしれない。清隆にしたら俺たちなど取るに足らない相手なのだろう。
「窮鼠猫を噛むってな」
「何か言ったか？」
「いや、なんでもねーよ。俺らも教室戻ろうぜ」
「ああ、そうだな。幸くん」
「幸くんやめろい！」
なんにせよ、俺は堀北ちゃんのために動くだけだ。堀北ちゃんの前に立ち塞がるなら、清隆でも有栖でもぶっ飛ばしてやる、……できればそうならないようにしたいものだけどな。

第7話

「呼び出してごめんね。私からと言うか、堀北さんから話があるんだって」
　放課後、勉強会の再集結に向け、腹黒ちゃんこと櫛田がもう一度任せてほしいと意気揚々と立候補し、須藤、池、山内の三人を呼び出していた。いや、お前が説得するんじゃないのかよ。
「ななな、なにかな？俺たち、なんかした!?」
「何をそんなに動揺してんだよ。もしかして堀北ちゃんに何かやましいことでもあんのか？もしそうならこの俺の鉄拳が火を噴くぞコラ」
「話が進まなくなるからあなたは静かに教室の隅にでも丸まってなさい」
「はい、すんません」
　早々に堀北ちゃんに怒られて教室の隅に体育座りになる。その様子を見ても誰も何も言わないのはどうなんだろうか。
「いつものことだからな」
「清隆、そのマンネリみたいな言い方は止めてくれたまえ」
「……」
「はい、黙ります」
　堀北ちゃんからの熱い視線を浴びて再び静かに教室の隅で丸まる。堀北ちゃんは真剣モードみたいだからこれ以上ふざけるのは控えておこう。
　堀北ちゃんは池と山内に平田の勉強会には参加をしないのかを尋ねると、二人は平田の悪口とともに参加の意思はなく、前日での一夜漬けでどうにかなるとバカみたいな回答をした。実際バカなんだけど。
「あなたたちらしい考え方ね。けれどこのままじゃ退学になる可能性は高いわ」
「相変わらず何様なんだよ、お前は」
　堀北ちゃんのど正論に噛みついたのは、少し離れたところで机に

座っていた須藤だった。須藤の言葉にイラついた俺は動こうとするも、堀北ちゃんに目で制される。俺の行動を理解する堀北ちゃんって実質俺のこと好きだよな。
「お前は行動が分かりやすすぎるんだよ」
「そんなことねぇわ！あと、さっきからナチュラルに心を読むの止めてくれない？」
「全部表情に出てるからな」
「まじか」
　清隆の横で腹黒ちゃんも苦笑いで頷いているあたり本当にそうなのだろう。やはり、ポーカーフェイスに定評がある俺でも堀北ちゃんのことになると崩れてしまうんだな。堀北ちゃん恐るべし。
　そんなことを考えている間にも二人の言い合いは続いていた。言い合いと言っても須藤が堀北ちゃんに食って掛かっているだけだが。櫛田が間に入るも、先日、堀北ちゃんにバスケを馬鹿にされたのが許せないのか、謝罪を要求する始末。もちろん堀北ちゃんは謝罪はしない。堀北ちゃんの性格上ありえないわな。
「私はあなたが嫌いよ」
「なっ!?」
　謝罪どころか、燃え盛る炎にガソリンをぶちまける堀北ちゃん。痺れるねぇ。てか、須藤は何を驚いてやがんだ。堀北ちゃんがお前程度の男のことを好きなわけがないだろ。そもそも堀北ちゃんの罵倒はご褒美だろうが。
「けれど今、お互いを毛嫌いしているのは些細なことじゃないかしら。私は私のために勉強を教える。あなたはあなたのために勉強を頑張ればいい。違う？」
「そんなにAクラスに行きたいのかよ。嫌いな俺まで誘って」
「ええそうよ。そうでなければ誰が好き好んであなたたちに関わると？」
　正直なのはいいことだけど、それを言ってしまったらだめだよ。プライドの高い須藤が受け流せるわけない。案の定須藤は怒りを募らせ、練習で忙しく、勉強をする意思がないことを堀北ちゃんに話す。

しかし、堀北ちゃんはその言葉を予見していたかのようにカバンから一冊のノートをを取り出すと、それを開いて見せる。
そこにはテストまでのスケジュールが細かに書かれているようで、須藤と他の二人にも向けてに問題の解決策を説明する。
その内容は簡単に言うと、平日の授業を真面目に受け、休み時間中に分からなかったところを解説する短い勉強会を開くというものだった。そうすれば須藤の言うようにバスケの練習時間を削ることなく無駄な時間を有効活用することができる。
「本当にうまくいくのかよ」
「心配ないわ。私と鳴海くんがその授業中、全ての問題に対して分かり易く解答をまとめておくから。それを休み時間に綾小路くんと櫛田さんを含めてマンツーマンで教えればいい」
「あれ？俺、その話初めて聞いたんだけど」
「当たり前でしょ。今初めて話したもの。何か問題でもあるかしら？」
「あるとすれば俺も堀北ちゃんとマンツーマンで勉強がしたい」
「全く問題がないということで話を進めるわ」
おかしいな。俺の言葉は堀北ちゃんに届いてなかったみたいだ。しかし堀北ちゃんにマンツーマンで教えてもらえるとか羨ましい以外の何物でもない。
「物は試し。否定する前に実践してみればいいのよ」
「……やるきになんねぇな。時間かけてやったところで、そんな簡単に裏技みたく勉強ができるようになるとは思えねぇ」
堀北ちゃんが態々三人のために配慮して考えてきてくれた最高のプランをこいつはまだ否定するか。
「なぁ、清隆。そろそろあいつシバいてもいいか？」
「気持ちは分かるが我慢しろ。ようやくここまで来たんだ」
「どうどう」
今にも教室の隅から飛び出そうな俺を清隆が制し、櫛田が落ち着かせる。俺は馬じゃねぇぞ。
「根本的なことを勘違いしているみたいだけれど、勉強に近道や裏技

があるとでも？地道に覚えていくしかない。それは他のことでも一緒じゃないかしら。それともあなたが情熱を注ぐバスケットには近道や裏技があるの？」
「んなわけねぇだろ。何度も何度も練習して、初めて上手くなんだよ」
須藤は自分の言葉にハッとして息を呑んだ。堀北ちゃんの言葉を自分で認めたようなものだな。
「集中力、真剣に取り組む力がない人には絶対に無理。でも、あなたはバスケットのためになら全力を出せる人よ。その力を少しでいいから、今回勉強に回して欲しい。あなたがこの学校でバスケットを続けていくために。自分自身の可能性を捨てないために」
それは堀北ちゃんの僅かながらの須藤への歩み寄りだった。それを聞いて須藤は逡巡するも、口に出たのは否定の言葉だった。
「……やっぱり俺は参加しねえ。堀北に従うってのが、納得いかねーんだよ」
これで完全に堪忍袋の緒が切れる。もちろん堀北ちゃんのではなく俺の。
「だぁーもう！男のくせに小せぇプライドを大事にしてんじゃねぇよ！」
「あぁ？なんだ……」
「口答えしてんじゃねぇ！堀北ちゃんが、お前のことを嫌いな堀北ちゃんが、必死になってお前らが退学にならないように考えて、お前らの性格とか部活のこととかも考慮して練りに練ってくれたプランを否定してんじゃねぇよ！」
「誰もそんなこと頼んでないだろーが」
「お前が頼んだかどうかなんて関係ないんだよ！誰かが自分のためを思ってやってくれたことに男がそんな女々しいこと言ってんな！有難迷惑でもなんでも自分のことを考えてくれる人いるってだけで凄くいいことじゃねぇか。それをお前は堀北ちゃんに従うのは納得いかないなんてくだらない理由でないがしろにすんのか？それがお前の小さなプライドより大事なことなのか？」
「うっ、それは……」

須藤は俺の言葉を聞いて項垂れる。須藤のことだからそれでも言い返してくるかと思ったがそこまで馬鹿ではないらしい。
「鳴海くん、あなた……」
「ただの変な人だと思ってたけどいいところあるじゃん」
「オレもただの変態だと思っていたが、見直した」
櫛田と清隆については色々話したいことがあるが、ひとまず置いておこう。だって俺の言いたいことはまだ終わってない。
「そもそもだ！堀北ちゃんにマンツーマンで勉強を教えてもらえるって時点で即決案件だろうが！」
「……へ？」
どこか感動的な空気が流れていた教室に変な空気が漂い始める。皆一様に驚いたような表情をしている。
「堀北ちゃんと二人っきりの教室で肩を寄せ合っての勉強会。ふとした瞬間に目が合う二人。次第に二人の距離は近づいていき触れ合う唇！羨ましい！俺も堀北ちゃんと勉強会（意味深）をしたい！」
「おい、鳴海。その辺にしておけ」
「止めないでくれ清隆！というか、堀北ちゃんが三人のためにスケジュールを考えてきたなんて血涙が出るくらい羨ましいんだからな！だってそれって昨日の夜はずっと三人のことを考えていたってことだろ？なんだそれ？俺の堀北ちゃんが俺以外の男のことを一晩中考えていたなんて許せん！嫉妬の炎で焼き付きしてやろうか」
「いや、だからちょっと落ち着いて」
「お前は黙ってろ腹黒」
「私だけ扱いひどくない!?」
腹黒ちゃんが止めに入るも止まる気は毛頭ない。一番許せないことがまだある。
「それと、須藤！」
「な、なんだよ」
「さっき堀北ちゃんに褒められてたよな!?軽く褒められてたよな？」
「いや、褒められたというか……」
「俺は自慢じゃないが堀北ちゃんに全く褒められないんだよ！１００

回罵倒され、１００回呆れられた末に１回褒められることがあるかどうかのもんなんだよ！それをてめぇは簡単に！しかもそれを聞いたお前はどうした？参加を断ったよな？んなもん断るより先に喜ばんかい！あの堀北ちゃんに褒められてんのに喜ばんとはどういうことだコラ。さっさと礼を言わんかい！」
「あ、ありがとう……ございます」
　俺の勢いに呑まれ謝礼を述べる須藤。
「おし、それでいい。それと、勉強会だ。参加するのかしないのかどっちなんだ？そもそも堀北ちゃんが誘っている時点で断るなんて選択肢はないんだよ！」
「お、おう。参加するよ」
「よっしゃ。これで一件落着だな」
　須藤の言質を取ったところでようやく落ち着きを取り戻す。須藤の表情は怒りなどは全くなくなり、全力で引きつった表情をしていた。
「あ、そっちの二人はいい点とった奴と櫛田がデートしてくれるから頑張り給え」
「ええ!?」
　その一言で池と山内の両方が簡単に吊り上がった。こんな女のケツばっかり追いかけて恥ずかしくないのだろうか。
「さて、堀北ちゃん！全部丸く収まったよ。褒めてくれてもいいんだぜ」
「ええ、そうね。気持ちが悪いから私に近づかないでくれるかしら」
「なんで!?」
　堀北ちゃんはそれはもう可愛らしい笑みを浮かべていた。滅茶苦茶怒ってる奴だこれ。
「一瞬でもあなたを見直した私が浅はかだったわ」
「まじで!?俺のこと見直してくれたの？これは好感度アップ間違いなしなやつじゃん」
「話を聞いていたの？好感度なんて地に落ちたものが地面をえぐり続けてるわよ」

「地面をえぐるほど俺のことを思ってくれてるってこと？最高じゃん」
「頭のネジが外れまくっているとは分かっていたけど、まさかここまでとはね」
「愛故に、だね」
　いつも通り頭を抱える堀北ちゃん。そんなに変なことを言っていたかなと記憶を辿るも特に思いつかなかったので気にしないことに決めた。
「何だかんだうまくまとまったということでいいのか？」
「い、いいんじゃないかな。結局堀北さんだけがダメージを負っている気がするけど」
「とりあえず鳴海は堀北関連では怒らせないようにした方がよさそうだな」
「うん。ホント堀北さんには同情するよ」
　清隆と櫛田が何かを話し、それに他の三人も大きく頷いていたが、何だったのだろうか。大方、俺と堀北ちゃんがお似合いだとかそういう話だったのだろ。そう結論づけて堀北ちゃんに意識を向けなおした。

第８話

色々ありながらも再結成することができた勉強会は意外にも順調に進んでいる。

皆が退学しないために嫌いな勉強に立ち向かい続けていた。黒板に書きだされた問題を繰り返し見て、必死に理解しようと何度も首を捻ひねる三バカトリオの姿は似合わないと思いつつも、見ていて悪い気分ではない。須藤に至っては、時折意識が朦朧として、首が前後するが、それでもギリギリで踏みとどまっている。やればできるんだから最初からやればいいのにな。あいつのバスケにかける情熱には一目を置くところがある。夢に向かってひたむきに頑張る姿は決して不良品なんて呼んでいいものではない。まさに俺が堀北ちゃんにかける情熱のようにな。

「というわけで、ぶっちゃけ本当に退学なんてあると思う？」

「どういうわけか全く分からんのだが」

昼休みのチャイムが鳴った瞬間に清隆に質問をする。急に話しかけられた清隆は呆れたように返答した。ちなみに須藤たちは昼のチャイムが鳴ると同時に、一目散に食堂へと駆けて行った。昼休みは全部で４５分であり、その内２０分間で全員が図書館に集合して勉強をする約束になっているので、全力で食事をとりにいったのだろう。

「清隆は俺の心が読めるんだろ？」

「変な設定をつけないでくれ。鳴海は表情に出やすいから考えていることが分かり易いだけだ」

天下のホワイトルーム出身者でも人の心を読むのは無理なのか。実際のところどうか分からんがな。実際に心を読めていたところで話のつながりが全くと言っていいほどなかったのは気にすることではない。

「いやさ、実際に赤点を一つでも取れば退学なんて本当ありえんのかね。ちっと厳しくない？」

「さぁな。だが制度自体は嘘ではなく、存在しているのは事実だ」

「そこが引っかかるんだよねー。だってそこまで学力に重きを置く学校なら、最初から須藤達(あいつら)みたいな馬鹿は入学させないだろ」
「言い方はひどいが、その点は同意だ。学力以外の才能を評価して入学させたのだとすれば、この退学制度は矛盾している」
　清隆の言う通り、おかしな話なのだ。仮に勉強はできないが、その他の秀でたものを見出し、入学をさせたのならば、それを赤点を一つでもとれば退学だなんて制度を作る意味が分からない。
「あなたたち、お昼は食べないつもりなのかしら？そんなに悠長にしている時間はないと思うのだけれど」
「俺と清隆が仲良さげに話してるから嫉妬しちゃったのかな？かわいいなーもー」
「綾小路君はどうするの？」
「え？スルー？」
「そうだな。一緒に食堂ででも――――」
「綾小路くーん。お昼、一緒に食べよ？　今日は予定空けてきたんだ」
　華麗なスルーを決めた堀北ちゃんに清隆が一緒に食べることを提案しようとするが、横やりが入った。
「出やがったなミス腹黒」
「へ、変な呼び方しないでくれるかな？鳴海君」
「お前の性格を表した完璧な呼び名だと思うが？」
「もうっ、冗談はやめてよね」
「ははは。冗談はお前の性格だろ」
「あはは。鳴海君はいつも面白いねっ」
　横やりを入れてきたのはミス腹黒こと櫛田だ。可愛らしい笑顔の下にどす黒い俺に対する怨念が隠されていることはお見通しだ。その横で堀北ちゃんの不機嫌ゲージが一気に上昇したことも俺は分かっている。堀北ちゃんの変化を見逃す俺ではない。モテる男は女の子の些細な変化も見逃さないのだ。
「じゃあ櫛田も入れて４人で――――」
「それじゃ。私は予定があるから、これで失礼するわ」
　堀北ちゃんは足早に一人で教室を出て行ってしまった。それにし

てもに連続でセリフを遮られた清隆が不憫でならない。心なしかしょぼんとしている清隆の肩にそっと手を置いて優しく微笑んであげたら嫌な顔をされた。
「ごめんね……私、お邪魔だったかな？」
「いや、そんなことは――――」
「間違いなく邪魔だったし、邪魔だと分かって入ってきた君には腹黒グランプリの称号を上げよう」
　堀北ちゃんに続いて俺も清隆のセリフを遮ってしまったが、許してほしい。ほら、俺と堀北ちゃんってお似合いの似た者同士だからさ。清隆には後でジュースでも奢ってあげよう。
「そんな称号いらないよ！てか、さっきから腹黒腹黒うるさいんだよ。他の人にばれたらどうしてくれるのさ」
「おい、櫛田。本性が出てるぞ」
「随分とお前の仮面も緩くなったものだな」
「うるさいっ！」
　腹にグーパンを決め込もうとしてきたので、軽く躱してデコピンをお見舞いしてやった。地味な痛みに涙目になる櫛田。俺に勝とうなんて百億光年早いわ。あと、心底どうでもいいが、櫛田は本性を出しても上手くやっていけるのではないだろうか。
「さて、お前らに構っている時間はもうない。櫛田は清隆に用事があるみたいだし、是非二人で昼食をとってくるといい。俺は早急に堀北ちゃんを追いかけねばならんのでな」
「相変わらず鳴海の行動の中心は堀北だな」
「ホントぶれないよね」
「当たり前だ。世界は堀北ちゃんを中心に回っているといっても過言ではない」
「それは過言だろ」
　清隆のツッコミと未だに額を押さえながら俺を睨む櫛田を軽くスルーして、全速力で堀北ちゃんを追いかけた。

「堀北ちゃんはA定食にするんだ。じゃあ俺はBにしようかな。もちろんこっちのおかずが食べたくなったらあーんしてあげるから安心してね」
「あなたが食べているものなんて汚物にしか見えないからその必要は全くないわね」
「え？それは食堂のおばちゃんに失礼だよ」
「何で急に真面目になるのよ」
　堀北ちゃんは先に食堂のおばちゃんから定食を受け取り、俺のことは気にも留めず空いている席に腰を下ろした。いつもの事なので焦ることなく堀北ちゃんの正面の席に座った。堀北ちゃんの隣も捨てがたいが、やはり綺麗なお顔を観ながら食べる飯は最高なので正面が最適解。
「正論をぶつければあーんを出来る確率が上がるかと思って」
「するわけないでしょ。あなたに食べさせられるくらいなら地面に落ちたものを食べた方がマシね」
「それはお腹壊すから止めた方がいいと思う」
「だから何で急に真面目なのよ」
「そりゃ、堀北ちゃんにはいつまでも健康でいて欲しいからね」
　その返答に堀北ちゃんの箸を持つ手が止まり、不思議そうにこちらを見る。
「……そう思うなら私に話しかけないでくれるかしら？」
「いや、何でさ」
「あなたに話しかけられるとストレスで胃に穴があきそうなの。著しく健康が損なわれているわ」
「ふっ、それはね、恋という病さ」
「そういうのがストレスだと言っているのよ」
　興味を失ったかのように俺から視線を定食の白米に移した。白米を食べる堀北ちゃんもいいな。育ちがいいのか箸の使い方が綺麗だ。大和撫子という言葉は堀北ちゃんのためにあるのではなかろうか。
「そんなことより、さっき綾小路君と話していた件についてなのだけ

れど」
「清隆と？ああ、清隆が俺の心を読めるかって話？」
「そんなどうでもいいことではなくて、その後の話よ」
「その後って退学がありえるかって話か」
　俺が清隆と心が読めるかの話をしていたことを知っているということは最初から盗み聞きしていたということなのだけれど、それを指摘すると本格的に機嫌を損ねそうなので口を噤んだ。
「あなたはどう考えているの？」
「んー。赤点で退学ってのは嘘じゃないと思うよ」
「先生が発破をかけるために嘘をついた可能性は？」
「茶柱先生がそんな殊勝なことをするかね」
「ないわね」
　自分で聞いておいてすぐに否定するあたり、言ってみただけなのだろう。まぁ、あの担任だから仕方がないよね。
「なんにせよ、赤点さえ取らなければ問題なしだね」
「それが一番問題なのよ」
「試験までに間に合えばいいけどねー。もしや赤点を回避するための裏技があったりして。探してみる？」
「そんな不確かなものを追い求めている暇はないわ」
「さすが堀北ちゃん。堅実だね。いいお嫁さんになるよ」
　俺の嫁にねという意味を込めてウインクをしたら舌打ちで返された。
「……もし裏技のようなものがあったとしたら、今やっていることは完全に無駄になるわね」
「そんなことないと思うよ」
　俺に否定されると思わなかったのか、堀北ちゃんは意外そうに俺を見る。食事をしていて初めてまともに目が合った気がするけど、悲しくなるので気付かなかったことにしよう。
「今のあいつらに立ちはだかっている壁は、いずれは乗り越えなければいけないものだと思う。だから、必死になって壁を越えようとしているあいつらの努力を無駄と吐き捨てるのは早計なんじゃないかな」

「それで退学になったとしても無駄じゃなかったなんて言えるのかしら」
「さぁ？そんなもん知らん」
「知らんってあなた……」
「無駄かどうか決めるのはあいつら自身だし、無駄にするかどうかもあいつら次第だ。他人が人の努力が無駄かどうかを決めるものではないと俺は思う」
「短絡的な考えね。世の中結果がすべてよ。結果が伴わない努力なんて無駄でしかないわ」
「世知辛い世の中だね」
　堀北ちゃんはまるで自分に言い聞かせるようにそう言って立ち上がり、食べ終わった食器を返却口へ返しに行った。
「どうして人ってのは結果ばかり求めるんだろうねー」
「昔の自分を見ているようですか？」
「……急に話しかけてくんなよ。ちびるだろうが」
「ふふっ、そう言う割には驚いている様には見えませんよ、幸くん」
「俺はポーカーフェイスなんだよ」
　振り返ると、案の定、俺の後ろの席に銀髪の少女が座っていた。俺の幼馴染である坂柳有栖だ。
「盗み聞きはいい趣味とはいえんぞ」
「偶然、偶々、聞こえただけですよ。盗み聞きなんて心外です」
　プンプンと、わざとらしく頬を膨らまして怒る有栖。幼い容姿も相まってとても可愛らしいのだが、俺は堀北ちゃんにしか眼中にないし、妹みたいな存在なので何とも思わん。とりあえず、頭は撫でておこう。
「ふみゅう。やっぱり幸くんは頭をなでるのが上手ですね」
「事あるごとに撫でさせられてたら上手くもなるわな」
「それで、今回の試験はどうするおつもりですか？」
「どうもこうもねぇよ。堀北ちゃんは正攻法を選んだ。俺はそれについていくだけだ」
「まるで正攻法ではないやり方があるように聞こえますが」

「まるでもなにもそう言ってんだよ」
悪い笑みを浮かべた有栖にデコピンをお見舞いする。有栖は涙目になりながらも嬉しそうに笑みを浮かべる。何こいつ変態なの？
「では、幸くんも気付いているのですね」
「あの小テストがあっての今回の件だからある程度は想像がつく。まぁ、確認をしたわけじゃないから何とも言えんがな」
つい先日にやらされた小テストには解けるはずのない問題があった。それに茶柱先生の意味深な発言。それらを合わせるとおのずと答えが出てくる。
「その辺は清隆とかが上手くやるだろ。俺は堀北ちゃんに身も心もゆだねるぜ」
「そうですか。後悔だけはなされないように気を付けてくださいね」
「そんなもんするわけないだろ。俺は堀北至上主義なんだから」

第9話

有栖と別れた俺は図書館に向かう途中で清隆と櫛田に出会い、ともに館内へと足を運んだ。館内では各学年の大勢の生徒が勉学に励んでいた。愛の力でその中から堀北ちゃんを一目散に見つけると、そこには三馬鹿トリオがノートを開いて準備万端の様子で座っていた。

「おまたせー堀北ちゃん！」

「遅いわよ」

「ごめんね。こいつらがちんたら歩くからさ。俺は急ぐように言ったんだけどね」

「こいつ秒で人を売りやがったな」

「当たり前だ。こんなことで堀北ちゃんの好感度が下がったら大変だろうが」

「それ、全部本人に聞こえてるけどね」

櫛田に指摘され堀北ちゃんに目を向けるが、そもそもこちらを見ていなかった。無関心よりは最低だと罵られた方が良かった。というか罵られたい。

「まさかお前たち、一緒に飯食ってたんじゃないだろうな？」

同時にやってきたことを怪しんだ池が疑いの眼差しで俺たちを見る。

「お前の言う通り、こいつらは一緒に飯食ってたぞ」

「おい、余計なことを言うな」

俺があっさり肯定したことにより池たちは親の仇を見るかのように清隆を睨みつけた。

「そして何を隠そう、この俺は堀北ちゃんと二人でランチタイムを楽しんだわけだ。大事なことは二回言うぞ。二人で、だ。どうだ羨ましいだろ。羨望の眼差しで俺を見るといい」

「いや、それは別にどっちでも」

「表出ろやコラ。なんで羨ましがらねぇんだよ。ぶっとばすぞ」

池に掴みかかろうとする俺を清隆が羽交い絞めして止め、櫛田がど

うどうと俺を落ち着かせようとしている。何故こいつらは羨ましがらないのか。堀北ちゃんとランチだぞ。俺だったら血涙を流して悔しがり、羨ましがってからそいつを消すぞ。
「早くして」
「はい。すいませんでした」
わちゃわちゃしている俺たちに堀北ちゃんは一瞥もくれず一言であしらう。俺はすぐに謝罪をし、静かに着席をした。あと、さっき俺を止めるときに馬を落ち着かせるように対応した腹黒ちゃんは後でいじめる。
そんなこんなで勉強会がスタートした。のだが、開始早々に邪魔が入った。櫛田が先程の授業で習った、帰納法を考えた人物の名前を問題として出した。それに池がフランシス・ベーコンと答え正解したことによりテンションが上がって大きな声を出してしまった。隣で勉強していたグループの一人がそれにイラついてこちらに注意をしてきたので、池がへらへらと笑いながら謝罪をした。普通ならそれで終わりなのだが、その生徒があることに気付いた。
「お前らひょっとしてDクラスの生徒か？」
その一言でグループの男子生徒たちが一斉に顔を上げ、こちらを見回す。その様子に須藤がキレ気味で返答する。
「なんだお前ら。俺たちがDクラスだから何だってんだよ。文句あんのか？」
「いやいや、別に文句はねえよ。俺はCクラスの山脇だ。よろしくな」
山脇と名乗った男子生徒はニヤニヤと笑いながら、俺たちを見回す。何こいつ俺の堀北ちゃんを舐め回すように見てんだ？気持ち悪いな。変態か？
「この学校が実力でクラス分けしててくれてよかったぜ。お前らみたいな底辺と一緒に勉強させられたらたまんねーからなぁ」
「んだと！」
しょうもない挑発に真っ先に怒りで立ち上がったのは、言うまでもなく須藤。こいつは本当に馬鹿だな。こんなやつ放っておけばいいのに。変態は相手にすると付け上がんだよ。一応言っておくが、俺は

変態じゃないからな。
「本当のことを言っただけで怒んなよ。もし校内で暴力行為なんて起こしたら、どれだけポイント査定に響くか。おっと、お前らは失くすポイントもないんだっけか。てことは、退学になるかもなぁ？」
「上等だ、かかって来いよ！」
さらなる挑発に須藤が吠える。ほら見たことか。相手にするからどんどん調子に乗ってるじゃん。しかも須藤がキャンキャン吠えるから嫌でも周囲から注目を浴びてしまっている。面倒くさいが、そろそろ止めるか。
「そう吠えなさんなって、須藤。ここで騒ぎを起こすことが無意味だってことぐらいわかるだろ」
騒ぎがこれ以上大きくなり、問題になればどうなるか分かったもんじゃない。こいつが退学になるのなんて知ったこっちゃないが、ここまでの堀北ちゃんの努力が無駄になるのは見逃せるものじゃない。
「鳴海君の言う通りよ。最悪退学させられることだって、あると思った方がいいわ」
「けどよ！」
「はい、堀北ちゃんに反抗禁止。おすわり」
「うおっ」
堀北ちゃんに食って掛かろうとした須藤の肩を掴み、足を払って強引に椅子へ座らせる。須藤は何が起こったのか分からず、頭の上に疑問符を浮かべていた。大人しくなってくれたようで何よりだ。堀北ちゃんは少し感心したような顔でこちらを見ると、すぐに山脇の方へ視線を向けた。
「私たちのことを悪く言うのは構わないけれど、あなたもCクラスでしょう？　正直自慢できるようなクラスではないわね」
「A～Cなんて誤差みたいなもんだ。Dクラスだけは別次元なんだよ」
「随分と不便な物差しを使っているのね。私から見ればAクラス以外は団子状態よ」
「不良品の分際で生意気言うじゃねえか。顔が可愛いからって何でも

許されると思うなよ」
「脈絡もない話をありがとう。容姿のことを、どこかの誰かさんに褒められるよりかよっぽど不愉快に感じたわ」
「他にも堀北ちゃんが不愉快に感じてる奴がいるのな。そいつ可哀想だな」
「そ、そうだな」
　清隆に話しかけると、物凄く微妙な顔をされた。その横で腹黒ちゃんも笑顔を引きつらせている。その様子を疑問に思っていると、山脇が机を叩き立ち上がった。それをCクラスの生徒が慌てて袖をつかんで押さえている。さっきと立場が逆転してるな。
「今度のテストで赤点を取れば退学って話は聞いてるだろ？　お前らから何人退学者が出るか楽しみだな」
「残念だけど、Dクラスからは退学者は出ないわ。それに、私たちの心配をする前に自分たちのクラスを心配したらどうかしら。驕っていると足元をすくわれるわよ」
「足元をすくわれる？　冗談きついぜ。俺たちはお前らと違って、より良い点数を取るために勉強してんだよ。赤点回避のために勉強してるお前らと一緒にすんな」
　暴力はまずいと気づき、またもや挑発を繰り返すが堀北ちゃんには全く効いていない。むしろ聞いていない。須藤だけはヒートアップしそうだったので、口を押さえておいた。モガモガ言っているが、何を言っているのか分からないので力を強くした。堀北ちゃんの胸ぐらをつかんだ恨みは忘れてないからな？
　そんなこんなで、そろそろ話を終わらせるべきだろうと考えていた矢先に、山脇が聞き逃せない発言をした。
「大体、お前ら、フランシス・ベーコンだとか言って喜んでるが、正気か？　テスト範囲外のところを勉強して何になるんだ？」
「え？」
「もしかしてテスト範囲もろくに分かってないのか？　これだから不良品はよぉ」
　不良品と聞いて須藤がさらに怒りをあらわにしようとするが、力づ

くで押さえ付けた。それより今、山脇はテスト範囲外と言ったか？本当にそれが正しいのだとしたら……。俺と同じことを考えていたのか、堀北ちゃんと目が合う。
「おい！無視してんじゃ――――」
「はい、ストップストップ」
　完全にスルーされていた山脇が食って掛かろうとしてきたが、思わぬ人物により制止される。
「この図書館を利用させてもらっている生徒の一人として、騒ぎを見過ごすわけにはいかないので、口出しさせてもらうね」
　そう言って俺たちの間に立ったのは一人の女子生徒だった。顔立ちが整っており美少女と言える。だが、堀北ちゃんには敵わないのであしからず。
「さっきから聞かせてもらってたけど、挑発が過ぎるんじゃないかな？これ以上続けるなら学校側に報告しなきゃいけないんだけど、それでもいいのかな？」
「そ、そんなつもりじゃないんだよ。わ、悪かったよ、一之瀬。おい、行こうぜ。こんな所で勉強していたら馬鹿が移る」
　馬鹿みたいな捨て台詞を吐いてＣクラスの生徒達は図書館から去って行った。謝るなら堀北ちゃんに謝れよ。
「君たちもここで勉強を続けるなら、大人しくやろうね。以上っ」
　一之瀬と呼ばれた女子生徒はこちらに軽く注意をして、颯爽と去って行った。良く分からない奴だが、うまくこの場を収めてくれたので心の中で感謝しておく。
「堀北と違って、しっかりこの場を治めていったな」
「私は乱したつもりはないわ。ただ本当のことを言っただけよ」
「そうだそうだ！堀北ちゃんを不快にさせたあいつが悪い。やっぱ俺みたいに愛のこもった褒め言葉を使わないとな」
「やっぱりあなたの方が不快かもね」
「何で!?」
　また照れ隠しか。本当に不快そうに表情を歪めるなんて、演技派だな。

「そんなことより――――」
「おい、腹黒ちゃん。そんなことよりって何だ？俺と堀北ちゃんの事より大事なもんがあるってのか？」
「だ、だって、それ大丈夫なの？」
　それと言って俺の腰らへんを腹黒ちゃんが指をさした。
「あ、やべ……」
　目線を下げると、俺に口をふさがれてモガモガしていた須藤が力なく項垂れていた。俺に気道を完全にふさがれていたことにより息ができずに瀕死状態になってしまっていた。
「いつかやるとは思っていたが、とうとう殺ってしまったか」
「おい、人殺し扱いすんじゃねぇよ。てかやると思ってたの？俺ってそんな危険人物だった？」
「鳴海君、自首しよっ。こればっかりは仕方がないよ」
「嬉しそうに言ってんなよ腹黒。せめて悲しむ演技をしろ」
「これで静かになっていいわね。はじめて鳴海君に関して嬉しい感情を持ったわ」
「堀北ちゃんまで!?てか、それ冗談だよね？マジでへこむよ？」
　俺の質問に何も答えない堀北ちゃん。え、まじで嬉しいと思ったことないの？俺なんて一緒の空間にいられるだけで狂喜乱舞なのに。
「さて、冗談はさておき」
「お前が言うのな」
「全てが冗談だということにしておくんだよ。世の中には曖昧にしておいた方がいいことがあんの」
　強引に話題を変える。グロッキー状態の須藤を池たちに渡し、腹黒ちゃんにはデコピンをお見舞いしておく。「何で私だけなんだよ！」とデコを押さえながら涙目で訴えていたがスルー。だって堀北ちゃんには暴力はふれないし、清隆は後が怖いから仕方がないだろ。
「兎にも角にも、さっきのテスト範囲外だって発言についてだな。本当に間違っていたのか？」
「いや、テスト範囲についてはオレも堀北も櫛田もメモをしていたし、一致していたから間違いないだろう」

「クラスでテスト範囲が異なるのも考えにくいわね。学年で統一されてなければおかしいわ」
　清隆の言うように、茶柱先生から伝えられているテスト範囲に間違いはないし、堀北ちゃんが言うように、クラスで違う問題ってのはまずありえない。ポイント制度を導入している分、基準が曖昧になってしまうからだ。
「そうなると、別の可能性……テスト範囲が変わっている？」
「Ｃクラスの生徒が早くに範囲の変更を伝えられていた可能性もあるな」
「とにかく、先生に聞きに行くしかないわ」
　堀北ちゃんの言葉に全員が頷き、勉強を切り上げ荷物を片付ける。もしこれでテスト範囲がすべて変わっていたのだとしたら……。堀北ちゃんもその可能性に至ったのか、珍しく表情に焦りが見えた。そして俺たちは職員室へ向かった。

第１０話

「先生。急ぎ確認したいことがあります」
　職員室に到着した俺たちはすぐさま茶柱先生のもとへ駆け寄った。三馬鹿トリオは須藤が未だにグロッキー状態なので廊下で待機している。あいつらがいると話の進みが遅れるから結果オーライだな。
「どうした？随分と物々しいな」
「先週茶柱先生が仰っていた中間テストの範囲ですが、それに間違いはありませんか？　先程、Ｃクラスの生徒からテスト範囲が違うと指摘を受けましたので」
　堀北ちゃんの質問に茶柱先生は全く動じる様子はない。まるでその質問がくると分かっていたようだ。嫌な予感しかしないな。
「……そうか、中間テストの範囲は先週の金曜日に変わったんだったな。悪いな。お前たちに伝えるのを失念していたようだ」
「なっ!?」
「マジかよ……」
　茶柱先生は悪びれる様子もなく淡々と言った後、ノートの切れ端にテストの範囲と思わしき部分を書いて堀北ちゃんに手渡した。軽く見ただけでも今まで勉強をしてきた範囲ではない部分が大半を占めていた。こりゃ完全にやられたな。
「堀北のお陰でミスに気付くことが出来た。皆も感謝するように。以上だ」
「ちょっと待ってください！いきなり変わったと言われても、もう時間が……」
「まだ一週間もある。これから勉強をすれば楽勝だろ？」
「でもっ！」
「……行きましょう」
　櫛田が茶柱先生に食い下がるも、取り付く島もないことを理解したのか、堀北ちゃんは踵を返し職員室を出ようとする。
「いいのか？」
「こうしていても時間の無駄よ。テスト範囲が変更になったことは事

実。それなら新しいテスト範囲の勉強を少しでも早く始めるべきよ」
「それもそうだな。行くぞ櫛田」
「……うん」
　堀北ちゃんと清隆に連れられ未だに納得できていない櫛田も職員室から退出していった。まぁ、そう簡単に納得できる問題ではないよな。
「……鳴海、お前はまだなにか用件があるのか？」
「いや、別にないっすよ。ただ、茶柱先生にしては大きなミスを犯したなと思って」
「人間誰しも間違いはあるだろう」
「そうっすねー。でもそれに対して先生方は誰一人反応を示さないんですね。もしかして先生嫌われてます？いつもしかめっ面だからですよ。もっと笑わないと」
「余計なお世話だ」
　先生はこちらを一睨みして仕事に戻った。もしかして本当に他の先生から嫌われているんだろうか。可哀想に。
「ちなみに堀北ちゃんも、しかめっ面がデフォルトですけど、そこがまた可愛いんですよね！でも、意外と表情が豊かで、驚いたときとか目を見開くんですけど、それが可愛くて！この間なんて超レアな照れ顔を見てしまいまして、それがまた可愛いのなんの！思わずキュン死してしまいそうになりましたけど何とか持ちこたえました。あの場で堀北ちゃんを抱きしめなかった自分を褒めてやりたい！それとですね――」
「鳴海、ちょっと待て。急にお前は何を言ってるんだ」
　これからがいいところというのに茶柱先生に強制的に止められた。茶柱先生は珍しく困惑したような表情をしており、先程まで無関心だった先生方も唖然としていた。俺なんか変なこと言ったかな？堀北ちゃんの魅力をほんの少し語っただけなんだが。
「つまりですね、何が言いたいかと申しますと」
　俺は目の前に座ってる茶柱先生の耳元に顔を近づけた。
「堀北ちゃんの顔を曇らせる奴は俺がぶっ潰します。それが誰であろ

うとね」
「……それは教師(わたし)に対する脅迫か？」
「いやだな先生。ただの決意表明ですよ。それじゃあ愛しの堀北ちゃんが待っているので戻りますね」
そう言って俺は職員室から出て行った。最後に見た茶柱先生が嬉しそうな笑みを浮かべていたのが少し気になった。あの人も変態か？この学校は変態が多いな。堀北ちゃんに寄ってこないように注意しなきゃな。

職員室からでたあと普通に堀北ちゃんに置いて行かれたことに軽いショックを受けながらも教室に戻ってきた。堀北ちゃんは真剣に何かを考えているようなので清隆に状況を説明してもらった。
堀北ちゃん達が職員室から出た後、須藤が目を覚ましており、三馬鹿トリオに事情を説明したそうだ。まず、櫛田に堀北ちゃんがクラスメイトにテスト範囲が変わったことを周知するようお願いし、それを受諾した。次に大きな心配だった三馬鹿トリオのモチベーションだが、意外にも落ちるどころかむしろ上がっていたらしい。中でも須藤は大好きな部活動を休むと申し出て堀北ちゃんに頭を下げたそうだ。須藤の血気盛んさがいい方向に向かってくれた。それに触発され池と山内もやる気になったらしい。ちなみに、その際須藤が堀北ちゃんの肩に触れたらしいので、また締め落とそうと心に決めた。

次の日の昼休み。清隆はチャイムが鳴るとそそくさと教室を出て行った。その様子が気になっていると、同じく気になっていたのか、櫛田が清隆の後を追おうとしていた。
「腹黒くてストーキングが趣味とか終わってんな」

「ひゃっ!?」
「何がひゃっだよ。ぶりっ子か?ぶりぶりちゃんなのか?」
「お前が急に後ろから声をかけるからだろ!それに変なあだ名を増やすな!しかも意味が変わってるし」
　キャンキャンと吠える櫛田が犬みたいだったので頭を撫でておいた。すると怒っていた顔が破顔し、締まりのないものになっていた。俺のナデナデスキルは最強なのだ。いずれは堀北ちゃんにやりたい。櫛田は我に返って「勝手に撫でるな!」と俺の手をはたいたので、デコピンをお見舞いしてやった。
「ううっ、なんで私がこんな目に……」
「躾は大事だからな」
「お前のペットになった覚えはないよ!」
　涙目で恨めしそうに俺を睨むが全く怖くない。とりあえず鼻で笑っといたらショックを受けていた。
「腹黒ちゃんは清隆をストーキングしに行くのか?」
「違うよ!……あれ?でも、間違ってはいないかな?」
「うわ、引く」
「引くな!鳴海君に引かれると本気で死にたくなる」
「なんでだよ」
「え?一番の変態に引かれるとかきつくない?」
　真顔で訳の分からんことを言うやつだな。確かにこの学校には変態が多いことは実感したばかりだが、俺が変態なわけがないだろ。ただ一途な好青年だろうが。
「綾小路君が昨日、職員室を出るときに気になることがあるって言ってたの。それが何かと思って後を追っていただけだよ。別にストーキングしてたわけじゃない」
「それならそうと早く言えよな。紛らわしい」
「もうツッコまないからな」
「突っ込むとかやらしいな。さすがクラスメイトに乳を触らせることだけある」
「うがー!」

櫛田は発狂した。やっぱりストレスか。今度ストレス軽減チョコを買ってあげよう。
「でも、確かにそれは気になるな。よし、櫛田。君に偵察を命じよう」
「何様だよ。というか今、普通に名前呼ばなかった？ねえ？」
「……腹黒ちゃん、君に偵察を――――」
「言い直すな！はぁ、元から聞きに行くつもりだったからいいけど、鳴海君もついてきたらいいんじゃないかな？」
「いや、俺には堀北ちゃんと昼飯を食べるという重大なミッションがあるからな」
「あっそ。もう好きにして」
そう言ってゲッソリとした櫛田は清隆のもとへ向かっていった。それを見送った後、堀北ちゃんと楽しいランチタイムにしゃれ込むため教室に戻ったが、すでに堀北ちゃんの姿はなく、一緒に食べることができなかった。腹黒ちゃんで遊びすぎたようだ。

「それじゃあ鳴海君は須藤君に教えなさい」
放課後の勉強会で堀北ちゃんにそう言われ、渋々須藤の正面に座る。マンツーマンで勉強するということで教室内で各々離れたところに座っていた。腹黒ちゃんは山内を、堀北ちゃんは池と清隆を担当している。清隆なんて絶対俺より勉強できるんだから変われよ。なんで俺が野郎に勉強なんぞ教えなければならんのだ。しかし堀北ちゃんにお願いされた以上断るわけにはいかない。惚れた弱みってやつだな。
「あーくそっ！わかんねえ！」
須藤は頭を強くかきながらペンを机に放った。勉強を教える以前に須藤の勉強に対する姿勢をどうにかする必要があるのは明白だ。このままではこの繰り返しだ。
「分からない問題があるたびに一喜一憂してどうすんだ。無駄なエネ

ルギー使うなら頭を動かすのに使え」
「うるせぇ。わかんねぇもんは仕方がないだろうが」
「分からないから勉強してんだろ？お前は前提を履き違えてんだよ。分からないのが普通なんだよ。だからできるように考える。少し勉強したぐらいで賢くなった気でいるなよ。自分の立ち位置を見誤るな」
「てめぇ」
「須藤君、落ち着いて！鳴海君も言い過ぎだよ」
　椅子を倒しながら勢い良く立ち上がった須藤が俺に掴みかかろうとするのを見て櫛田が慌てて止めにきた。別に大丈夫だから戻ってと伝えると渋々席へ戻って行った。
「いまお前がすることはイライラを人にあたり散らかすことか？Ｃクラスに馬鹿にされて悔しかったんだろ？あいつらを見返す方法は一つしかないと思うが」
「くっ」
　激高して立ち上がった須藤だったが俺の言葉を聞いて大人しく席に座った。それだけＣクラスに馬鹿にされたことが悔しかったのだろう。ここで思いとどまることができるのならまだ見込みはありそう。
「お前みたいに勉強ができる奴に俺たちの気持ちなんてわかんねぇよ」
「ああそうだな。お前らと違って俺は頭がいいからな」
「喧嘩売ってんのか？」
「事実だ。だが、だからといって何もしていないなんて勘違いするなよ。俺も堀北ちゃんも死に物狂いで努力してきてんだ。それはお前も同じだろ？」
「それは……」
　須藤はこれまでバスケを必死に練習してきたことを思い出しているのだろう。堀北ちゃんも以前に言っていたが、こいつのバスケに対する熱意には目を見張るものがある。それを勉強に向けられればベストなんだが、そううまくはいかない。

「須藤は勉強に関しては努力をしてこなかった。でも俺や堀北ちゃんは努力をしてきた。違いはそれだけだろ」
「……じゃあどうすりゃいいんだよ」
「簡単な話だ。わかんないことがあったら聞け。だから俺や堀北ちゃんがいるんだ。お前は聞くことが恥ずかしいとかダサいとか考えているんじゃないか？」
「うっ」
「図星だな。さっきも言ったがお前らが勉強できないのは最初から分かってんだよ。分かった上でこの勉強会があるんだ。だからそんなちっぽけなプライドは今すぐ捨てろ。お前が理解するまで徹底的に教えてやる。それが俺の役割だからな」
「鳴海……」
　ここ数日須藤を見ていて気付いたのが、こいつは真っ向からぶつかった方がいいということだ。須藤みたいな単純な男はそちらの方がやりやすい。
「お前が焦る気持ちは分かる。それはみんな同じだ。あの堀北ちゃんですら焦ってんだ」
「堀北が？」
「ああ。表情には出さないけどな。今までやってきた勉強が無駄になったんだ。時間がないことに焦りを感じている」
「別にあいつは勉強できるんだから焦る必要なんてないだろ」
「自分だけならな。堀北ちゃんは本気でお前らが退学にならないように頑張ってんだよ。目の下にクマができるぐらいにな。須藤がやっている問題だって堀北ちゃんが寝る間も惜しんで作ってくれたものだ」
　ここ数日の堀北ちゃんはずっと三馬鹿トリオのテスト勉強のことを考えている。俺以外の男のことを考えていることは誠に遺憾だが、激しく嫉妬しているが、そんなこともいってられない。
「お前らのせいで、堀北ちゃんにあんまり構ってもらえないんだからな。それが一番つらいんだぞ」
「いや、それは関係ないんじゃねぇか」

関係ないわけないだろ。勉強会が始まる前はもうちょっと構ってもらえた……はずだ。うん、この件については一旦考えるのはやめにしよう。
「だからさ、頑張ろうぜ。見返すためにも、報いるためにも」
「……」
もし、これだけ言ってもちっぽけなプライドを捨てきれないのなら別の方法を考えよう。人間、そう簡単に変われないのは分かっていることだ。堀北ちゃんのためならどんな方法も辞さない。
「須藤」
「……くそっ。ああ、わかったよ。もう泣き言はいわねぇ。だから手を貸せ」
「手を貸してくださいだろうが。まぁ、堀北ちゃんのためだから仕方がない」
「お前はそればっかりだな」
「当たり前だ。堀北ちゃんこそ俺の全てだからな」
須藤が本当に改心したかは定かではないが、勉強に対する姿勢は変わったに違いない。須藤のようなタイプは一度スイッチが入れば止まらずに突き進むはずだ。
「鳴海って意外と熱い奴だな。堀北が絡むと気持ちが悪いけど」
「え？喧嘩売ってる？」
「ちげぇよ。ただ、一人の女に一途な所は嫌いじゃねえ。男はそうじゃなきゃな」
「お、分かってるな、須藤」
俺と須藤は固く握手をする。こいつはクズみたいなところがあるが、案外良い奴なのかもしれない。
「鳴海君、須藤君。楽しそうなのは結構だけれど、勉強をする気はあるのかしら？」
「いや、鳴海が……」
「俺のせいにすんなよ。あ、もしかして俺と須藤が話しているから嫉妬して――」
「黙って。勉強をしなさい」

「「すいませんでした」」
いつのまにか横に立っていた堀北ちゃんの絶対零度の視線を浴びて須藤ですら平謝りで勉強を再開した。堀北ちゃんは俺をもう一度だけみてそのまま自分の席へ戻って行った。もう一度俺を見たときの表情が少し笑っていたように見えたのは俺の気のせいだったのだろうか。

「まったく、鳴海君に任せたのは失敗だったかしら」
堀北はそうぼやきながらオレと池の座る席に戻ってきた。先程の鳴海と須藤の話を聞いていたのか、池は今まで以上に真剣に問題と向き合っていた。
「その割には嬉しそうだな」
「馬鹿を言わないで。嬉しがる要素なんてどこにもないでしょう」
「鳴海のことを信頼しているからこそ、須藤のことを任せたんだろ？」
「そんな意図はないわ。ただ一番成績がいいのが彼だっただけよ」
確かに堀北が言う通り、一番成績がいい鳴海と一番成績が悪い須藤を組ませるのは当然なのだが、それだけではないとオレは考える。
「須藤と言い合いになっていたのを放任するあたり信頼してると思うんだが」
「私が口をはさむべきではないと判断しただけよ」
「それが信頼してるって言うんじゃないのか？」
「違うわ。彼が私を裏切るようなことはしないと確信していた。それだけよ」
堀北の発言にオレだけでなく、問題を解くのに集中していた池までも驚いて堀北を見る。当の堀北は自分の発言をよく分かっていないようだった。それに対して、池が爆弾を投下した。
「それって惚気みたいだな」
「は？どうしてそうなるのかしら？」

「いや、だって今の発言は、なぁ？」
「黙りなさい。どうでもいい話をしている暇があったら英単語の一つでも暗記して。それともあなたたちは、もう勉強の必要がなく、テストも余裕ということかしら」
「はい！今すぐ勉強します！」
池は堀北の威圧に屈し冷や汗を流しながら問題に向き直った。確かに今の堀北の威圧感は尋常じゃない。
「綾小路君もさっさと問題を解きなさい」
「お、おう」
なぜかオレも睨まれた。池の巻き添えをくらった形だ。かなり怒っていそうだと思い、問題を解いているフリをしながら堀北の表情を盗み見る。窓の外に視線を向けていた堀北の頬と耳は少し朱色に染まっていた。それが怒りゆえのものなのか、あるいは違う感情なのかオレには分からなかった。

第11話

「そういえば清隆の気になることって結局何だったんだ？」
勉強会が終わった帰り道、櫛田の横に行って話を聞く。俺の前に堀北ちゃんと清隆が並んで歩き、その前には三馬鹿トリオが馬鹿をやりながら歩いていた。清隆に堀北ちゃんの横を取られている事実にジェラシーを感じるも、櫛田と二人で話す必要があるので仕方がない。当の櫛田は何かを思いついたのか、悪い笑みを浮かべている。
「ふふっ、知りたい？知りたい？どうしようかなぁ？鳴海君がどーしても知りたいって言うなら教えてあげても――うぴゃあ!?」
イラッときたのでいつものやつをお見舞いしてやる。ちなみに清隆への嫉妬の恨みも一緒に込めたのは秘密だ。しかし、こいつはこうなることが分かっててやってるのか？さてはこいつも変態の一味か？
「ううっ、女子に手をあげるなんてサイテーだよ」
「俺は男女平等を信念としているからな。ムカついたら女子でも容赦はせん」
「じゃあ堀北さんにも同じことができるの？」
「おいおい、お前ら一般女子と堀北ちゃんを一緒にするなよ。恐れ多いぞ」
「真顔でそういうこと言わないでくれるかな？本当に怖いから」
櫛田は俺を青ざめた表情で見る。そんなにおかしなこと言ったかな。普通に堀北ちゃんは別次元の存在だと言っただけなんだけど。
「それで、何があったんだ？」
「……綾小路君が学食で三年生の先輩に話しかけたの。それでねある取引をしたんだけど、何かわかる？」
「テストの過去問か？」
「そうそう。テストの過去問を……って何で分かったの!?」
「何となく予想はしていたからな」

「面白くない」
　櫛田はいじけて地面にある小石を蹴った。なるほど、清隆が動いてくれたか。俺も考えていた正攻法ではない方法を清隆も思いついていたということか。まぁ、俺が思いつくぐらいだから清隆の頭の中にないわけがないけどな。
「さっきそれを見せなかったのは何か理由があるのか？」
「過去問をすぐに見せちゃうと緊張が緩むし、折角の頑張りに水を差すからだって。それに信用しすぎるのも良くないって言ってたよ」
「確かに今年から問題が変わる可能性はゼロではないからな。ということは配るのは前日か」
「そういうことっ」
　自分で考えたわけではないのにドヤ顔で話す櫛田を嘲笑しつつ、清隆に感心する。前日に配れば皆必死に頭の中に叩き込むだろう。もし問題が今年から変わっていたとしても前日までは勉強をしているわけだから問題はない。俺だったら安易に配っていたかもしれないな。そのへんの思慮深さは一級品だ。ホワイトルーム恐るべし。なんであいつＤクラスにいんの？
「つまり、俺の須藤への熱い説得は無駄だったというわけか」
「無駄なんかじゃないよ。きっと、須藤君に響いたと思う」
「まさかお前に慰められるとはな」
「鳴海君は私の事なんだと思ってるのかな？」
「腹黒痴女」
「ふざけんな！」
　ギャーギャー文句を言ってくる櫛田を無視するが、心の中では一応感謝しておく。俺に何を言っても無駄だと気づいたのか櫛田は諦めて静かになった。
「ねぇ、鳴海君。仮の話なんだけど、堀北さんと私が対立したとき、どっちの味方をする？」
「堀北ちゃん」
「ははっ、気持ちがいいくらいの即答だね」
「当たり前だ。比べるまでもない」

「その点は堀北さんが羨ましいかも。絶対的な味方がいるって心強いと思う」
　いつものように笑顔を張り付けている櫛田だが、その仮面がひどく脆く見えた。
「そもそも堀北ちゃんと対立した時点で俺と対立するようなもんだろ」
「そうだね。変なこと聞いてごめんね」
「まぁ、相手が堀北ちゃんじゃなければお前の味方してやるよ」
「……え？何で？」
「何でってそりゃ、友達なんだから当然じゃね？」
　櫛田は俺の発言を聞いてその場に立ち止まる。こいつは何を呆けた面をしているのだろうか。怒ったり沈んだり呆けたり忙しい奴だな。
「鳴海君って私の事を友達と思ってたの？」
「は？何をいまさら言ってんだよ」
「だって、いつもいじめてくるから」
「それはお前の反応が面白いからだ。俺は悪くない。むしろお前が悪い」
「なんでそうなるんだよ！」
　こういう風にツッコミをしてくるから弄りがいがある。普段は仮面をかぶって隙を見せないくせに弄ると簡単に本性を出す櫛田は面白い奴だと俺は思う。
「てか前に、今日から親友だって俺、言わなかった？」
「言ってたけど……本気だとは思わなかったから。私の本性を知っているわけだし」
「お前の本性を知ってるからこそ友達になったんだけど」
「でも、自分で言うのもなんだけど、口が悪いし、それに――――」
「性格も悪い」
「うるさい。お前が言うな」
　櫛田は凄い形相で俺を睨む。自覚があるんだったら俺が言っても問題ないだろ。

「口が悪くて性格が悪いなんて大した個性でもないだろ。見方を変えれば堀北ちゃんもそうだしな。まぁ、そんな堀北ちゃんが俺は大好きだからどうでもいいけどな」
「で、でも――――」
「でもでも言うな、鬱陶しい。俺とお前は友達。簡単な話だろ。はい、もうこの話は終わり！」
うじうじしている櫛田に苛立ちを覚え、強制的に話を終わらせる。何を気にしているのか知らんし興味もないわ。俺の思考は堀北ちゃんの事だけで手一杯なのだ。思考をすべて堀北ちゃんに埋められるって、支配されているようでなんかいいな。
「そっか……友達か……ふふっ」
「何笑ってんだよ、気持ち悪いぞ」
「お前にだけは言われたくないよ！」
今度は急に笑い出した櫛田を見て少し引く。勉強のし過ぎで頭がおかしくなったのだろうな。可哀想に。
「本当に堀北さんが羨ましくなってきたな」
「ん？堀北ちゃんがなんだって？」
「何でもないよ。バーカ」
人を罵りながら櫛田は前を歩く三馬鹿トリオの方へ駆けて行った。よく分からんが、最後は笑顔が戻っていたので解決したのだろう。人騒がせな奴だ。
「櫛田と何かあったのか？」
「いや、特に」
「そうか」
清隆が駆けて行く櫛田の姿をみて俺の横に来た。どうやら俺と櫛田が話しているのに気を使ってくれていたみたいだ。そうとはしらずに嫉妬してごめん。
「清隆と俺は友達だよな？」
「……そうだな」
清隆の返事には間があったが、怖くてこれ以上は聞けなかった。これで清隆も友達と思ってなかったとかだったら泣いちゃうかもしれ

ん。

「鳴海、ここはどうすりゃいいんだ？」
「ここはさっきの公式を使うんだ。いわゆる応用問題だな。実際のテストなら捨ててもいいかもな」
「でもよ、こういうのって配点が高いんだろ？捨てていいのかよ？」
「解けそうにない問題に時間を割いて他の問題が解けなかったら意味がないだろ。時間が余ったら解くぐらいの気持ちでいいと思うぞ」
「そっか、分かった」
　いよいよテストの前日となった。あれから勉強会を重ねてきたが、面白いくらいに須藤が素直になっている。分からないところは俺か堀北ちゃんに迷いなく聞いてくるし、アドバイスも簡単に聞き入れる。別人が入れ替わったと言われても驚かないレベルだ。
「そういえば今日だな」
「ん？なんかあんのか？」
「いや、気にするな」
　不思議そうな顔をする須藤を横目に櫛田の姿を探す。すると、ちょうど行動を起こそうと教壇へと向うところだった。
「皆ごめんね。帰る前に私の話を少し聞いてもらってもいいかな？」
　そう言ってクラス全員に例のプリントを配り始めた。そのプリントを見て、クラスメイトは一様に驚く。それは堀北ちゃんも例外ではない。驚いた表情の堀北ちゃんマジカワユス。
「テストの……問題？　もしかして櫛田さんが作ったの？」
「実はこれ、過去問なんだ。昨日の夜に三年生の先輩に貰ったの。聞いた話だと一昨年の中間テストがこれとほぼ同じ問題だったんだって。だからこれを勉強しておけば、きっと本番で役に立つと思うの」
　櫛田の発言にクラス中が歓喜の渦に包まれる。さすが腹黒ちゃん、

息を吐くように嘘をつく。演技力はなかなかのものだ。
「須藤君と鳴海君もどうぞ」
「おう。助かるぜ」
「うむ、ご苦労」
　須藤も嬉しそうに過去問を受け取った。もちろん須藤だけではなく、皆が嬉しそうに過去問を見ている。クラスの士気を上げる効果もあり、やはり前日にしたのが正解だった。清隆の策士め。
「何だよ、こんなんがあるなら勉強を無理して頑張らなくても良かったじゃん。なぁ、須藤」
　山内がヘラヘラ笑いながら須藤に話しかけた。もし堀北ちゃんの前でそんなことぬかしやがったら引きずり回してやる。そう思っていると須藤がおもむろに立ち上がって山内の胸ぐらをつかんだ。
「堀北や鳴海が俺らのために色々やってくれてたんだぞ。そんな言い方はないんじゃねぇのか？」
「ちょ、どうしたんだよ須藤」
　俺も堀北ちゃんも須藤の言葉を聞いてかなり驚いている。あの須藤がこんなことを言うなんて。まじで中身が入れ替わってるんじゃないのか。
「気持ちはありがたいが、その喧嘩っ早いのはどうにかしないとな」
「ちっ、うっせーよ」
　須藤は頭をかきながら山内を離すと大人しく席に座った。その様子を見てクラスにどよめきが起こる。そうだよね、やっぱり変だよね。こんな素直に聞き入れる奴じゃないよね。普通にいい奴になっちゃってるじゃん。
「須藤、なんか拾い食いでもしたのか？ポイントがないからって拾い食いは良くないぞ」
「してねーよ！何で急にそんな話になんだよ」
「そっか、勉強のやり過ぎで頭がおかしくなったのか」
「てめぇ、やんのかコラ！」
　いつもの須藤だった。とりあえずデコピンをお見舞いしてやった。それを見て櫛田が自然とデコを押さえていた。やっぱり櫛田と須藤

の躾にはデコピンが必要不可欠だな。

「そろそろ帰るか、あとは部屋に帰って過去問を見るだけでいいだろ」
「おう」
　須藤と軽く勉強をしていたが、あとの時間は過去問の暗記に使うべきだと判断して、帰ることにした。ノートやペンをしまっていると、堀北ちゃんが話しかけてきた。
「鳴海君、今から帰るのかしら？」
「そうだよ。堀北ちゃんも一緒に帰る？俺としては手をつないで帰るのが一番おすすめなんだけど」
「そうね、帰りましょう」
「え、まじで？手つなぎで？」
「指一本でも触れたら折るわよ」
　手つなぎはないにしろ、堀北ちゃんからオッケーが出るとは思わなかった。もしかして夢でも見ているのではないか。
「須藤、俺の頬を叩いてくれ」
「任せろ」
「痛い！」
　普通に痛い。その痛みが夢ではなく現実だと教えてくれた。てか、須藤の奴、軽く叩くだけでよかったのにグーで殴りやがった。よっぽど俺に絞め落とされたいらしいな。
「んじゃ、俺は先に帰るわ」
「へ？一緒に帰らないのか？」
「そんな野暮なことはしねーよ。じゃあな」
　須藤は俺の肩に手を置いてから教室を後にした。あいつまさか俺に気を使って先に帰ったのか。滅茶苦茶いい奴じゃん。ただのいい奴じゃん。お前、キャラが完全に崩壊してるけど大丈夫なのか。
「グズグズしてないで早く帰るわよ」
「イエスマム！」
「次その返事をしたら舌を引きちぎるわ」

「俺とは対等でいたいということだね。可愛いなー」
「鳴海君は舌が必要ないみたいね」
「ごめんなさい」
　堀北ちゃんと話せなくなるのは絶対に嫌だ。堀北ちゃんはため息をついて教室を出て行ったので犬のように後ろをついて行った。
「堀北ちゃんと下校できるなんて俺は幸せ者だな」
「これまで何度も帰っているでしょう」
「何回帰っても幸せなんだよ」
「随分と安上がりな幸せね」
「じゃあ、これから毎日登下校を――――」
「嫌よ」
「何でだよー」
　俺が提案をする前に堀北ちゃんに一刀両断される。
「あなたが幸せでも、私が幸せじゃないからよ」
「大丈夫、俺が幸せにしてみせるから」
「あなたの存在が私にとっての不幸なのよ」
「それ、詰んでるやん」
　あまりの衝撃に関西弁になってしまった。俺が幸せにしたいのに、俺じゃ幸せにできないだと。何そのジレンマ。でも、ロミジュリみたいでちょっと興奮する。
「いえ、違うわね」
　ひとりで興奮して悶えていると、堀北ちゃんはポツリと呟いた。
「鳴海君が居なければ勉強会はうまくいかなかった。感謝しているわ」
「堀北ちゃんがまたデレた……？春はすぐそこか？」
「そんなわけないでしょう。さっき櫛田さんにお礼を言ったから、あなたにも言うべきだと思っただけよ」
　驚きのあまり漏らした言葉をすぐさま否定される。
「お礼なんていいよー。俺は別に何もしてないし、もし俺がいなくても問題なかったと思うよ」
「そんなことないわ」

「別に気を遣わなくて大丈夫だって」
「いつもは自信過剰なのに変な所で卑屈ね。鳴海君が居て、協力してくれたから勉強会がうまくいった。その事実は紛れもなく本物よ。もしもの話なんてする意味がないわ。そもそも、私があなたに気を遣うなんてありえるわけがないでしょう」
　確かに堀北ちゃんが言う通り、俺に気を遣うはずがない。つまりは本当に堀北ちゃんが俺に感謝をしているということだ。
「そうだね。うん、ありがとう堀北ちゃん」
「何故あなたが礼を言うのよ」
「堀北ちゃんのお礼に対するお礼かな」
「何よそれ。馬鹿ね」
　誰かに必要とされるってのはやはり嬉しいものだな。それが好きな人であればなおのこと嬉しい。俺の事必要だと言ってくれたのなんて有栖くらいだからな。
「あなたの事だから猿みたいに騒ぐかと思っていたけれど、予想外の反応ね」
「あんまり人に感謝されたことないから耐性がないんだよね。罵られる方は耐性ありまくりなんだけど」
「どうりで何を言ってもめげないわけね」
「堀北ちゃんの言葉には愛がこもっているのを知っているから大丈夫なだけだよ？」
「そんなものをこめた覚えはないわ。私がこめるのは１００％の嫌悪感だけよ」
　そう言って堀北ちゃんは嫌悪感をこめるように俺を睨む。相変わらず堀北ちゃんはツンデレのようだ。
「鳴海君はテスト大丈夫でしょうね」
「もちろん。堀北ちゃんこそ大丈夫なの？須藤達の面倒見るので手いっぱいだったよね」
「愚問ね。普段から勉強をしていれば問題ないわ」
「俺たち似た者同士でお似合いだね」
「あなたのような掃き溜めみたいな人間と一緒にしないで。不快よ」

掃き溜めみたいな人間ってどんな人間なんだろうか。掃き溜めに鶴のことわざにかけているのだろうか。まぁ、堀北ちゃんが鶴のように美しいのは間違いないな。
「つまり、私に似合う男になれということか。俺、頑張るよ」
「どうしてそうなるのよ」
堀北ちゃんはいつものように、呆れた様子で溜息をついた。何故呆れられたのかは見当もつかん。
「それより、忘れてないでしょうね」
「俺との結婚の約束のこと？」
「そんな約束したことはないし、未来永劫することもないわ」
「約束なんかしなくても俺たちは結ばれる運命みたいな？」
「知ってるかしら？運命は辿るものじゃない。壊すものなのよ」
「なにそれカッコイイ」
堀北ちゃんの名言を聞いて憧憬の眼差しを向ける。堀北ちゃんは俺の反応が予想外で照れくさくなったのか、顔をそむけた。若干耳が赤くなってるところが可愛すぎてしんどい。
「私が聞いているのは、勝負の件よ」
「照れ隠しする堀北ちゃん……尊い」
「何か言ったかしら？」
「いえ、何でもないです」
堀北ちゃんの純粋な殺意が込められた睨みに、これ以上触れるとマズいと判断する。勝負の件っていうと、テストの点数の話か。勝った方が何でも命令できるんだっけか。
「俺が堀北ちゃんとの会話を忘れるわけないけど、アレ、本気で言ってたの？」
「当たり前でしょう。必ずあなたを負かすわ」
「堀北ちゃんに負かされるなら本望だよ」
「手を抜いたら一生口をきかないといったはずよ」
「それは卑怯だぞ！」
堀北ちゃんの条件に抗議の意を示す。だって堀北ちゃんと話せないとか、学校にいる意味ないじゃん。堀北ちゃんは俺にとっての酸素

と言っても過言ではない。それを奪おうとは死刑宣告ではないか。
「手加減せずにテストを解けばいいだけの話でしょう」
「まぁ、そうなんだけどねー」
負けなければいいだけの話だし、負けても手を抜いてさえいなければ問題はない。でも、俺がどうするかはもう決めちゃってるんだよな。どうしたものか。
「そういうことだから、真面目にやりなさい」
そう言って堀北ちゃんは寮に着くなり、先にエレベーターに乗って帰って行った。負けず嫌いな所もまた可愛いんだよね。

「おかえりなさい、幸くん。ご飯にします？お風呂にします？それとも――――」
勝負の件に頭を悩ませながら開いた自室の扉を勢いよく閉める。考えすぎて頭がおかしくなったのだろうか。幻覚がみえた。てか、幻覚であってほしい。
「もう、最後まで言わせてくださいよ。幸くんは意地悪ですね。そんなところも素敵ですが」
俺の願いを打ち破るかの如く、内側から扉が開かれる。現れたのはエプロン姿の銀髪の天使だ。
「なんで俺の部屋にいるんだよ、有栖」
「あら、家に帰ってきたらまず言うことがあると思うのですが」
「……ただいま」
「はい、おかえりなさい」

有栖の問いに渋々答えると満面の笑みをうかべた。お気に召したようで何よりだ。
「ちゃんと手洗いうがいをしてきてくださいね」
「おう」
有栖に言われるがままに洗面所へ向かう。手を綺麗に洗った後、部屋に入ると机の上に紅茶が入れられていた。
「幸くんが好きな茶葉ですよ」
「やったー。じゃなくて、なんでお前が俺の部屋にいるんだよ」
「私たちは家族のようなものなんですから別に構わないですよね？」
「いや、そういう意味じゃなくて。どうやって入ったんだ？鍵かけてたよな」
「ふふっ、秘密です」
有栖は可愛らしく人差し指を立てる。まじでどうやって入ったんだよ。ポイントで合鍵でも作ったのか？いや、まさかそんなことはありえない……いや、こいつならやりかねんな。怖いから追及するのはやめとこう。別に困るものでもないし。
「何か用事でもあったのか？」
「用事というわけではありません。テスト前日ですので幸くんの様子を見に来ただけですよ」
「人の心配してる暇あったら勉強でもしといたらどうだ？」
「必要ありませんよ。幸くんと一緒で」
「一緒にするなよ。俺は今から過去問見て配点を覚えるんだから」
「答えではなく、配点をですか。変わった言い方をしますね」
「目ざといねー」
「幸くんの事ですからね」
有栖は当然だという顔でティーカップを口に運ぶ。昔からこいつに隠し事をできたことがない。俺のポーカーフェイスを見破るとは恐ろしい子だ。
「結局、遊びに来ただけってことだな」
「そうとも言いますね」
「そうかい。飯作るけど食っていくか？」

「はい！幸くんの久しぶりの手料理、とても楽しみです」
「そんな大したものじゃないだろうに」
目をキラキラさせて喜ぶ有栖の頭を撫でてキッチンへと向かい、晩飯を作った。一緒に食べた後有栖は自室へ帰って行った。その後、過去問を一通り覚えてから床に就いた。
ちなみに、寝る直前に堀北ちゃんに感謝されたことを思い出し、狂喜乱舞したことは言うまでもない。

第12話

私、堀北鈴音は苛立ちを募らせながら廊下を歩いていた。目的地である生徒指導室に向けて歩く速度は心なしか速くなっている。それもこれも先程の茶柱先生の発言のせい。いや、鳴海君にいつものごとく絡まれたのも苛立ちの一つであることは間違いない。面倒なことに、あの男はあろうことか私に好意を持っており、事あるごとにアタックしてくる。

正直な話、好意を持たれることは昔からよくあった。告白されたことも何度もある。けれど、私はその全てを切り捨ててきた。恋愛などというものに興味がなかったし、そもそも私のことをろくに知りもしないで好きだと告白してくる人に嫌悪感しか覚えなかった。だからこそ二度と私にそんな感情を向けられないよう罵倒し、拒絶した。そうすると皆が口をそろえてこう言った。「こんな人だと思わなかった」と。勝手に私に幻想を抱き、見た目で判断して好意を寄せる。それで告白を断られたら被害者面をして、冷徹だの最低な女だのと吹聴する。挙句の果てには美人だからって調子に乗るななどと言ってくるのだけれど、私の容姿に何の関係があるというのか。まぁ、彼らが何と言おうと知ったことではない。今までもこれからも私は変わるつもりはないし、変わる必要もない。

だから、鳴海幸彼が入学初日に告白してきたときも、きつく罵り、拒絶の意を表した。一目惚れだと言ってきた彼も今までと同じだと切り捨てた。今後関わることはないと結論付け、放心状態になっている彼を放置し、その場を後にした。

しかし、無情にも彼とは同じ教室、つまりクラスメイトだった。彼も私の存在に気付き、駆け寄ってきた。

『さっきは急にごめんね。まさか君があんな性格だとは思わなかったんだ』

例に漏れずこの男も今までと一緒だ。勝手に見た目に惚れて、勝手に幻滅する。どうでもいいからもう私に関わらないでほしかった。

『……良い』

ボソッと何かを呟いた彼に私はとっさに聞き返してしまった。この時聞き返さなければ違う未来になっていたかもしれないと思いつつも、結局は同じ未来になることは容易に想像できるわね。

『惚れた！容姿も滅茶苦茶タイプだけど、中身も良い！その蔑んだ目、最高だ！』

変態だった。今までに会ったことのない人間で困惑したことをよく覚えているわ。それを目敏く察知した彼は再び私に謝罪をした。

『ごめんねちょっとテンション上がっちゃって。えっと、堀北鈴音さんでいいんだよね。それじゃあ堀北ちゃんって呼ぶね。さすがに出会ってすぐに名前呼びはハードル高いしもっとお互いを知ってからだよね。あ、俺は鳴海幸っていいます。呼び方は堀北ちゃんの好きに呼んで。呼び捨てでも君付けでもいいし、堀北ちゃんなら下の名前でも全然オッケー。あだ名とかでもいいよ。色々あるけど、俺のオススメは、なるみんかな。親しみがこもってるし、堀北ちゃんが呼んでる姿を想像すると可愛すぎてキュン死しそう。ところで堀北ちゃんの出身はどこ？俺はね――――』

地獄だった。私のことなどお構いなしにひたすらしゃべり続けるこの男はいったい何なのか。止まる気配がないので無理やり話すのをやめさせた。彼は申し訳なさそうな表情を浮かべたが、すぐに笑顔に変えて私を見た。何故かそれに腹が立ち罵倒するも、特に響いた様子もなくニコニコしていた。

『堀北ちゃんは一目惚れなんて一過性のものだって言うけど、俺は今以上に君を好きになる自信があるよ。でも、堀北ちゃんの気持ちを考えずにいきなり告白したのは間違いだった。知らない奴からの告白なんて嫌に決まってる。だからこれから俺の事を知ってほしい。これから好きにさせてみせる。そしてもう一度告白させてくれ』

自分勝手な話だ。もちろん答えはノー。こんな変な男に付きまとわれるのなんてまっぴらごめん。なのに強く否定できなかった理由は分からない。彼が可哀想に思えたのか。いや、きっと相手にするのが疲れただけよ。

『これからよろしくね、堀北ちゃん！』

そう嬉しそうに笑みを浮かべた彼は、宣言通り毎日のように絡んできた。最初のうちは無視を決め込んでいたが、無視する方が面倒なことだと気付き、適当にあしらうようになった。そんな生活も早一か月、段々彼がいる生活に慣れ始めている自分がいる。彼の笑顔に徐々に絆されているような気がして強い嫌悪感を抱く。慣れとは怖いものね。

閑話休題。鳴海君のことはいったん忘れて本題に戻ろう。生徒指導室についた私は、ドアをノックする。わずかの間を置いて中から入室を促す声が聞こえた。挨拶をして中に入ると茶柱先生がいた。

「率直にお聞きします。何故私が、Ｄクラスに配属されたのでしょうか」

「本当に率直だな」

茶柱先生は呆れたように笑った。私がわざわざ茶柱先生に時間を作ってもらってまで聞きたかったことだ。

「先生は本日、クラスは優秀な人間から順にＡクラスに選ばれたと仰いました。そしてＤクラスは学校の落ちこぼれが集まる最後の砦だと」

「私が言ったことは事実だ。どうやらお前は自分が優秀な人間だと思っているようだな」

茶柱先生の馬鹿にしたような発言が少し癪に障った。

「入学試験の問題は殆ど解けたと自負していますし、面接でも大きなミスをした記憶はありません。少なくともＤクラスになるとは思えないんです」

別に自意識過剰なわけではない。事実を並べたうえでＤクラスになるなどありえない事だと言っているだけ。主観的にも、客観的にも、自身が優秀な人間に分類されると自負している。

「入試問題は殆ど解けた、か。本来なら入試問題の結果など個人に見せないが、お前には特別に見せてやろう。偶然にもここにお前の答案用紙がある」

そう言って茶柱先生は数枚の解答用紙を私に手渡した。まるで私

が抗議に来ると分かっていたような用意周到さね。紙に目を通すと、自己採点とほぼ変わらない点数に少し安堵する。やはり入試の成績は良かったのだ。茶柱先生が言うには今年の一年の中では同率４位の成績であり、上位３人とも僅差。さらに面接でも特別中止される問題点はなく、むしろ高評価だったそう。

「では、なぜＤクラスなのですか？」

至極当然の疑問。入試の成績、面接ともに良かったにもかかわらず、Ｄクラスになることに納得がいかない。

「その前に、お前はどうしてＤクラスであることが不服なんだ？」

「正当に評価されていない状況を喜ぶ者などいません。ましてこの学校はクラスの差によって将来が大きく左右されます。当然のことです」

「正当な評価？　おいおい、お前は随分と自己評価が高いんだな」

茶柱先生の失笑にさらに苛立ちがつのる。

「お前の学力が優れている点は認めよう。確かにお前は頭が良い。だけどな、学力に優れた者が優秀なクラスに入れると誰が決めた？　そんなこと我々は一度も言っていない」

先ほど教室で鳴海君との話通り、単純な成績は関係ないということか。認めるのは癪だけれど私より成績が上であろう彼もＡクラスではないことが証明だ。

「確かに勉強が出来ることは１つのステータスだ。それを否定するつもりはない。しかし、この学校は本当の意味で優秀な人間を生み出すための学校だ。それだけで上のクラスに配属されると思ったら大間違いだ。それに、考えてもみろ。仮に学力だけで優劣を決めていたのなら、須藤たちが入学できたと思うのか？」

「それは……」

「それに、正当に評価されていない状況を喜ぶ者は居ないと言ったが、それは違う。Ａクラスともなれば様々なプレッシャーが重くのしかかる。下のクラスからの妬み嫉みもすごいしな。お前が想像するより遥かに過酷で大変なものだ。だからこそ正当に評価されないことを良しとする者もいる」

「冗談でしょう?・そのような考えは私には理解しかねます」
「そうか?・Dクラスにもいると思うぞ。低いクラスに割り当てられたことを喜んでいる変わり者の生徒とか、Dクラスになれて一番喜んでいる変人とかな。堀北、お前にも心当たりがあるだろう」
　頭の中にあの変態のアホ面が浮かび上がってくるも、すぐさま払いのけた。
「説明になっていません。採点基準が間違っていて、私がDクラスに配属された可能性もあります。再度確認をお願いします」
「残念だがDクラスに配属されたことは紛れもない事実だ。お前はDクラスになるべくしてなった。それだけの生徒だ」
　これ以上茶柱先生と話していても無駄ね。改めて学校側に聞くしかないわ。
「一応言っておくが上に掛け合っても結果は変わらんぞ」
　私の考えを見透かしたかのような発言にハッとする。鳴海君にも考えていることを読まれたし、私は分かり易いのかしら。いえ、この二人がおかしいだけよ。

「それに悲観せずとも卒業までにはAクラスに上がれる可能性は残っている」
「未熟なものが集められたDクラスでどうやってAクラス以上のポイントを取ると?・どう考えても不可能です」
「それは私の知ったことではない。その無謀な道のりを進むかどうかは君たち個人の自由だ。それとも堀北にはAクラスに上がらなければならない理由でもあるのか?」
「……。とにかく、私が納得していない事だけは覚えといてください。ではこれで失礼します」
　茶柱先生の質問に答えることなく、その場を後にしようとするが、茶柱先生に引き留められた。私に関係ある人物をもう一人呼んでいたと言われ、咄嗟に兄さんの顔が浮かぶ。しかし、茶柱先生にが口にした名前はクラスメイトである綾小路君だった。
　指導室に備え付けられている給湯室から姿を現した綾小路君はわ

ざとらしくため息をついた。どうやら私の話をきかれていたらしいが、茶柱先生は何がしたいのかしら。ここまでが仕組まれた流れだったことに苛立ちがさらにつのる。
「……先生、どういうつもりですか？」
「必要なことと判断したからだ。さて、綾小路、お前をここに呼んだわけを話そう」
「私はこれで――――」
「待て、堀北。最後まで聞いていた方がお前のためになるはずだ。Ａクラスに上がるヒントにもなるかもしれないな」
「……手短にお願いします」
　部屋から出ようとドアにかけた手を離し、もう一度椅子に座る。信用ならないが、聞くだけなら問題ないと判断した。私が座ったのを確認し、茶柱先生はクリップボードに視線を落とすとニヤニヤと笑った。
「お前は面白い生徒だな、綾小路」
「茶柱、なんて奇特な苗字をもった先生ほどオモシロイ男じゃないすよ、オレは」
「全国の茶柱さんに土下座してみるか？　んん？」
　茶番を見せられ早くも帰りたくなる。残ったのは失敗だったかしら。
「入試の結果を元に、個別の指導方法を思案していたんだが、お前のテスト結果を見て興味深いことに気が付いたんだ。最初は心底驚いたぞ」
　そう言って茶柱先生はクリップボードから見覚えのある入試問題の解答用紙を順に並べていった。その点数を見て驚嘆する。５教科全てが５０点であり、さらには小テストまでが５０点だった。驚きのあまり視線を綾小路君に向ける。本人は偶然と言うが意図的にやったとしか思えない。でもそんなことが可能なのかしら。
「あなたは、どうしてこんなわけのわからないことを？」
「いや、偶然だって。隠れた天才みたいな設定はないぞ」
「どうだかなぁ。ひょっとしたらお前よりも頭脳明晰かもしれんぞ」

茶柱先生に煽られて、ムッとする。この男も鳴海君のように私よりも上だというのかしら。しかもそれを隠して点数を合わせて遊んでいるというの？
「頭脳明晰と言えばあの変人もいたな。堀北のことが大好きな奴が」
「……」
ここで反応してしまうと負けたような気がするので無反応を突き通す。そんな私を見透かしてか茶柱先生はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべた。
「余談だが、あいつの入試の成績は学年２位。堀北、お前よりも上だ」
「それがどうだというのですか？」
「奴は本来はＡクラスに配属されることになっていたのだが、急遽Ｄクラスに配置換えになったらしい」
「え？」
「それも理事長の指示でな。事情は聞かされていないが、あいつも一筋縄ではいかぬ存在なのかもしれんな」
理事長の指示でＤクラスに？一体どういうことなの。
「鳴海に関しては担任の私でさえも情報が少ない。Ａクラスに配属予定だったことを考えると、普段はおちゃらけているが、かなり優秀な人間なのかもしれんな。もっとも、理事長からＤクラスに配置換えするように指示されている時点で、大きな問題を抱えているようだがな。もしかしたら退学になるのは奴が一番かもしれんな」
「……それはなぜですか？」
「さぁな。もし退学になればお前も嬉しいだろう？言い寄ってくる面倒な男がいなくなるんだ。願ったり叶ったりじゃないか」
茶柱先生は言いたいことを全て言えて満足したのか、私と綾小路君を廊下に放り出し、職員室へ帰って行った。鳴海君の事情が気にならないと言えば嘘になるが、私にも知られたくないことはある。それにあの男が退学になるなんて想像もできない。気にしても無駄なことよ。

♦♦♦♦♦♦♦♦♦

今になってあの時の事を思い出すのはきっと目の前の衝撃的な事実に、理解が追い付いてないからだろう。教室の黒板に掲示されたテスト結果。皆一様に自身の結果を確認し、安堵の息を漏らしている。過去問の効果もあり、全体的に点数が高い。

「４３点！」

「よっしゃー！赤点回避だ！」

須藤君英語の点数を確認し、三馬鹿トリオは大いに喜んでいた。どうやら他のテストも赤点を回避できたようだ。

そんな三馬鹿トリオを傍目に、英語のテスト結果を再度確認する。他のクラスメイトも徐々にその事実に気付き始める。櫛田さんも、普段表情をあまり変えない綾小路君でさえも目を見開いていた。

「どうして……」

自身の点数に納得がいかなかったわけではない。私の上にあるべきはずの名前がない。探していた名前はずっと下、須藤君の下にあった。

鳴海幸　４０点

この日、鳴海幸の退学が決まった。

第13話（前編）

いよいよ迎えたテスト当日。教室内は活気にあふれていた。それもこれも昨日櫛田が配った過去問の存在が大きい。俺としてもかなり助かっている。清隆には今度、ジュースでも奢ってやろう。

「欠席者はなし。ちゃんと全員揃っているみたいだな。お前ら落ちこぼれにとって最初の関門というわけだが、質問でもあるか？」

「僕たちはこの日まで真剣に勉強をしてきました。このクラスに赤点を取る生徒はいないと思いますよ」

「自信満々だな、平田」

不敵な笑みを浮かべる茶柱先生に平田が真剣な面持ちで答える。その言葉を聞いてか、他の生徒の表情にも自信がうかがえた。池や山内までドヤ顔してるのは非常にムカつく。それをよそに須藤の表情が曇っているのが少し気になるな。

テストを配り終えた茶柱先生は再び不敵な笑みを浮かべた。ろくなこと言わないだろうな。

「もし、今回のテストと7月の期末テストで誰一人赤点を取らなかったら、全員をバカンスに連れて行ってやる」

茶柱先生の発言にクラスが呆気にとられる。急に何を言いだすかとも思えば、バカンスって。この発言にも何かしらの意図が隠れてでもいるのか。

「そうだな、青い海に囲まれた島で夢のような生活を送らせてやろう」

まぁ、バカンスと言えば海があるリゾートだよな。だからと言って何だという話だが。クラスのやる気を上げさせるための発言か？そうだとしても当日にやることじゃないし、そんな単純な奴らではないだろ。

「みんな！やってやろうぜ！」

「「うおおおおおおお!!」」

池の号令に男子のほとんどと一部の女子が雄たけびのような声を上げる。あ、清隆もどさくさに紛れて叫んでる。

「変態」
　その声を聞いて堀北ちゃんが清隆を罵る。
「くそっ！一緒になって叫んどけば俺も罵ってもらえたのに！」
　完全に対応を間違えてしまった。堀北ちゃんの「変態」チャンスをみすみす逃すとは。あまつさえ清隆にそれを取られるなんて堀北ニスト失格だ。
　堀北ちゃんは悔しがる俺を冷たい目で見るだけで何も言ってこなかった。
「鳴海は何でテンション上がってないんだよ」
「別に海とか興味ないし」
「馬鹿だなー。海と言えば何だ？」
　池に馬鹿呼ばわりされ、ぶん殴ってやろうかと思いながら、質問の意図を考える。海と言えば、水着だな。一体それがどうした――――はっ！なんで俺はこのことに気付かなかったんだ!?
　俺は勢いよく振り返り、堀北ちゃんを見た。いきなり視線を向けられ驚いたのか、少しピクッと肩を揺らした。可愛い。
「……何？」
「海といえば水着。当然堀北ちゃんも水着を着るわけだ。海で水をかけあい、浜辺で追いかけっこ。キャッキャウフフ。水平線に沈む夕日を見ながら近づく二人の距離。そして……。最高かよ！」
「先生、もうすぐ開始の時間なので進めてください」
「そうだな。鳴海、座れ」
「はい」
　茶柱先生に着席を促された俺は大人しく席に座る。クラスメイトも何事もなかったかのように前を向いていた。何でこういう時だけこのクラスは息がぴったりなのだろうか。普段からそうならＡクラスに上がるのだって楽になるのにな。
　先生によるテストの説明があり、開始の合図でテストが始まった。全ての問題に軽く目を通してみるが、どうやら清隆の狙いは当たっていたようだ。そこには過去問と同じ問題が並んでいた。クラスの奴らは一夜漬けで過去問を叩き込んできているはずだ。この分なら赤

点回避は問題なさそうだな。

その後のテストでも過去問と同じ問題が続いていた。難度の高い問題も多々あったが、答えを覚えていればどうってことない。４限目の数学のテストが終わり、勉強会のメンバーで堀北ちゃんの周りに集まった。池や山内は余裕の言葉を吐き、笑顔を浮かべていた。どうやら手ごたえはあるみたいだな。須藤はどうか聞こうと思ったら、近くに姿はなく、一人で机に座って必死に過去問を凝視していた。その様子が気になった櫛田が須藤に話しかける。

「須藤くん？」

「……あ？わるい。ちょっと忙しい」

突き放すように答えた須藤の額には薄っすら汗が浮かんでいる。俺と堀北ちゃんはその様子が引っかかり、すぐに席を立ち、須藤の隣に行く。

「過去問、勉強できなかったのか？」

「……ああ。英語以外はやったが、寝落ちしちまった」

須藤はイライラした様子で答える。だから焦っているのか。教室の時計を見ると、次のテストまで残り１５分余りしかなかった。過去問をやってきていると踏んでいたから声をかけなかったのがあだとなった。

「くそ！全然頭に入ってこねぇ」

頭を掻きむしりながら悪態をつく須藤。よりによって英語か。他の教科と違って、この数分で覚えるのはかなり難しいだろうな。

「何で寝ちまったんだよ、俺は」

「ていっ」

「痛ってぇ！何しやがんだ鳴海！」

焦っている須藤に渾身のデコピンをお見舞いしてやる。これには堀北ちゃん達も驚いた様子だった。

「まずは落ち着け。焦ってたら頭に入るもんも入らん。普段使ってない頭を短期間で稼働させたんだ、寝落ちしても無理はない。冷静に今

できることをするぞ」
「……おう」
「安心しろ。ようは赤点さえ取らなきゃいいんだ。だよね、堀北ちゃん」
「ええ、鳴海君の言った通りよ。点数の振り分けが高い問題と答えの短いものを覚えれば何とかなるわ」
「それに過去問を覚えてなくても、この数週間で勉強してきたことがなくなったわけじゃない。そう考えると余裕だろ？」
「はは、そうだな。何とか頑張ってみるか」
　須藤の表情は明るいものになった。これで少しは点数を取れるだろう。勉強は堀北ちゃんに任せてその場を離れる。それに付いてきた櫛田が心配そうに話しかけてきた。
「本当に大丈夫かな？」
「どうだろうな。さっきはああ言ったが、日常で使わない英語は他の科目に比べて難度は高い。俺にできることは少しでも冷静にさせることだけだ。後は須藤次第だな。というか、堀北ちゃんがマンツーマンでレッスンしてくれるんだから余裕で突破できるだろ。……なぁ、あそこ変わってくれないかな」
「最後のがなければなぁ」
　苦笑いを浮かべる櫛田。横の清隆も深く頷いていた。俺が何を言ったというのか。
　時間は瞬く間に過ぎ去り、休み時間の終了を告げるチャイムが無情にも鳴る。テスト開始が始まったいま、須藤を直接助けることはできない。俺は俺のやるべきことをやろう。

　教室内には只ならぬ空気が漂っていた。それもそのはず、今日はテストの結果が発表される日だ。クラスメイトは席に座り、今か今かとその時を待っていた。

「随分と物々しい雰囲気だな」
「先生、テストの結果はいつ発表されるのでしょうか？」
「お前がそこまで気負う必要もないだろうに。喜べ、今から発表する」
　平田の質問に答えた茶柱先生は大きな白い紙を黒板に貼りだした。そこには生徒の名前と点数の一覧が載せられていた。
「正直、感心している。お前たちがこんな高得点を取れるとは思わなかったぞ。数学と国語、それに社会は満点が１０人以上もいた」
　先生の言葉に歓喜の声が上がる。軽く見ただけでも高得点が並んでいるの分かる。さて、自分の点数は見る必要はない。見るのは須藤の点数。
　須藤の点数は軒並み６０点台と高得点をたたき出している。勉強の効果が表れたようで何よりだ。問題は英語の点数だが……４３点。何とかなったな。須藤も点数を確認したのだろう、立ち上がりガッツポーズをして喜んでいた。池と山内の点数も確認するが、これも問題なく点数が取れていた。赤点回避は確実だな。
「鳴海君、どういうこと？」
　後ろの堀北ちゃんから声をかけられる。間違いなく俺の点数に関しての疑問だろう。俺の点数は英語が４０点、それ以外が５０点にしてある。わざと点数を低くしているのは明白だ。
「ちょっと調子が悪くてね」
「？ね。手を抜かないと約束したはずよ」
「手は抜いてないって。それを言うなら堀北ちゃんもでしょ？」
「それは……」
　堀北ちゃんが言い淀むのは、英語の点数があるからだ。他の教科は満点を取っているにもかかわらず、英語だけ５１点と低い。おそらく須藤のために点数を落としたのだろう。真剣勝負の約束をしていたが、こればっかりは許してほしい。それに赤点は取っていないわけだし。
「見ただろ先生！俺たちもやるときはやるってこと！」
「そうだな。お前たちが頑張ったのは認めている。だが――――」
　茶柱先生は不敵な笑みを浮かべ、赤いペンで一本のラインを引く。

それは英語のテスト結果、俺の名前の上だ。
「お前は赤点だ。残念だったな鳴海」
「なっ！」
「どうして……」
　茶柱先生の宣告に須藤が驚きの声を上げ、堀北ちゃんも声を漏らした。俺自身、どういうことか理解が及んでいない。
「ふかしてんじゃねぇよ！鳴海が何で赤点なんだよ！」
「赤点は３２点のはずですよね？鳴海君はクリアしてると思います！」
　須藤が食って掛かり、櫛田がそれに同調する。
「誰がいつ３２点だといった？今回の赤点ラインは４０点以下だ。つまり、１点足りなかった。これは紛れもない事実であり、お前らが何を言っても無駄なことだ」
「ふざけんなよ！４０点以下だ？そんなん聞いてねぇよ！」
「先生、判断基準を聞いてもよろしいでしょうか」
「いいだろう」
　茶柱先生は黒板に簡単な数式を書く。そこに書かれたのは８１．６÷２＝４０．８という数字。
「前回、それから今回の赤点基準は各クラス毎に設定されている。そしてその求め方は平均点割る２。その答え以上を取ること」
　つまりは少なくとも４１点は必要だということだ。でも、それだけではないはずだ。
「赤点は４０点を超えないはずでは？」
「何を言っている、鳴海。誰に聞いたのかは知らんが、そんな基準はない」
　茶柱先生の返答を聞いて、全てを理解する。完全に油断していたわけだ。
　平田が採点ミスを指摘し、俺の答案用紙を見せてもらうも、すぐに暗い表情を見せる。当たり前だ。俺は確実に４０点を取っている。前情報どおり、赤点になるギリギリを取った。
「クズを助けるために点数を削ったようだが詰めが甘かったな。お前

なら全教科満点は取れただろう」
「……」
「須藤は鳴海に感謝しておけよ。仮に鳴海が満点を取っていたら、退学になったのはお前だからな」
「なっ!?」
　茶柱先生の発言に須藤の顔から血の気が引いていく。須藤のせいで俺が退学になったと言っているようなものだ。本当に性格悪いな。
「納得いったならこれでホームルームを終わる。鳴海は放課後職員室に来い」
　茶柱先生の言葉に誰も反論することができない。反論の余地は残されていないからだ。
「茶柱先生、少しだけよろしいでしょうか」
　沈黙が教室を支配する中、手を挙げたのは堀北ちゃんだった。
「前回のテストは３２点未満が赤点だと仰いました。それは平均割る２で算出したもので、前回の算出方法に間違いはありませんか？」
「ああ、その通りだ」
「それでは一つ疑問が生じます。前回のテストの平均点を私が計算したところ、６４．４点でした。それを２で割ると、３２．２点になります。つまり赤点である３２点を越えているんです。にもかかわらず、赤点は３２点未満だった。つまり小数点を切り捨てている。今回の求め方と矛盾しています」
「た、確かに！それなら４０点未満が赤点になって、鳴海君は赤点回避になる！」
　堀北ちゃんの考えを聞いて櫛田が喜ぶ。しかし、それは杞憂に終わるだろう。
「残念だがお前の計算方法は１つ間違っている。赤点を導き出す際に用いる点数、小数点は四捨五入で計算される。前回のテストは３２点で扱われ、今回のテストは４１点で扱われる。それが答えだ」
「っ……」
「堀北、お前は内心気付いていたはずだ。少ない可能性を信じて進言してきたのだろうが、残念だったな」

「それなら――――」
「それくらいでいいよ堀北ちゃん」
なおも食い下がろうとする堀北ちゃんを制止する。これで堀北ちゃんにペナルティが課せられるようなことは是が非でも避けなければならない。
「良いわけないわ。このままだとあなたは退学になるのよ。それでもいいって言うの？」
「もちろん退学は嫌だよ。でも、これ以上はどうにもならないよ。そうですよね？」
「その通りだ。現段階では覆ることはない」
そう言って茶柱先生は教室を後にし、教室は静寂に包まれた。相変わらず含みのある言い方をする先生だな。まるで覆る方法があると言っているかのようだ。それならまだ諦めるには早いな。
「すまねぇ。俺のせいで鳴海が」
「何言ってんだよ。これは俺のミスだ。ギリギリのラインを見誤った俺が悪い」
「けどよ」
「何だそのしおらしさは。気持ち悪い。そもそも、俺がお前のために動くわけないだろ。好き好んで野郎のために身を削るかっての」
「じゃあ、なんで点数を削ったんだよ！」
「それはもちろん……俺の気まぐれだ」
やってしまった。何とか誤魔化せれたか。
「違うわ。私のためよ」
「何言ってんの堀北ちゃん。俺の気まぐれだってば」
「私が退学者を出さないようにしているから、点数を削って平均点を下げるようにしたんでしょ。最初からそうするつもりだったみたいね」
「そんなわけないじゃん。あ、でもその方法を使えば堀北ちゃんの好感度が爆上がりだったのか！しまったなー。今からでもそういうことにしようかな」
「ふざけないで！」

堀北ちゃんの怒鳴り声で教室は再び静寂に包まれる。完全に失敗したな。俺が勝手に自滅しただけなのに、これじゃあ堀北ちゃんのせいで俺が退学になるみたいに捉えられかねない。
「おい、綾小路。どこいくんだよ」
「トイレ」
清隆はそう短く答えて教室をでていった。この空気が嫌になったか、あるいは……。
「ごめんね堀北ちゃん。退学者を出さないように頑張っていたのに、俺のミスでこんなことになってしまった。せっかくの努力を無駄されて怒るのは当然だ」
「……ふざけないでと言ったはずよ」
「ふざけてなんかないよ。俺の勝手な自己満足で退学者を出してしまった。堀北ちゃんのためにとか考えながら、結局足を引っ張ってしまってる。結果的に堀北ちゃんを目標から遠ざける形になってしまった。本当にごめん。でも、なんとか――」
乾いた音が教室に響き、右の頬に痛みが走る。遅れて堀北ちゃんに頬を平手打ちされたことを理解する。
「それを本気で言っているのだとしたら、あなたは私の事を何も分かっていないわ」
「え？」
そう言って堀北ちゃんは教室を出ていった。悔しさが溢れ、どこか悲しそうな表情を浮かべた堀北ちゃんの顔が頭から離れない。
「大丈夫か？」
「ああ、完全に怒らせちゃったみたいだな。まぁ、俺にとってはご褒美みたいなものだからな」
須藤が心配そうに声をかけてきた。いつもなら本当にご褒美に感じるのだが、今回のはそうは思えない。やっぱりあの表情を見てしまったからだろう。
「堀北さんが怒る気持ち、少し分かる気がする」
「どういうことだ？やってきたことを無駄にされたから怒っているんだろ？」

櫛田が神妙な面持ちで俺に話しかけてきた。急に何を言い出すかと思えば、堀北ちゃんが怒っている理由なんてそれしかないだろ。しかし、俺の考えとは裏腹に、櫛田は首を横に振る。
「堀北さんは、鳴海君が退学になるから怒ってるんだよ」
「だからそう言ってるだろ。俺が退学者を出してしまったから」
「違うよ。他の誰でもない、鳴海君が退学になるから、堀北さんは怒ってるの」
櫛田は、いつにもなく真剣な目を俺に向ける。俺が退学になるから？俺が言ってることと、どう違うのだろう。
「いつもは変に鋭いくせに、自分の事となると鈍くなるよね。堀北さんは鳴海君が退学になってほしくないの。それは自分の目標の為とかポイントの為とかじゃなくて、一人の友人としてなんじゃないかな？」
「ありえないな。自慢じゃないが、堀北ちゃんに人として見られたことの方が少ないからな」
「それは本当に自慢にならないね。でも、堀北さんは鳴海君に気を許してると思う。前にも言ったけど、きっと信頼してるよ。そうじゃなければ、あの堀北さんが鳴海君みたいなウザ……騒がしい存在を許すわけないもん」
こいつ今、俺みたいなウザイ奴って言おうとしなかったか？訝しげに見やるも、胡散臭い笑顔で有耶無耶にしようとしてくる。
「と、とにかく、そういうことだよっ。それでもし、堀北さんや、綾小路君、それから……私とかが、退学になりそうだったら鳴海君はどうする？」
「理由にもよるが、理事長室に乗り込んででも退学を阻止するだろうな」
堀北ちゃんが退学なんてことになったら、俺の存在意義がなくなってしまうと言っても過言ではない。清隆や櫛田も、いなくなったら寂しいからな。
「鳴海君が思った同じことを堀北さんも感じてるんじゃないかな」
「え、俺が堀北ちゃんという存在の一部になりたいってことをか？」

「ごめん。それは違う」
真顔で即答する櫛田。無駄に期待させやがって。
「そうじゃなくて、堀北さんも鳴海君に退学してほしくないの。それなのに鳴海君は人の事ばっかりで、悔しがったり怒ったりしないでしょ。だから堀北さんは怒ってるんだよ。私だってちょっとムカついてるもん」
櫛田はそう言って、わざとらしく頬を膨らませる。
「鳴海君の退学をどうにか阻止しようとしているのに、当の鳴海君が諦めてたら怒りたくもなるよ」
「別に俺は諦めたつもりはないぞ」
「そう見えるのっ。いつもなら堀北さんと離れたくないって馬鹿みたいに喚き散らすのに、妙に静かで悟った顔してるもん」
呆れたように溜息をつく櫛田。言葉の節々に悪意を感じる。非常に腹が立つが、言っていることは正しい気がする。俺は諦めたわけではないが、今考えると冷静に対処しすぎて、退学を受け入れているように見えても仕方がないわな。
「でも、それだけ冷静ってことは何か考えがあるんだよね？それを早く堀北さんに話して、誤解を解いてきたら？」
櫛田は、「いつものお返し」と呟きながら、俺の額に軽くデコピンをした。考えがあるわけではないが、これがあいつの狙い通りの展開なら、何らか術は残されている。
「ははっ、そうだな。堀北ちゃんが寂しがってるなら俺が傍にいてあげないとな」
「別に寂しがってはいないと思うけどね」
「んじゃ、ちょいと行ってくるか。サンキュー、櫛田」
「うん。って、え？いま、名前で呼んだ!?」
「よっしゃー！待っててね堀北ちゃん！」
勢いよく教室を出ていく俺の背中に櫛田が何かを言っていたが、俺の耳には届かなかった。堀北ちゃんはおそらく茶柱先生と話をするために追いかけたはずだ。俺も急いで職員室へ向かおう。

第１３話（後編）

「鳴海の英語、そのテストの点数を、１点売ってください」
　そんな荒唐無稽な言葉が聞こえてきたのは、職員室へと続く廊下だった。私は鳴海君の退学を取り消す方法がないかを探るために茶柱先生を追ってきた。しかし、そこには先客、綾小路君がいた。廊下の角に隠れ様子を窺っていた折に綾小路君からその言葉が聞こえた。テストの点を売れなどと無理難題を投げかける彼に茶柱先生は楽しそうに高笑いをする。
「はははは。面白いことを言うな、お前は。やっぱり変わった生徒だ。まさか点数を売ってくれと言いだすとは、思いもよらなかった」
「先生は入学式の日に言ったじゃないスか。この学校の中でポイントで買えないものはないと。中間テストだって、学校の中にあるものの一つですよ」
　彼の言い分は間違ってはいないけれど、正解ではないと思う。屁理屈だと一蹴されるのが目に見えている。茶柱先生はそういう人。しかし意外にも茶柱先生の返答は好意的なものだった。
「なるほどなるほど。確かに、そういう考え方も出来なくはないな。だが、お前の手持ちで買える金額とは限らないぞ？」
「幾らで売ってもらえますか？」
「難しい質問だな。なんせ私は今まで点数を売ったことは一度もないからな。そうだな……１０万でどうだ？特別に今、この場で１０万ポイントを支払うなら、売ってやる」
　茶柱先生は意地の悪い笑みを浮かべる。私たちが入学して最初に貰ったポイントが１０万。そして、今月の？クラスのポイントは０。入学してからの一か月間、１ポイントも使わないなんてありえない。つまり実質、？クラスの生徒には不可能な提案だということ。そう、一人なら。
「今すぐ出せないというのなら、この話は終わりだ」
「ちょっと待ってください」

職員室へ帰ろうとしていた茶柱先生を呼び止めた。私は綾小路君の隣へと歩き、茶柱先生と対峙する。
「堀北か。何か用か？」
「先ほどの話です。私も出します。綾小路君と私で合わせて１０万ポイントを払えば売っていただけますね」
「盗み聞きは感心しないな」
「違います。勝手に聞こえてきただけです」
「ククク。やっぱり、お前たちは面白い存在だ」
茶柱先生は嬉しそうに笑いながら、私と綾小路君から学生証を取り上げる。何やら操作をしてから私たちに手渡す。
「お前たちから合計１０万ポイントを徴収させてもらった。これで鳴海の点数に一点を上乗せしておこう」
「では、彼は退学にはならないということですよね？」
「赤点でなければ退学にはならんからな。その件はお前たちから伝えておけ」
「本当に良いんですね？」
「約束したからには仕方がない。まさかあいつ一人のために１０万ポイントを出すとはな」
呆れながらも、どこか楽しそうに茶柱先生は言った。その言葉を聞いて私は心の中で安堵の溜息を吐いた。
「しかし、鳴海も間抜けな奴だな」
「どういう意味でしょうか」
「須藤を助けるために点数を削りすぎて赤点になるなんて間抜け以外の何者でもないだろう。良いところを見せようとした結果、足を引っ張ることになって哀れだな。お前もそう思わないか？」
「彼の行ったことが正しいかどうかは分かりかねます。ですが、彼なりに考えて行動したことを馬鹿にするつもりも、卑下するつもりもありません。私は鳴海君を哀れだとは思っていません」
「お前が鳴海の事でムキになるとは珍しいな。どうした、惚れたか？」
「……冗談は綾小路君の顔だけにしてください」
「何でオレなんだよ」

茶柱先生に茶化され、自分がムキになっていたことに気付く。適当に受け流せばいいものを、なぜか頭に血が上ってしまった。
「鳴海が退学になった方が、堀北としては静かで平和な生活ができると思うがな」
「彼がいたところで私の生活には影響はありません。ミジンコが人の生活に影響を及ぼさないのと同じことです」
「ミジンコと同じ枠組みで語ってやるなよ」
私の返答に綾小路君が呆れながらツッコミを入れてくる。別に本当の事を言ったまでよ。
「まぁいい。それより、お前にも少しは綾小路の有能さが分かったんじゃないか？」
「私には嫌味な生徒にしか見えません。ある程度テストで点数を取れるのに取らなかったり、過去問を入手することを思いつきながら、それを櫛田さんの手柄にしたり。点数を買うなんて暴挙を思いついたり。常軌を逸してるとしか思えない、嫌味な生徒です」
「酷い言われようだな」
「お前たちがいれば、上のクラスに上がることができるかもしれないな」
「彼はどうか知りませんが、私は上のクラスに上がります。鳴海君もそのために必要だと判断したまでです」
「過去にDクラスが上にあがったことは一度もない。なぜなら、お前たちは学校側から突き放された不良品（クズ）だからだ。そのお前たちが、どうやって上を目指す？」
「先生。よろしいでしょうか」
私は真っ直ぐ、茶柱先生を見つめ返す。私には、この勉強会を通して、感じたことがある。
「先生が言うように、Dクラスの生徒の多くは不良品かも知れません。けれど、クズとは違います」
「クズと不良品が、どう違うと？」
「不良品は、ほんの少し修理や変化を与えるだけで、良品へと変わる可能性を秘めています。不良品かそうでないかは紙一重だと私は思い

ます」
「なるほど。堀北からそう聞かされると、妙に説得力があるから不思議なものだ。鳴海の影響か？」
「違う、とは言いません。考えるきっかけにはなった気がします」
今まで、他人を見下し、足手まといだと決めつけていた私が、考えを変えるきっかけになったのは間違いなく彼の存在がある。それは素直に認めるわ。
「なら、楽しみにしようじゃないか。担任として、行く末を温かく見守らせて――――」
「ちょっとまったー！」
職員室へと帰ろうとした茶柱先生を呼び止める声が廊下に響き渡る。茶柱先生は「またか」とため息を漏らしていた。

「何とか間に合ったか」
「廊下は走るなよ、鳴海」
「あ、すんません」
茶柱先生に先生みたいな注意をされる。いや、先生だから当たり前なんだけど。駆け寄ってきた俺を堀北ちゃんは少し気まずそうな表情で見ている。教室でのことを気にしているのだろうか。優しくて可愛いとかやっぱ最強だな。ちなみに、清隆は相変わらずのポーカーフェイスだ。
「堀北ちゃん、さっきはごめんね。俺、堀北ちゃんに寂しい思いさせてたね」
「は？何のこと？」
「大丈夫。俺は分かってるから安心して。どうにかして退学をなくす

からさ」
「それならもう――――」
「みなまで言うな清隆。俺の察しの良さはピカイチだ。二人とも先生に直談判してくれたけど無理だったんだろ？」
「いや、だから――――」
「分かってるよ清隆。お前たちの気持ちはしっかり受け取った。後は俺に任せてくれ」
　清隆が伝えようとしてくれていることは理解した。取り付く島もないのだろう。現に堀北ちゃんはお手上げだと、額に手を当ててため息をついている。俺のために頑張ってくれたんだね。
「先生、俺の話を聞いてください。俺がどれだけ退学したくないかを！」
「いや、授業の用意をしなくてはならないから無理だ。それにもうお前は退学ではなくなっている」
「先生が何と言おうと、俺は諦めない……って、え？退学じゃない？なんで？なんでなん？」
　土下座でも何でもしてやろうと意気込んでいたが、先生の言葉に呆気にとられる。意味が分からなさ過ぎて関西弁になってしまった。別に関西にゆかりはないけど。
「もうそれは解決したのよ。あなたが来る前にね」
「マ？そうなん、清隆？」
「ああ。だからそう言おうとしたんだが」
「堀北、本当にこいつを退学にしなくてよかったのか？」
「私も選択を間違った気がしてきたところです」
　再び堀北ちゃんはため息をつく。もしかしてさっきのも俺に対して頭を抱えてたのか。つまり俺は、二人がどうにかしてくれた後にノコノコやって来て、喚き散らしだした痛い奴ってことか。控えめに言って死ねるな。
「お前に構っている暇はない。後は二人に聞け」
「あ、はい。お疲れ様でした」
　茶柱先生はそう言って職員室へ帰って行った。取り残された俺た

ちの間に何とも言えない空気が漂う。
「えっと、お二人さんが俺の退学をどうにかして下さったので？」
「そうね」
「まぁ、そうなるな」
「そんなん、どうやったん？」
「別に大したことはしてないわ。それから、その絶妙に癪に障る関西弁をやめなさい」
　いつものように汚物を見るような目で俺を見る堀北ちゃんの姿に安心感を覚える。うん、やっぱこれだよな。
「大したことないわけないじゃん。あの茶柱先生が簡単に退学を撤回するわけない」
「どうでもいいでしょ。退学はなくなった。それだけで十分よ。この話は終わりよ」
　頑なに話そうとしない堀北ちゃんは無理やり話を終わらせて歩き始める。人には言えないほどのヤバい取引でもしたのか？それなら一層の事、聞き出す必要があるんだが。
「頼むから教えて、堀北ちゃん。じゃあ良いかなんて言えるほど、厚顔無恥じゃない」
「くどいわよ。これ以上この話をするなら、あなたとは口をきかないわ」
「俺と堀北でテストの点数を１点１０万で買った。それで赤点ではなくなったから鳴海の退学がなくなったわけだ」
「なっ、綾小路君!?」
　清隆の発言に前を歩いていた堀北ちゃんが振り向く。
「あなた、どういうつもり？」
「鳴海は絶対引き下がらないし、遅かれ早かれ分かることだ。それなら黙っているより伝えた方がいい」
「それは……」
　清隆は詰め寄る堀北ちゃんを冷静にいなす。そうか、だから堀北ちゃんは俺に話そうとしなかったんだ。堀北ちゃんが俺のために大事なポイントを使ったと知れば、俺がどうなるかを心配して。

「二人とも、本当にごめん。今すぐ返すって言いたいけど、知っての通り、返せるポイントは少ない。だけど、絶対に返す」
俺は深々と頭を下げる。自分が本当に情けない。好きな女の子にこんなことさせて、何もできないなんて最低だ。
「頭を上げなさい。そんなことをしてもらうために、私は行動したわけじゃない」
「でも――――」
「でもじゃないわ。私は私のためにポイントと使った。それを鳴海君がとやかく言う権利はないし、勝手に責任を感じるなんて烏滸がましいわ。分かった？」
堀北ちゃんは俺の顔を掴んで無理やり目を合わせる。厳しくも優しい目が俺を見る。俺はその目に見惚れてしまう。
「早く返事をしなさい」
「は、はい！」
「分かったのならいいわ。教室に戻るわよ。そうだわ、綾小路君」
「ん？うぶっ！」
堀北ちゃんは清隆に近寄り、わき腹を凄い勢いでチョップした。さすがの清隆もその痛みに悶絶する。
「何すんだよ！」
「鳴海君に勝手に話した罰よ」
そう言って堀北ちゃんは清隆を放置して歩き出す。
「なぁ、清隆。あれは天使か？」
「いや、間違いなくあれは悪魔だろ」
俺と清隆は真逆の印象を抱く。堀北ちゃんが悪魔ってのは、悪魔的な可愛さがあるということなら俺も同意だ。
「二人とも、本当にありがとう」
俺は再び頭を下げる。今度は謝罪ではなく、感謝の意味を込めて。
「オレもポイントは返さなくていいが、一つ貸しな」
「お、おう」
清隆は俺の背中を軽く叩き、教室へと歩き出した。ポイントを返すよりも高くつきそうで、非常に怖い。

「乾杯！」
　池の音頭で各々が手にしたコップを合わせる。学校が終わり、その夜に堀北ちゃんの勉強会組は清隆の部屋に集まっていた。退学者が出なかった喜びからか、勉強から解放された喜びか、テンションが高い。間違いなく後者だろうな。
「祝勝会を開くことは構わないし賛成だが、なんでオレの部屋なんだ」
「俺も須藤も山内も部屋が散らかってるし、女の子の部屋ってわけにもいかないだろ？　いや、もちろん俺としては櫛田ちゃんの部屋とかがいいけどさ」
　池の下品な視線を向けられた櫛田だったが笑顔は崩さない。心の中では悪態をついているに違いない。さすがは腹黒ちゃんだ。
「だったら鳴海の部屋でもいいだろ」
「嫌だよ、散らかるし。もちろん堀北ちゃんはオッケーだよ！むしろ散らかして堀北ちゃん色に染められてほしい」
「お前、池と言ってることがほとんど変わらんからな」
　池なんかと一緒にしないでもらいたい。俺の場合は愛１００％だからな。
「それにしても、良かったぜ！鳴海が退学にならなくてさ。これで退学になったら鳴海に顔向けできねぇからな」
「何度も言ってるがお前が責任を感じる必要はない」
「ああ、本当にありがとな。堀北もありがとう」
「私は自分のためにやっただけ」
　キャラに似合わず感謝を述べる須藤と、いつも通りの冷たい反応をする堀北ちゃん。やっぱり須藤は変なものでも食ったのだろうか。
「結局、どうやって退学を取り消してもらったの？」
「さぁ、覚えてないわ」
「えー！じゃあ、綾小路くんっ」
「オレは何も知らん」

「鳴海は知ってんのか？」
「ふっ、よくぞ聞いてくれた！それは堀北ちゃんと俺の愛の力が起こした奇跡とも言える壮絶なストーリーが――――」
「やっぱ、いいわ。長くなりそうだし」
　立ち上がった俺に対して須藤が話を拒否する。須藤のくせに生意気だ。堀北ちゃんと清隆が話さない以上、本当のことは言うつもりはなかったが、この反応は腹が立つ。
「そんなことよりも、中間テストを乗り越えたくらいで、浮かれない方がいいわよ。次に待っているのは期末テスト。今回よりも更に難易度の高い問題が予想されるわ」
「また勉強地獄かぁ」
「そうならないように普段から勉強をしようと思わないのか？」
「思わない！なぁ、須藤」
「俺はできるか分かんねぇけど、少しずつやってみるわ。今回の努力を無駄にしたくねぇし」
　須藤の言葉にその場にいる全員が唖然とする。先程まで興味がなさそうに本を読んでいた堀北ちゃんも須藤を訝しげに見ている。気持ちは分かる。こいつ本当に須藤か？偽物なんじゃないか。
　その後もテストの話や、今後の話、堀北ちゃんがＡクラスを目指している話などをして、解散となった。

「おかえりなさい、幸くん」
「毎度のことながら勝手に入るなよ」
「私は気にしませんよ？」
「俺が気にすんだよ」
　部屋に帰ってくると、有栖が出迎えてくる。有栖は妹みたいな存在だから、別にいいんだが。

「すぐにお茶を入れますね」
「おう」
　当たり前のようにキッチンへ向かう有栖を尻目にベッドにダイブする。
「随分とお疲れのようですね」
「まぁなー。誰かさんに一杯食わされたからな」
「あら、私の幸くんをいじめる悪い子は誰ですか」
　キッチンから紅茶のいいにおいがする。そろそろできるころだろうと、立ち上がりティーポットとカップが乗ったトレイを受け取りに行ってテーブルに置く。
「ありがとうございます」
「ん。今日はハーブティーか」
「はい。疲れに良いですよ」
　有栖がカップに注いでくれたものを一口飲む。ハーブティーのさわやかな香りが体に染み渡るようだ。
「それで、どういうつもりだ？」
「どういうつもり、とは？」
「今さら駆け引きは必要ないだろ。お前が俺を騙したことだ」
　俺は有栖に視線を向けるが、表情は変わらず笑顔のまま。食えない奴だ。
「俺が今回赤点になった理由は点数を削りすぎたことだ。だが、俺は赤点になるギリギリに調整していた。本来なら赤点になるはずがない」
「ふふっ、そうですね。幸くんが簡単なミスをするわけがありませんから」
「じゃあ、なぜ俺は赤点になったか。それは赤点の基準を間違えていたからだ。今回のテストの基準は平均割る２。しかし、俺が聞いていたのはそれだけじゃない。赤点は４０点を超えないという追加の基準があると聞いた。有栖、お前からだ」
　昨日、有栖が部屋に来た時に、赤点の基準について俺に教えてくれていた。今回の赤点の基準は『平均割る２であるが、赤点のラインは

４０点を超えない』そう、有栖は話した。だから俺は４１点に調整した。
「まぁ、情報を鵜？みにした俺が悪いには違いないが、なぜ嘘の情報を教えた？」
「騙したわけではないです。私のクラスは実際にその基準でしたから」
「クラスごとに基準が設定されていると、お前は知らなかったと。それこそお前がそんなミスするかよ」
　有栖の能力は俺が良く知っている。それこそ清隆に匹敵するほどだろう。そんな有栖が知らなかったわけがないのだ。
「別に怒っているわけじゃない。さっきも言ったが全面的に俺が悪いんだからな」
「……幸くんが悪いんですよ」
「だからそう言ってるだろ」
　有栖は持っていたカップを置いて不敵に笑う。その笑みに背筋が凍る。
「幸くんがあの女性に現を抜かしすぎているので、ちょっと意地悪をしたくなったんです。幸くんは優しいのでギリギリまで点数を削る可能性があると思ったので」
「ちょっとって、お前なぁ。それで退学になるところだったんだぞ」
「その時は私が退学を取り消してあげる予定だったので大丈夫です。残念ながら先を越されてしまいましたが」
　有栖の言うことだから、本当に退学を取り消す方法があったのだろう。
「幸くん、私も嫉妬するんですよ。幸くんは私のものなんですから、私だけを見てもらわないと困るんです。幸くんが私から離れていくつもりならいっその事――――」
「ていっ」
「いひゃい」
　何やらどす黒いオーラを放っていた有栖に渾身のデコピンをお見舞いしてやる。有栖は涙目で額を押さえている。

「なにするんですかぁー幸くん」
「事情は分かったけど、やりすぎだ」
「だって、幸くん、最近はあまり構ってくれないじゃないですかぁ」
「もう高校生なんだから、兄離れをしなさい」
「嫌です！幸くんは、私のものです！」
　先ほどまでの威圧感は消え去り、駄々っ子のようになっている。容姿も相まって、完全に子供だ。有栖は昔から甘えん坊なのは変わらない。今回も俺が取られると思っての行動なのだろう。
「まぁ、堀北ちゃんに矛先を向けなかったのは偉いな」
「えへへ、そんなことしたら幸くんに嫌われてしまいますから」
　頭を撫でると途端に表情を綻ばせる。こうしてる分には大人しくて可愛いのにな。
「今後は勘弁してくれよ」
「それは幸くん次第です。ちゃんと構ってくださいね」
「はぁ、善処するよ」
　まぁ、有栖に嫌われたとかじゃなくてよかった。こいつを敵に回すとか考えたくもないしな。堀北ちゃんがＡクラスを目指す以上、ぶつかるのは間違いないんだけどな。
　こうして初めての試験は退学者なしで幕を閉じた。濃い一か月だったが、それだけ得るものがあったと思う。これから前途多難だが、堀北ちゃんとのバラ色の高校生活を目指して頑張ろうと改めて心に決めた。あと、適度に有栖の相手もな。

第14話

中間テストを乗り越え、堀北ちゃんとの愛が深まった今日この頃。俺は一つの悩みを抱えていた。

「じー……」

理由は全く分からんが、この数日クラスメイトである一人の女子生徒に睨まれている。睨まれているというよりは観察されていると言ったほうが正しいのかもしれない。

「……ひゃっ」

俺が勢いよく振り返ると、慌てて目をそらし顔を伏せる。それで俺が視線を外すと再度凝視してくる。あれでバレていないと思っているのだろうか。

「……っ！……ひゃうっ、あわわわ」

俺がフェイントをかけて振り返ると目がバッチリあってしまい、お手本のように慌てだし、筆箱を床に落とした。あいつの反応面白いな。もう一回やっておこう。

「あなたはさっきから何をやっているの？変な動きをしたかと思えば急に笑い出すなんて気持ちが悪すぎるわよ」

「ごめんごめん。反応が面白くってつい」

「……拾い食いでもして頭がおかしくなったの？」

「俺のこと心配してくれてるの!?堀北ちゃんは優しいね！やっぱり愛だね！」

「……頭がおかしいのは元からだったわね」

俺の奇行に物凄く怪訝な顔をする堀北ちゃん。そこにミリ単位の優しさが含まれていることを俺は知っている。堀北ちゃんはツンデレだからね。堀北しか勝たん。

かわいい堀北ちゃんは一旦置いといて、未だに慌ててあたふたしているあいつに話を戻そう。悩みを抱えているとは言ったものの、別に敵意は感じないし、好奇の視線はいつも浴びてるから全く気にならない。問題があるとすれば、堀北ちゃんが勘違いしないかだな。あの視

線を勘違いして嫉妬してしまわないかが心配でならない。それはそれで全然ありなんだが。
「そこんとこどう思うよ清隆」
「いつものことだが、唐突に意見を求めないでくれ」
「だって、心読めるだろ？」
「当然みたいに言わないでくれ。オレにそんな特殊能力はない」
本人には否定されたが、絶対読めると思う。それくらいの芸当はやってのけるのが清隆という男だ。
「過剰評価だ」
「読めてんじゃん」
「鳴海がわかり易いだけで、櫛田でもできるぞ」
「えっ、私？」
急に話を振られ櫛田は目を丸くする。こいつが俺の心を読めるわけがないだろ。この程度の人間に読まれるほど俺の心は単純じゃない。読めるものなら読んでみやがれ。バーカ。
「さすがに心は読めないけど、鳴海くんが私のことを馬鹿にしていることだけは分かる」
「……そ、そそそんなわけあるかい」
「動揺しすぎだろ」
清隆と櫛田は揃って呆れたようにため息をつく。慣れてきたのか、最近は隠そうともしない。俺はその方が好感がもてるからいいんだけど。最近は堀北ちゃん、清隆、櫛田、俺の４人でいることが増えている。まぁ、堀北ちゃんと櫛田はお互いの事を嫌っている節があるけど。
「佐倉については害はなさそうだし、放っておいたほうがいいんじゃないか」
「私もそう思うな。あまりコミュニケーションが得意じゃなさそうだし、急にこんな変じ……テンション高い人に話しかけられると戸惑っちゃうよ」
「おまえ今、変人って言おうとしただろ」
「えー？なんの事かなっ？」

ぶりっ子で誤魔化そうとしてくる櫛田にデコピンをお見舞いしておく。躾け大事、絶対。
「てか、佐倉って誰だよ」
「……鳴海が聞いてきたんだろ」
「あー、あいつが佐倉か！」
「クラスメイトの名前くらい覚えとこうよ」
合点がいって佐倉と呼ばれた少女を見る。案の定慌てて目をそらし、教科書を読んでいるフリをした。教科書が逆という典型的なボケをかましている。あれはもしかして俺を笑わせるためにわざとやってるんのではなかろうか。とんだコメディアンなのかもしれないな。
「あいつ実はコミュ力高い可能性あるんじゃね」
「何を根拠に言ってるのか検討もつかないけど、それはさすがにないんじゃないかな？」
「オレもそう思うが、見た目と中身が合ってない例を知っているからな」
「確かにそうだねー」
二人して俺を見る。俺の顔になんかついてるのかな。まさか、朝ごはんに食べたお好み焼きの青のりが歯についていたか？恥ずかしいじゃん。……もしや、佐倉もそれが気になって俺を見ていたのかもしれない。指摘したいけど傷つけることにかるかもしれないというジレンマであの状態になっているのだとしたら、あいつは良いやつだ。
「おし、確認するか」
「ちょっ、鳴海くん!?」
佐倉の方を振り向いた俺はそのまま佐倉の席へ歩みを進める。櫛田が制止してきたが、そんなので止まる俺ではない。
「おはよう、佐倉」
「ふぇっ!?えっ、あの、その……」
話しかけられるとは思っていなかったのか、激しく動揺する佐倉。なんか申し訳ない気持ちになってきた。
「一旦落ち着け。こういうときは深呼吸だ」
「え、ええと……」

「はい、吸ってー」
「すぅ～」
「吐いてー」
「ふぅ～」
「吐いてー」
「ふぅぅ～」
「更に吐いてー！己の限界を超えろ！」
「ふぅぅぅ～……きゅう」
　俺の無茶振りに素直に従い続けた結果、佐倉は力尽きた。もちろん死んだわけではなく、酸素がなくなって頭を回しただけだ。こんな無茶振りにも対応するあたり、やはり生粋のコメディアンなのかもしれない。
「落ち着いたところで朝の挨拶だな。おはよう」
「お、おはようござい……ます？」
「覇気がないなー。最初の挨拶さえ決まれば誰とでも仲良く話すことができるんだぞ」
「そ、そうなんですか!?」
「予想外の食いつきだな。まぁ、見てなさい」
　佐倉が食いついてくるとは思っていなかったが、キラキラとした目を向けられた以上、見本を見せてやるのもやぶさかではない。次に教室へ入ってきたやつに挨拶をブチかまして仲良く話してやろうではないか。そう考えていると、さっそく教室のドアが開いた。
「おっはよーございまーす！」
「フッ。この私に挨拶とは殊勝な心がけなのだよ。今日もあいも変わらず滑稽に踊っているな。愚かな道化師ボーイよ」
　よく分からないことを言って、高笑いをしながら高円寺は俺の前を通りすぎていった。なんか滅茶苦茶な悪口を言われた気がするのだが、気のせいだろうか。そういうことにしておこう。あの変人に関わるとろくなことがなさそうだ。変人で変態とか終わってんなあいつ。
「え、えっと……」
「いまのは気にするな。ただのもらい事故だ。俺に過失はない」

「は、はい」
佐倉の目のキラキラが半減したのは気のせいにしよう。気を取り直して次にいこう。たまたまDクラスの中でも最低レアリティを引いただけだ。それ以外であればなんら問題はない。自分で自分を納得させていると次の生徒が教室に入ってきた。
「グッドモーニング！」
「わぁっ、ビックリしたー。げっ、鳴海じゃん」
驚いた表情を見せた女子生徒は俺の事を認識するなり、心底嫌そうな顔をする。なんでこう、最低レアリティが続くんだろうか。
「ちっ、軽井沢かよ」
「うわ、あんた今、舌打ちした？意味分かんないんだけど」
「お前の空っぽの脳みそじゃ、理解はできんだろうな」
「はぁ？あんたこそ頭に蛆でも湧いてるんじゃない？」
俺と軽井沢の間で火花が散る。このクラスの中で相容れない存在の1位が高円寺だとしたら、こいつは堂々の2位にランクインする。
「まぁまぁ、二人とも落ち着いて。喧嘩は良くないよ」
俺たちの間に入ってきたのは、このクラスのリーダー的存在の平田だ。今日も爽やかな笑顔を浮かべているが、俺には劣るな。こいつがミントだとしたら、俺はチョコミントだ。格が違う。
「知ってるか平田、喧嘩ってのは同じレベルでしか起こらないんだ。つまり、そういうことだ」
「なに？あたしとはレベルが違うって言いたいわけ？」
「お前でもそれくらいは理解できるみたいだな」
「うざっ。馬鹿じゃないの」
「ははは、少なくともお前よりかは頭良いけどなー」
「あははっ、赤点とって退学になりかけたくせによく言うよねー」
再び軽井沢との間に火花が散る。お互いに笑顔だが目が笑っていない。それを見てか佐倉が後ろでぷるぷると震えている。
「二人ともそこらへんで――――」
「「平田（くん）は黙ってろ（て）!!」」
「えぇ……」

ハモる俺たちを見て「あいつら実は仲いいんじゃね？」とか言い出した池に殺意を込めた視線をプレゼントした。堀北ちゃんに誤解されたらどうすんだ。ちなみに堀北ちゃんは全くこっちに関心を持っていない。
「お前ら何を騒いでいる」
「おはろーん茶柱先生」
「……」
「無言はやめて下さいよ。俺が挨拶でスベったみたいじゃん」
「みたい、ではないぞ。お前は盛大に滑り倒したんだ。ご愁傷様だな。早く席につけ」
「うっす」
何なのこの人、本当に教師なの？悪い笑みを浮かべながら蔑むように話す姿からは聖職者には到底思えないんだけど。
「すまねぇ佐倉。だが、俺はこんなもんじゃない。今日は運が悪すぎただけだ。星座占いも最下位だったからな。見てないけど」
「え……う、うん」
「この借りは必ず返すから首を洗って待ってろ」
「えっ？か、借り？わ、私は何も……」
「そういうことでアディオス！」
足早に自分の席へと戻る。もうすぐ始業のチャイムが鳴る。それまでには着席をしておかなくてはならないからな。別に逃げたわけではない。断じてない。
「結局、お前は何をしに行ったんだ」
「そりゃあ……なんだっけ」
清隆のため息交じりの質問に首を傾げる。俺は何をしに行ったんだっけ。忘れるってことは大した用事じゃなかったんだろうな。そんな俺の様子を見て清隆は再度ため息を吐いた。

「一体どういうことなのかな」
昼休み、学食で頼んだラーメンをすすりながら櫛田が発した疑問を考える。事の発端は今日の朝のホームルームでの出来事だ。７月１日である今日はクラスポイントが支給される日であった。俺たちＤクラスは５月の時点でクラスポイントをゼロにしてしまい今日まで支給がされていなかった。しかし、マイナス査定の要素である遅刻や欠席、授業中の私語などを無くすことに尽力し、中間テストを乗り越えた俺たちＤクラスのクラスポイントは８７ポイントとなっていた。
「８７クラスポイント、入学時に１０００ポイントがあったことを考えるとまだまだだな」
「しかも最低１００ポイントは支給されることになってたらしいから、実質―１３ポイントだからな」
「それでも得るものはあったわ」
堀北ちゃんはそう言って、可愛い口でうどんをすする。うどんになるにはどうしたらいいのだろうか。
それは後で考えるとして、堀北ちゃんが言う『得るもの』はクラスポイントに負債がなかったということだ。今まで積み上げてきた負債がポイントをマイナスにしていなかったのだ。仮にマイナスになっていたとしたら、１００ポイントが支給されても０ポイントのままだったかもしれない。それがないと分かっただけでもかなり大きい。だが、問題はその先にある。
「なぜ、ポイントが振り込まれなかったのか」
清隆が呟いた一言に一同は頭をひねる。本来であれば８７００のプライベートポイントが生徒に配られてなければいけないのだが、残高を見ても増えてはいなかった。
「茶柱先生がトラブルで支給が遅れてて、それが解決すれば支給されるって言ってたけど……」
「最後の意味深な発言がなければ何の心配もないのにな」
「ポイントが残っていれば、ね」
あの教師は回りくどい言い回しとか、悪い笑みを浮かべるのが本当に好きだよな。中二病でも患ってるんじゃなかろうか。

「まぁ、考えても仕方がないし、なるようになるだろ。それよりもどうやったら俺が堀北ちゃんの食べているうどんになれるか考えようぜ」
「それこそ考えても仕方がないよね」
「仮になれてもその時にはお前は死んでるぞ」
「堀北ちゃんの一部になれるなら良くね？」
「私が食べる前提で話しているけど、絶対に食べないわよ。速攻ゴミ箱行きね」
「食べ物は粗末にしちゃダメだよ、堀北ちゃん」
「うんうん」
「何故、私が責められているのかしら」

「堀北ちゃんごめんね！今日は一緒に帰れないんだ！」
放課後になり帰り支度を整えているといつものごとく騒がしい男がやってくる。
「どうでもいい事を言わないでくれるかしら」
「寂しい思いをさせてごめんね」
相変わらず人の話を聞かない男ね。否定したりするほうが面倒になることはこれまでの経験で嫌というほど味わっている。放置して早急にこの場を去るのが一番ね。
「そこで、清隆！今日だけは特別に堀北ちゃんと下校をともにする栄誉を与えよう」
「は？」
私と同じように早くこの場を去ろうとしていた綾小路君に飛火がいく。また勝手なことを。
「本当に仕方がなくだからな！」
「いや、結構だ」
「そういうことで、お先に！ちゃんとエスコートするんだぞ清隆」

「おい……全く、勝手な奴だな」
綾小路君の反論を聞くことなく、鳴海くんは嵐のように過ぎ去って行った。残された私達の間に微妙な空気が流れる。余計なことをしてくれたものね。
「はぁ、帰るか」
「そうね」
どうせ帰り道は一緒だし、わざわざ断る必要もない。綾小路君については色々見極める必要もある。
「堀北も随分丸くなったな」
「……なに？馬鹿にしているの？」
「違う。悪い方向で捉えるな」
良いも悪いもないと思うのだけれど。言葉の意味が分からず、無言で睨みつけ続きを促す。
「入学当初の堀北だったら、昼飯を一緒に食べることなんて想像できたか？」
「必要があっただけに過ぎないわ」
「今だって一緒に帰ってる。前の堀北なら有無を言わさず先に帰っていたはずだ」
「……そうだとして何が言いたいのかしら」
「別に何もない。ただの雑談のようなものだ。気楽に聞き流してくれればいい」
聞き流せとは言うがその言葉を鵜呑みにしていいのか分からない。本当にただの雑談なのか、それとも別の何かがあるのか。
「気を張るだけ無駄ね」
「そういうところも丸くなったところかもな。あいつの影響か」
「うるさい。そういうあなたこそ彼に影響されてるんじゃない？」
「オレが？」
そんなことなど有り得ないとでも言いたげな反応ね。
「表情が乏しいあなたが、彼と話すときは普通の高校生みたいよ」
「オレは普通の高校生なんだが」
「本当にそう思ってるのなら笑いものね」

「オレは鳴海と違って罵倒されても喜ばんぞ」
　ある種の意趣返しのつもりでの発言だったが、嘘入っていない。他の人と話すときより表情を出している。まぁ、それは綾小路君に限った話ではないわね。彼と関わると何かが変わる。そんな馬鹿みたいな言葉が脳裏に浮かぶが、すぐさま振り払った。
「オレが変わる……ありえないな」
「何か言った？」
「いや、案外鳴海は凄い奴なのかもしれないな。人の懐に入るのが上手い」
「何も考えてないだけでしょう。警戒や用心するだけ無駄だとみんな気づいているだけね」
　自分に正直に動いて周りを巻き込みまくる嵐のような男は警戒心など寄せつけない。警戒する方が割りを食うことになる。
「それがあいつの計算の上の行動だったら？」
「それは……ないわね」
「ああ、ないな」
　神妙な面持ちからすぐに呆れ顔に変わる。綾小路君も自分で言っておきながらすぐに否定した。あの男が暗躍する姿なんて想像できないわね。

「ぶえっくしゅ！」
「あら、風邪ですか？」
「違う違う。堀北ちゃんが俺の噂してるんだよ」
「随分ピンポイントですね。ほらチーンしてください」

第15話

「鳴海！ちょっと来てくれ！」
　自室で今日の堀北ちゃんの可愛さと、未だ見ぬ未来の堀北ちゃんの可愛さに思いを馳せていたら、須藤が慌てた様子で訪ねてきた。
「なんだよ。忙しいんだけど」
「わりぃ！でも大変なことになっちまって……」
「他をあたれ。今は頭の中の堀北ちゃんを愛でるのに忙しいんだ」
「妄想してるだけじゃねぇか！俺の謝罪を返しやがれ！」
　キレのあるツッコミが返ってくる。こいつ意外とツッコミ属性か？キレながらキレのあるツッコミか……。こいつ、ボケのセンスはいまいちだな。
「何故かいわれのない評価をつけられた気がするんだが」
「き、気のせいだ」
　清隆といい、こいつら本当に心が読めるのではないだろうか。この学校はエスパー集団の集まりかよ。そもそも妄想とは人聞きの悪い。予行練習と言ってほしいものだ。ゆくゆくは愛でて愛でられる関係になるんだから。
「とにかく、付いてきてくれ。頼む」
「ういー」
「軽いな、おい」
　須藤の様子を見るに、相当切羽詰まっているようなので大人しく付いていく。俺は頼まれたら断れない男なのだ。別に須藤のためじゃないんだからね。
「……」
　すごく怪訝な顔でこちらを見る須藤。それはもう汚物を見るような目だ。ムカついたのでデコピンをお見舞いしてやった。人を汚物のように見るなんてどんな教育を受けてきたんだか。あ、堀北ちゃんは特別なので問題無し。

須藤は涙目に額を抑えながら数歩廊下を歩くと、ポケットからルームキーを取り出し、さも自分の部屋かのように鍵を開けた。
「なんで清隆の部屋の鍵持ってるんだ？あれか変態か。そういうことか」
「一人で納得してんじゃねぇよ！つーかお前にだけは変態とか言われたくねぇ」
「クラスメイトの部屋の合鍵を持ってたら犯罪者かストーカーのどっちかだろ。どっちにしろ変態だ」
「ちげぇよ！この間池とかと一緒に作ったんだよ！お前も知ってるだろ」
「どっちにしろやってることは変態と変わらんぞ」
「うるせーな！」
キレ散らかしすぎたのか、須藤は肩で息をしている。バスケ部のくせに体力ないな。そういえば以前、清隆の部屋に集まったときに三馬鹿が合鍵を作っていたな。てか、クラスメイトの部屋の合鍵作るって普通にヤバくない？非常識じゃない？俺でも分かるよ？だって俺は常識人だからね。
「人の部屋の前で何を騒いでるんだ」
「ばんわー」
須藤に軽蔑の眼差しを送っていると、部屋の中から家主である清隆が出てきた。迷惑そうな顔をする清隆を差し置き、玄関にある靴に目線がいく。女物の靴だ。
「なんだよ清隆、女連れ込んでんのかーこのこのー」
「そんなんじゃない」
「いい、みなまで言うな」
「言わせろよ」
言う必要はない。清隆も男だったということだ。ここは親友として触れずにスマートに帰ったほうが……ん？あの靴なんか見たことあるような気がする。
「あのサイズ感、そして使用感はあるがしっかりと手入れされて新品のような輝き、さらにどこか気品が漂うのは……堀北ちゃんの靴じゃ

ねぇか!!」
「なんでそれで分かんだよ!こえーよ!」
「普通に引く」
　肩で息をしていたはずの須藤から今日一番のキレツッコミがきた。根性あるじゃねぇか。さすがバスケ部。さて、外野がガヤガヤとうるさいが無視だ。正直面倒臭いなと思っていたが、堀北ちゃんがいるなら話は別。むしろ夜にも堀北ちゃんに会えるなんてご褒美以外の何物でもない。……待て、夜ということは堀北ちゃんは今、私服あるいはパジャマなんでは?
「堀北ちゃん、こんばんわ!」
「騒がしいわよ」
「ジーザス!」
　天才の如きひらめきを発揮した俺はすぐさま清隆の部屋へ突入した。そこには清隆の殺風景な部屋に光り輝く存在がいた。しかし、俺の期待とは裏腹にいつもの制服姿だった。神は俺を見捨てたのか?いや、どちらにせよ可愛いからいいか。神様今日もありがとう。
「こんな面白味も人間味もない部屋でも堀北ちゃんがいるだけで華やぐね」
「掘北を褒めるためとはいえ、酷い言われようだな」
「あら、後半はともかく、前半部分は何も間違ってはいないわよ」
「俺は本当のことしか言わん」
「オレに追い打ちする必要あったか?」
　呆れたように溜息をつきながら、清隆は台所へ向かいお茶を入れてくれた、おもてなしの心を持つ奴に悪い奴はいない。
「みんな揃ったことだし、お話を聞いてもいいかな?」
「なんだいたのか」
「いたよ!鳴海君より先にいたよ!」
　こちらもいいツッコミをすることで定評がある櫛田がいた。堀北ちゃんの輝きでかすんでいたが、どうやらこいつも須藤に呼ばれていたらしい。
「櫛田も怒鳴ったりするんだな。意外だ」

「えっ？いや、これは鳴海君だけっていうか、その」
「めっちゃわかるぜ！こいつの訳の分かんねぇ発言に苦労させられるよな」
「そう！本当にそうなの！やることなすこと奇天烈すぎて、ほんっとうに大変で」
　なぜか意気投合しだす二人、そして会話に参加せずとも同じ意見だと言わんばかりに頷く堀北ちゃんと清隆。解せぬ。俺が何をしたというのか。
「須藤君、そろそろ本題に移りましょう」
「ああ。俺が今日担任に呼び出されたのは知ってるよな？　それで、その……俺、もしかしたら停学になるかも知れない」
「どんまい、お疲れ」
「話の腰を折らないで頂戴」
「はい、すんません」
　堀北ちゃんに注意された俺には意にも介さず須藤は話をつづけた。
「実は俺、昨日Ｃクラスの連中を殴っちまってよ。それでさっき停学にするかもって言われて……。今、その処分待ちだ」
「殴った？何か理由があったの？」
「先に喧嘩を吹っかけてきたＣクラスの連中だ。俺はそれを返り討ちにしただけだっての。そしたらあいつら俺が喧嘩を売ったことにしやがったんだ。虚偽申告って奴だ」
「それだけじゃよく分からん。落ち着いて最初から話せ」
　須藤は頭の整理がついてないのか、はたまた興奮してか話の内容が伝わってこない。これだけでは情報が少なすぎる。堀北ちゃんも俺と同じ判断なのか黙って須藤に話を促した。
「わりぃ。ええっと、昨日、部活の時に、顧問の先生から、夏の大会でレギュラーとして迎え入れるっつー話をされたんだよ」
「レギュラーって凄いね！おめでとう」
「まだ決まったわけじゃないんだけどな。その可能性があるっつーだけで」
「それでも、かなり強豪と言われてるうちの部活で１年からレギュ

ラーは凄いな。まぁ、それも意味はなくなりそうだが」
「うっ」
「鳴海君」
「すいやせん」
　話が進まないから黙っとけという意味が込められた一言にお口にチャックをする。
「その帰りに同じバスケ部の小宮と近藤が俺を特別棟に呼び出しやがった。無視してもよかったんだが、バスケ部の二人とは部活中にも度々言いあってたからいい加減ケリつけてやろうと思って。もちろん話し合いでだぜ？　そしたら石崎ってヤツがそこで待ってやがったんだ。小宮と近藤はそいつらのダチでよ、Ｄクラスの俺がレギュラーに選ばれそうなのが我慢ならなかったんだと。痛い目みたくなけりゃバスケ部を辞めろと脅してきやがった。そんでそれを断ったら殴り掛かってきたから……」
「それで殴り返したのね」
「いや、その時はここでやり返すとまずいと思ってよけるだけにしたんだ。お前らに、特に鳴海に申し訳ねぇと思ってな」
「俺？なんで？」
「そりゃ、勉強会で世話になったし、俺のせいで退学になりかけたし……とにかく、こんな俺でも恩は感じてんだよ」
「なにそれ気持ち悪。キャラじゃないだろ」
「んだとてめぇ！やんのかコラ」
「まぁまぁ、落ち着いて」
　憤って立ち上がった須藤を櫛田が宥める。おかしい、須藤がこんないい奴なわけがない。マジで人格入れ替わったんじゃなかろうか。
「今の話だと須藤は殴ってないようだが、どうなったんだ」
「そ、それは……最初は我慢してたんだ、そしたらあいつら俺を挑発してきやがって」
「挑発？何を言われたの」
「……鳴海や堀北を馬鹿にされたんだよ。こんなクズを助けようとするなんてあいつらもクズだって、それでカッとなって……殴り返しち

まった。それで先生たちにチクりやがったんだ」
「馬鹿ね」
「うん、馬鹿だな」
　理由を聞いて堀北ちゃんと俺は揃ってため息をついた。そんなことでキレて殴りかかるなんて馬鹿以外の何者でもない。というかこいつは本当に須藤か？やっぱ偽物か？
「馬鹿だなんてひどいよ二人とも！二人のために怒ってくれたんでしょ？」
「それで殴って停学になりかけてるんだから世話ねぇよな」
「鳴海君の言う通りね。理由はどうであれ殴ってしまったのは愚行と言わざるを得ないわ」
「ぐっ、すまねぇ」
　須藤も重々承知なのかがっくりと項垂れた。これが漫画やドラマの世界であれば友人を馬鹿にされて怒ることは美談になり得るだろうが、現実はそんなことはない。暴行というのは重いものだし、その行為には間違いなく責任が伴う。
「けど、その気持ちだけは悪い気はしない。それに以前の須藤ならすぐにやり返して、俺は悪くないと言い張って反省なんてしなかっただろう。まぁ、聞く限りでは正当防衛ではあるしな」
「鳴海……」
「だが、結局のところ普段の行いが祟ってか、その話は教師たちには信用されなかったんだろ？自業自得だな」
「クソ、ぐうの音も出ねぇ」
「そ、それなら私たちで先生に説明したらいいんじゃない？」
「無駄ね。確たる証拠もなければ、いわば身内である私たちが説明したところで意味をなさないわ」
　堀北ちゃんの言う通りだ。いくら櫛田が外面が良くて先生からの評判が高くても、同じDクラスの人間というだけでその証言の信ぴょう性は低下する。仮に須藤が停学になって困るのはクラスメイトである俺たちなのだから。
「オレたちが須藤をかばってもポイントを減らされたくない嘘としか

捉えられない。それに相手には須藤に殴られたという証拠があるが、須藤には殴りかかられたという証拠はない。現状、須藤に勝ち目はないだろうな」
「そんな……じゃあ、Cクラスの3人に正直に話してくれるよう頼んでみようよ。悪いと思ってるならきっと罪悪感でいっぱいなんじゃないかな？」
「あいつらはそんなタマじゃねぇよ」
「あちらが学校側に問題を報告している以上、その気はさらさらないでしょうね」
　ふと疑問に思ったのは、彼らはなぜ学校側に被害を訴えたのかだ。須藤がレギュラーに選ばれたことが気に食わなくてわざわざ呼び出すような奴らだ。相当プライドが高いと思われる。それなのに、三人がかりで仕掛けて返り討ちにあったのにもかかわらず、あっさり引き返し、尚且つ先生に泣きつく？彼らのプライドがそれを許すだろうか。この事件が公になれば須藤の評判もさることながら、彼らの評判だって落ちるだろう。それを許せるような人間か？ただ単に考えもなしに突発的に動いてしまっただけの馬鹿なだけなのか。あるいは最初から計画されたものなのか。
「じー」
「なんだよ珍しいものを見たような顔しやがって」
「だって鳴海君が真剣に考えこんでるなんて珍しいじゃん。いつも何も考えず本能で動くサルみたいなのにね」
「誰がサルじゃ！普段の俺も冷静沈着、超クール系男子だろうが。ね、堀北ちゃん」
「そうね、サルではないはね。だってあなたと一緒だなんてサルが可哀想だもの」
「ほらみろ、俺はサルじゃない、もっと特別な存在だって堀北ちゃんも言ってるだろ」
「お前の耳は都合がよすぎるな」
「はぁ、話を戻すわよ」
　お決まりの溜息を堀北ちゃんが吐く。溜息は幸せが逃げるらしい

からその分俺が幸せを運んであげなければな。……昔のくせで考え込んでしまった。そんなの俺のキャラじゃないな。飄々と気の向くままに、それが鳴海幸だ。
「証拠かー。須藤君、何かないのかな？」
「もしかしたら俺の勘違いかも知れないんだけどよ……。あいつらと喧嘩してた時妙に気配を感じたっつーか、傍に誰かいた気がするんだよな」
「それは、目撃者がいたかもしれないということかしら」
「ああ。でもハッキリと姿を見たわけじゃねぇんだよ」
「なんとも要領を得ないな」
「だが、一番可能性があるのはその目撃者を見つけ出すことだろうな。清隆、茶のおかわりくれ。あと甘いもの」
「図々しい奴だな。茶はあるが甘いものなんてないぞ」
　そう言いながらも茶のおかわりを入れに行ってくれる。極限まで無駄を省いた清隆の部屋に甘いものなどあるわけがないか。飯とかもサプリで済ませてそう。
「ちゃんと飯は食った方がいいぞ」
「急に何の話だ。その、哀れんだ目をやめろ」
　清隆から茶を受け取り、すする。うん、普通のお茶だ。
「あのよ、こんなこと言える立場じゃないってのは分かってるんだけどよ」
「分かってるなら言うな」
「いや、せめて聞いてあげようよ」
「今回の件、誰には言わねーでくれないか。噂が広まるとバスケ部の耳にも入るだろ。俺からバスケ取り上げたら何も残らないんだよ。ようやく掴んだチャンスなんだ。頼む」
　そう言って須藤は頭を下げた。彼なりに部活には真摯に向き合っていることが伝わってくる。俺らが言わなくても十中八九、バスケ部の顧問の耳にははいるはずだ。だからこそ俺らがむやみに噂を広める必要はない。
「時間の問題ではあるだろうけど、極力広まらないように気を付ける。

それでいいかな堀北ちゃん」
「ええ、わざわざ広める必要はないもの。取り敢えず、目撃者を探すとして、須藤君は関わらない方がいいわね」
「だな、当事者が動くのは得策ではない」
「でもよ、お前らに押し付けるわけには……」
「下手に動かれてまた問題を起こされると困るんだよ。分かったら大人しくしとけ」
「うっ、わりぃ頼むわ」
　須藤は自分が関わると余計にややこしくなることを理解したのか、がっくりと項垂れた。須藤ってこんな殊勝な奴だったか？何度も言うが人格入れ替わってるんじゃね。
「じゃあ、今日はこれで解散かな？明日から頑張ろうね」
「おう、頑張れ」
「なんで他人事!?」
「いや、冷静に考えてみろ、残るメンバーは清隆と堀北ちゃんだぞ。他クラスに友達はおろか知り合いだっているわけがないだろ」
「はっ、確かに……」
「納得されるのも癪だが、何も言い返せないな」
「……別に聞き込みくらい知り合いがいなくてもできるでしょう」
　こころなしか堀北ちゃんの声が細く聞こえた。ついでに清隆もダメージを受けていた。こればかりは本性はどうあれ、顔が広い櫛田が役に立つ。それに堀北ちゃんの分は俺が働けばいい。というか堀北ちゃんみたいな超絶美人に話しかけられたら、その辺のモブ男子なんて緊張で話せないだろうし、変に勘違いして堀北ちゃんのストーカーになられても困る。堀北ちゃんは俺が守らなければ。いわば堀北ちゃんは姫で俺は騎士。
「というわけで、姫、俺とディナーでもどうだい？」
「……堀北さんならもう帰ったよ」
「ジーザス！」
　膝から崩れ落ちた俺を横目に今度こそ解散となった。

「ただいまですよっと」
「おかえりなさい、幸くん。ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも……ふふっ。幸くんったらおませさんですね」
自室に帰るとなぜか鍵が開いており、なぜかエプロンを付けた美少女が部屋にいた。この現状に驚かなくなっている自分に恐怖を覚えながらも、俺はご飯を選択したのだった。